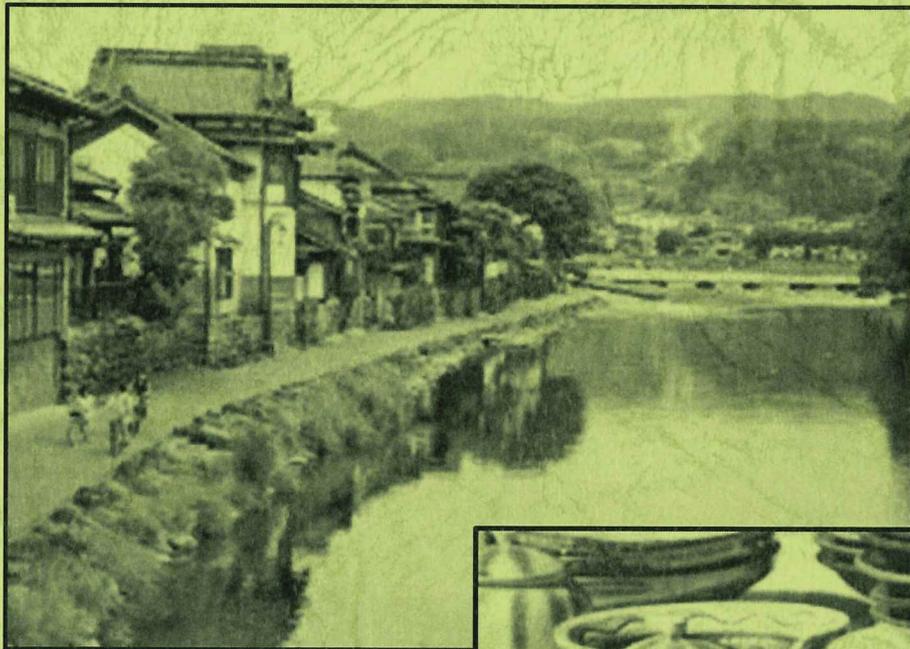


第51集

# 中学校長会研究集録



水郷 日田市 小鹿田焼

大分県中学校長会

## 第51集大分県中学校長会研究集録発刊に当たって

本年度の全日本中学校長会総会では、大きく3本の柱で話が始まりました。「次期改訂指導要領に関わる取組」、「部活動改革に関わる取組」、「教師の確保・育成」についてです。この内容についてここでは子細に触れませんが、今、この国を取り巻く様々な状況に直面する生徒や教職員にとって、少しでも良い環境づくりを目指すことが、我々校長会に課せられた使命であらうと感じます。

「Society 5.0」で活躍する人材の育成、情報化・グローバル化が加速度的に進展し急激かつ複雑に変化する新しい時代に求められる資質・能力の育成、「社会に開かれた教育課程」の実現や、いじめ・不登校への対応、ICT活用指導力の向上、特別支援教育の充実等、様々な教育課題を抱え、学校教育においては全ての子どもたちの可能性を引き出す「個別最適な学び」や「協働的な学び」の実現、子どもたちが安心して学ぶことができる「誰一人取り残されない学び」の保障に向けた多様な学びの場の確保が求められています。第4期教育振興基本計画では、「2040年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成」、「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」が計画のコンセプトとして位置づけられています。

こうした中、令和7年6月27日には、大分県下の校長が一堂に会し第71回大分県中学校長研究大会日田大会が、日田市立大山中学校校長 三笠淳一 実行委員長を中心とし、「日田市複合文化施設AOSE（アオーゼ）」の会場で開催されました。全分科会において発表者の各校長から具体的な実践報告と提案を受け、活発な全体協議やグループ討議、意見交換等がなされました。交わされた論議は、現場となる各中学校における実践の深化・発展に大いに寄与するものとなることを期待しています。この研究大会が、大分県中学校長会の運営方針を体現する重要な場であると改めて感じたところです。日田大会は、小鹿田焼協同組合理事長 坂本工 氏による講演も含め大盛況の内に終えることができました。日田大会の運営に当たりましては、日田市中校長会の皆様方に多大なご尽力を賜りましたこと、改めて深く感謝申し上げます。

また、令和7年8月21・22日には、第76回全九州中学校長研究大会熊本大会が開催され、第2分科会にて国東市立志成学園 丹田康彦 校長、第5分科会にて豊後大野市立緒方中学校 弓削直幸 校長にご提案いただきました。お忙しい中にご準備をいただきましたこと、深く感謝申し上げます。大分県の代表としてなされた具体的な実践報告や提案や問題提起が、九州・全国各地から参加した校長により活発に議論されました。この取組が、九州・全国の実践の深化・発展に寄与されていくものと確信しており、大分県中学校長会の研究の継続と今後の発展にもつながるものと考えています。また、本年度は、本県からの発表はございませんでしたが、令和7年10月23・24日には第76回全日本中学校長会研究協議会香川大会が開催されております。

こうした1年間の取組を振り返りますと、来年度以降におきましても、校長としての経営感覚を磨き、未来志向の教育改革推進と直面する諸課題の解決に向け、強いリーダーシップを発揮する中学校教育の先陣として、大分県中学校長会が一丸となって研究・実践に努めなければならないと考えております。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

結びになりましたが、今年度の研究推進に当たり、教育委員会関係者の皆様方をはじめ、各郡市中学校長、郡市研究部長の皆様方の誠意あるご協力に心より感謝申し上げます。

また、研究大会や研究部長会、各郡市の真摯な取組の記録である本集録を、それぞれの学校経営にご活用いただきますようお願い申し上げ、研究集録発刊の挨拶といたします。

大分県中学校長会の皆様方、本年度もご理解・ご協力をいただき、誠にありがとうございました。

大分県中学校長会 研究部長 糸永 秀章  
(大分市立城南中学 校長)

# 目 次

## 第1部 郡市地区校長会 研究のまとめ

1	中津市	1
	主体的・対話的で深い学びの実現 ～「みんな活躍授業」を通して～ 代表執筆者 中津市立今津中学校 校長 安部 友善	
2	豊後高田市	6
	学校と地域の連携・協働による「チーム学校」と「働き方改革」の実現 代表執筆者 豊後高田市立香々地中学校 校長 明石 哲也	
3	宇佐市	9
	芯の通った学校組織の確立と人材育成 代表執筆者 宇佐市立院内中学校 校長 宇都宮 忠	
4	別府市	13
	報告「教職員に感謝する会」 ～10.5「教師の日」の取組として～ 代表執筆者 別府市立朝日中学校 校長 武野 太	
5	杵築市	16
	学校と地域の連携・協働 ～「地域人材等活用計画」を核にして～ 代表執筆者 杵築市立山香中学校 校長 真砂 一也	
6	速見郡	19
	学校と地域の連携・協働による「地域とともにある学校」の実現 代表執筆者 日出町立大神中学校 校長 河野 理	
7	くにさき地区	21
	「主体的・対話的で深い学び」の実現 代表執筆者 国東市立志成学園 校長 丹田 康彦	
8	大分市	26
	豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育 代表執筆者 大分市立鶴崎中学校 校長 池田 憲彦	
9	臼杵市	32
	教員の資質・能力の向上に向けた組織的な研修 ～臼杵市SD研修を通して～ 代表執筆者 臼杵市立北中学校 校長 戸高 浩二	
10	津久見市	35
	開校2年目における保護者と地域との連携のあり方について 代表執筆者 津久見市立津久見中学校 校長 大石 琢磨	
11	由布市	37
	由布市型人材育成教育の推進 ～3つの柱を中心とした取組を通して～ 代表執筆者 由布市立湯布院中学校 校長 麻生 久	
12	佐伯市	40
	令和8年度以降の部活動地域展開に向けての取組 代表執筆者 佐伯市立直川中学校 校長 日高 みつほ	

13	竹田市	-----	43
	主体的に学び、未来を創造する生徒の育成		
	代表執筆者	竹田市立竹田南部中学校	校長 阿南正樹
14	豊後大野市	-----	45
	ふるさとを愛し、主体的に未来を切り拓く子どもの育成を目指す		
	計画的・組織的な小中一貫教育の推進		
	代表執筆者	豊後大野市立清川中学校	校長 野尻秀信
15	日田市	-----	50
	不登校生徒への対応の在り方について		
	～事例を通して～		
	代表執筆者	日田市立東部中学校	校長 吉野祐之
16	玖珠郡	-----	54
	玖珠郡校長会における研修会の取組		
	代表執筆者	玖珠町立くす若草小中学校	校長 小原 猛

## 第2部 研究部長会 研究のまとめ

1	第1班	-----	57
	テーマ：「主体的・対話的で深い学び」の実現		
	班長	河野 理 (速見郡)	
	班員	武野 太 (別府市)	真砂 一也 (杵築市)
		丹田 康彦 (くにさき地区)	
2	第2班	-----	61
	テーマ：不登校生への支援について		
	班長	阿南正樹 (竹田市)	
	班員	小原 猛 (玖珠郡)	西村博之 (日田市)
		日高 みつほ (佐伯市)	
3	第3班	-----	65
	テーマ：「令和の日本型学校教育」を担う教師の育成		
	班長	安部 友善 (中津市)	
	班員	明石 哲也 (豊後高田市)	今永 英俊 (宇佐市)
		野尻 秀信 (豊後大野市)	
4	第4班	-----	68
	テーマ：チームとしての学校と地域の連携・協力体制の在り方		
	班長	池田 憲彦 (大分市)	
	班員	麻生 久 (由布市)	大石 琢磨 (津久見市)
		戸高 浩二 (臼杵市)	安東 俊英 (大分市)

## 第3部 令和7年度研究大会のまとめ

第71回大分県中学校長研究大会	日田大会	-----	72
第76回全九州中学校長研究大会	熊本大会	-----	81
第76回全日本中学校長会研究協議会	香川大会	-----	84

## 第4部 令和8年度研究大会の案内

大分県・九州・全国の研究大会	-----	91
----------------	-------	----

# 主体的・対話的で深い学びの実現

～「みんな活躍授業」を通して～

中津市立今津中学校 校長 安部 友善

## 1. はじめに

中津市では主体的・対話的で深い学びの実現を目指して、すべての生徒が主体的に学び考えを深める授業を「みんな活躍授業」と称してその推進に取り組んできた。その基本は、

- すべての子どもが学びに向かうスタンダード化された授業（主体的学び）
- お互いを認め合う風土の中で学びをすすめる授業（対話的学び）
- 学び方を学ぶための授業（深い学び）

である。

令和元年より、中学校校区ごとに推進ブロックが市教育委員会によって指定され、授業公開等を行いながら研究を進めてきた。

「みんな活躍授業ステージⅢ」として昨年度から推進ブロックに指定された三光中学校校区の三光中学校の実践を取り上げ報告する。

## 2. 現状と課題

「みんな活躍授業」を推進する中で、市全体としては以下のような成果と課題が生じてきた。

### ○成果

- ・みんな活躍授業を肯定的にとらえる児童生徒の割合の増加
- ・対話を取り入れた授業の広がり
- ・各教科における愛好度が県平均を上回る傾向

### ○課題

- ・学力調査におけるC層の児童生徒の割合が微増
- ・自分一人で粘り強く問題解決にあたる意識が低い傾向
- ・活動のねらいを理解せず、手段が目的となっている教員が一定数いる

今年度、上記の課題も引き受けながら三光中学校の実践・研究が行われている。

## 3. 研究内容

### (1) 三光中学校での実践（2024年度）

#### ① 取り組み

- 授業開始5分程度を帯活動として設定し、基礎基本の定着を図るための実践を行う。
- 主体的に学ぶ姿勢を育むために、1人1人に役割をもたせたペア・グループ活動の実践を行う。
- 板書の構造化と見通しのもてる授業計画を生徒に示す。
- コミュニケーションシートの部分的活用。
- 学力定着のための「知識習得型授業」と、生徒自身が自ら学びに向かい、ともに課題を解決できる「生徒主体型授業」を単元の中で分けて実践。

#### ② 成果と課題

##### 【成果】

- 「友達に自分の思いを伝えたり、友達の思いを聞いたりすることで、自分の考えが広がったり深まったりした」という生徒が増えた。
- コミュニケーション活動が生徒の学びにとって有意義なものであることがわかった。

##### 【課題】

- お互いの考えを伝えても受け止めてくれるという雰囲気がないと、話し合い活動はただの伝えたいになってしまい、深まりのある活動にはならないということが見えてきた。

### (2) 三光中学校での実践（2025年度）

#### ① 取り組み

- 課題を受けて、2025年度のテーマを「互いを認め合い、主体的に学びを深められるコミュニケーション活動の充実」と設定した。学校全体として取り組むことは、以下、具体的実践である。

## 《人間関係づくりプログラムの実践》

新年度第1回目の職員研修で、人間関係づくりプログラムを教員間で行うことで、活動しているイメージをもってもらえるようにした。この時に行ったエクササイズは、「アドジャン」だったが、すべての教員が「自分の思いを伝えることができた」「周りの人に自分の考えを聞いてもらえたと感じた」という事後アンケート項目で、肯定的評価100%であった。自らが活動したことで、生徒たちが活動を通してどのような気持ちになるのかを実感できたようだった。

新学期の学級づくりの際には「他己紹介」を、第1回のコミュニケーションタイムは「すごろくトーク」を行った。また、第2～3回は「アドジャン」を、テーマを変えて行い、第5～6回は「探偵ゲーム」を、テーマを変えて行った。活動する前には、各学年の担当教員がリーダーを集めて活動の説明と確認を行いしっかりと準備を行った。活動の際には、学習リーダーのような役割をリーダーたちに担わせグループ活動や全体の活動を行った。また、毎回の活動時には「1 お願いします&ありがとう」「2 笑顔で」「3 うなずく&相槌を打つ」「4 質問」という4つのルールを確認し意識させることにした。活動後は、生徒たちに振り返りを書かせているが、その振り返りにも回を重ねるごとに変化がみられるようになった。

第1回では、「7年以上一緒にいるのにまだ知らないことがたくさん見つかった」「目を見て話してくれた」「みんなが優しく、認めてくれた」「共感するときうなずいてくれたから話しやすかった」というように、活動に対しての感想が多かった。しかし回を重ねていくと「じっとしている時間がないほど皆と話せた」「クラス全員と話ことができ今以上に仲が良くなったと感じる」「会話が上手になったと感じた」「会話する雰囲気が更に

よくなって楽しかった」「人と話すのが楽しいと思えた」というように、人と関わることにに対する視点が多くなり気持ちも変化していったことがわかる。

このように、生徒の対話に対してのモチベーションが変わっていったことで生徒同士の距離が少しずつではあるが縮まっていったと感じている。そしてその雰囲気、授業での話し合い活動へとつながっていくということも感じた。

## 《ファシリテーターの育成》

本校では、「体育大会」や「合唱祭」など行事は、実行委員会が練習計画を立案したり運営や準備、話し合ったりするなど生徒主導で行うシステムを作っている。そのため、リーダーの指導は特に力を入れなければならないが、そこが行事の責任者だけに任せっぱなしのところがあった。そのため、学年の担当者が必ず実行委員会に参加し行事責任者と情報共有を行いながら指導にあたるということを行い教師内の協力体制を整えていった。また、学校全体でのシステムづくりを行うために、6月に全校リーダー会を行い今年度の取り組みを説明した後リーダーたちの意識改革を促した。その後は学年の担当者を中心にファシリテーターの指導を学年の実態に応じて行ってきてことで、少しずつではあるが総合や学活などを生徒主導で行えるようになってきている。特に2年生は、修学旅行を控えているため、その準備はすべて実行委員会でリーダーへ指導を行いリーダーが中心となって進めている。また、生活改善プロジェクトやルール作りも自分たちで行っており、それを学級会の議題としクラスの意見を募り最終決定していくという流れを取り入れていった。学級会は頻繁に実施し活発に意見交流が行われている。「自分たちで決めたことを自分たちで守っていこう」という生徒発信型のシステムに変更していった。この活動を通して、

リーダーたちの意識が高まり自分たちで考えて行動したり臨機応変な対応ができるようになったりと、成長が見られた。また、フォロワーがリーダーと共に呼びかけを行ったり協力したりする姿が増えた。ファシリテーター（学習リーダー）が活躍する場面を増やしたことで、今では総合や学活の前には、自分たちで班隊形を作りリーダーたちが今日の流れと課題について説明を行っている姿が見られるようになった。教師の出番もほとんどなくなっている。教師の事前準備やリーダーへの事前指導のために放課後の時間をかけることにはなるが、それを惜しまず丁寧に行ったことで生徒主体型の活動ができるようになってきている。

#### 《研修や模擬授業で得た学び》

今年度の職員研修は、教師一人一人の意識改革に力を入れることにした。日々の授業実践の中で取り入れられそうなものを互いに交流するだけでなく、模擬授業やロールプレイなどの実践形式の研修を多く取り入れることで、生徒の立場に立って自らの実践を振り返り改善していくことに力を入れた。

○人間関係プログラムについて

○みんな活躍授業 模擬授業

○ジグソー法を取り入れた、みんな活躍授業を実践するうえでの悩み解決

○互見授業週間の振り返り

○みんな活躍授業実践のための指導案検討

このように定期的に30分から1時間程度の研修を月1回程度行い、そこでの学びをその後の授業実践に取り入れていくようにしていった。また、互見授業週間中は生徒主体の授業を行う日を職員室のホワイトボードに書き込むことで全職員に公開していることを知らせる工夫を行った。また、「1日1回15分」を合言葉に、無理のない範囲で互いの授業を参観しに行くように心がけた。多くの先生方が協力して下さったおかげで、積極的な授業公開と

授業参観ができ、多くの学びを得ることができたと感じた。

#### 《現在に至るまでの授業実践》

「人間関係づくりプログラムの実践」と「ファシリテーターの育成」、そして「教師の意識改革のための研修」という3つの大きな柱でこれまで取り組んできた。とりわけ「教師の意識改革」という点では、研修を重ねるたびに各教科の実践に変化が見られた。以下に示したのは、「今までの職員研修で学んだことの中で取り入れられそうなことを実践に加えてほしい」という研究主任からの話を受けての実践である。取り入れたことに加え成果と課題も記述してもらったのだが、そこからわかることは教員の授業準備に対する意識の変化に加え、生徒の様子をより観察したからこそわかる改善点が出されていることであった。少しずつではあるが、教師自身が授業に対する意識を変えようとしていることを実感できた。

【国語】1年国語「大人になれなかった弟たちに……」で、ジグソー法を取り入れた。たくさんの意見が交流させることができたが、班活動がスムーズに進まなかったので、改善が必要だと思った。

【社会】2年社会「関東地方の産業」で、複数の資料を読み取る活動を交流活動を通して、資料同士を関連づけてまとめることができた。資料の読み取りが苦手な生徒でも、1つの資料だけでも読み取ることができたら、交流活動に参加することができた。

【数学】2年数学で角度を求めるときにジグソー法を試みたが、いまいちうまく回らず全員理解までは行かなかった。

3年数学「関数  $y = ax^2$ 」で、ジグソー法を取り入れた活動を行った。考えを深めることができていたが、グループの人数や学力差の調整がうまくいかなかったの

で、適切なやり方を模索していきたい。

【理科】 演示実験ではなく、できるだけ1人1実験に近い形を目指した。原子モデルは黒板に貼って説明することが多かったが、1人1セット原子モデルカードを形成して取り組ませた。

記録タイマーを使って斜面や水平線での運動の実験についてジグソー法で取り組ませた。実験準備が足りず、スムーズにできなかったところもあったが、同時に5つの実験をすることで比較ができ、生徒も見通しをもって授業に臨めたと思う。

【英語】 2年英語で「自分のおすすめ屋台料理を考えさせよう」の授業で班活動を取り入れてまとまりのある英文をキーワードや日本語の文をヒントに作らせた。生徒にとって身近なトピックだったので、意欲的にやってはいたが、英語が得意な生徒の文をただ書いているだけの生徒も見られたので、どの文を考えるか役割分担をして、しっかりと考える時間を持たせる工夫が必要だと感じた。

3年英語でALTのことをよく知るためにインタビューをするという活動を行った際にALTに尋ねる内容をどのように言ったらいいのかを考えさせるためにジグソー法を取り入れた。生徒はまだALTのことをよく知らないので意欲的だった。ただし、書いた英文をお互いにただ読み上げるだけという姿も見られたため指示をより明確にする必要があった。リーダー役がいなかったためまとまりがなかった。分担してインタビューの英文を完成させるため、英語に苦手意識のある生徒にはよかったのかもしれない。

【保体】 保健の授業で、ジグソー法を取り入れた。意見の交流はそれな

れりにできたが、考えさせる内容が大枠過ぎたため、もう少し明確にしたほうがより活発に交流ができたと感じた。体育の授業でジグソー法を使って考えさせる場面を作ったが、活動時間が短くなるため難しいと感じた。班での交流でも明確な役割分担と指示がないと動かないと感じることが多かった。

【音楽】 合唱祭に向けてのパート練習で、パートリーダーを中心に活動させることができた。指示を的確に出すことはできるようになったが、練習の後に反省をスラスラ言えるようになればもっと良いと感じる。これから実践していく予定。

【栄養】 2年生の家庭科で献立作成の授業を2時間行った。班活動やぶらぶらタイムを取り入れた。班活動では意見交流ができ、ぶらぶらタイムでは他の班の考えを気付きにつなげることができているように感じた。交流活動をスムーズに行うためには、役割分担や活動内容など、明確な指示が必要だと感じた。小学校の授業でも、本時の流れを指示したり、今までは班活動のみだった内容にぶらぶらタイムを加えるようにしたりした。

## ② 2年目の成果と課題

教師のアンケートで、「**自分の授業に対する考えや、教材研究などに変化がありましたか**」という項目に対して、すべての教員が肯定的評価であった。どのような変化があったかという質問に対しては、「授業の流れや振り返りをどのようにするか考えるようになった。」「生徒主体の授業をする際は、生徒がどのようにねらいを達成できるか深く考えた。」「交流活動での役割分担や内容をより明確に指示するよう心がけるようになった。」「できるだけ自分が説明するのをなくした。すると班だけでなく、ペア、ぶらぶらタイムを通して生徒の人間関係がわかるようになった。」という回答が

あり、教師自身が授業に対しての考え方を  
変えて行った様子と、それによって気  
づきがあったことがわかる。

また、「生徒たちの様子に変化があり  
ましたか」という項目に対して、すべての  
教員が「変化があった」と回答してい  
る。生徒に変化があった場面を書いても  
らったところ「自分たちで課題を解決し  
ようとする姿が見られるようになった」  
「グループでの話し合い活動がスムーズ  
になったような気がする」「短時間で結  
論が出るようになった」「普段、交流活  
動で自分から動くことができていなかっ  
た生徒が自分から立ち上がり、友達のと  
ころに交流活動に行く様子が見られるよ  
うになった。」「交流活動で、自分の役  
割分担をしっかりとするようになった。」  
ということを実感していた。一方で生徒  
のアンケートを見ると「コミュニケーション  
活動を行うようになってから、班活  
動（班の雰囲気）がどのように変化し  
ましたか。」という項目に対して、「と  
ても活発になった 34.1%」「以前に比  
べると活発になった 47.8%」という結  
果で、肯定的評価は約82%になっている。  
主な理由を見ると、「自分から意見を出  
したり、自分から話かけたりすることが  
多くなった」「どんな人なのかかわから  
ないということがコミュニケーションタイ  
ムで解消された」「以前に比べて雰  
囲気がよくなったと思う」「班の雰  
囲気が柔らかくて発言がしやすかった」と  
いうものが多く、コミュニケーション活  
動をきっかけに話のきっかけができたこ  
とや、話しやすい雰囲気に変化している  
ことがわかる。

また、「コミュニケーション活動を行  
うようになってから、班活動やペア活  
動、ぶらぶらタイムなどで、あなたはどの  
くらい意欲的に取り組むようになりました  
か。」という項目に対しては、「とても  
意欲的になった 33.3%」「以前に比  
べると意欲的になった 50.4%」という結  
果で、肯定的評価は約84%になっている。  
主な理由を見ると、「コミュニケーション  
タイムを通して、他の人に興味を持てる

ようになった」「他の人の意見を見ると、  
必ず『あー確かに』という意見を見つけ  
出せる」「クラスメイトのことを、なん  
か意外と良い人だなと気づいた」「みん  
ながどのように考えているのか知りた  
かった」というものが多く、コミュニケー  
ション活動を通して関わる機会が増えた  
ことで、以前よりも声をかけやすい関係  
ができてきていると生徒自身が感じている  
ことがわかる。

一方で、「コミュニケーション活動をして  
いるときだけ喋る人がいた」「まだ話  
に参加していない人がいる」「話して  
も反応が薄い」などの意見も見られるの  
で、活動を改善しながら継続していくこ  
とが必要であると感じた。更に、「クラ  
スの雰囲気をよくしたり、人間関係を円  
滑にしたりするために、コミュニケー  
ションタイムを今度も続けた方がよいと  
思いますか」という項目に対しては、  
約95%の生徒が今後も続けた方がよいと  
いう肯定的評価を行っている。生徒たち  
にとっても有意義な活動になっているこ  
とが実感できるので、今後も継続して取  
り組みを行っていきたい。

#### 4. 成果と課題（中津市全体として）

##### 【成果】

- 「教師主導の授業」から「生徒主体の授  
業」を意識して授業に取り組む教員が  
徐々に増えつつある。
- 生徒同士の対話を取り入れた授業がさら  
に広がっている。
- 生徒が主体的に学ぶ姿や、他の力を借り  
ながら自分の考えをまとめたり深めたり  
する姿が見られるようになった。
- 小学校ではC層の割合が減少傾向に  
ある。

##### 【課題】

- 活動のねらいを理解せず、手段が目的と  
なっている教員や教師主導の授業が主  
になっている教員が一定数いる。
- 学校間での取り組みの差がある。
- 中学校ではC層の割合が増加傾向に  
ある。

# 学校と地域の連携・協働による「チーム学校」と「働き方改革」の実現

豊後高田市立香々地中学校 校長 明石 哲也

## 1. はじめに

豊後高田市は国東半島の西側に位置し、西は宇佐市、東は国東市、南は杵築市と接している。北は周防灘に面し、豊かな自然と温暖で過ごしやすい瀬戸内式気候に属している。地域の東部から南部にかけては、ハジカミ山、尻付山、両子山や日本三叡山に数えられる西叡山等の山々が連なり、国東半島のほぼ中央の両子山から、放射状に谷や峰々が延びた地形となっており、その谷間を桂川、真玉川、竹田川が走り、河口付近に市街地が形成されている。域内には、瀬戸内海国立公園及び国東半島県立自然公園を擁し、山間部及び海岸部の自然景観や農村集落景観、六郷満山文化ゆかりの史跡等、豊かな自然と歴史文化などの地域資源が豊富である。



香々地中学校校区

本市には小規模校が多く、それぞれの学校が地域と連携した「チーム学校」の実現に向けて取組みを行っている。その中の旧西国東郡香々地町にある香々地中学校の取組を本年度の報告とする。

## 2. 現状と課題

複雑化・多様化した学校の課題に対応し、子供たちの豊かな学びを実現するため、教員が担っている業務を見直す必要がある。そこで専門スタッフが学校教育に参画して、教員が専門スタッフ等と連携して、課題の解決に当たることができる「チームとしての学校」体制を構築することが必要とされている。

はじめにでも触れたように、本市も過疎化に伴い生徒数も減少してきており、市の移住政策により、移住者はいるものの人口減少を補うまでには至っていない。保護者世代も香々地で育った人と豊後高田市が進める移住政策で転入してきた人が混在する。子供たちは、幼少期から香々地で育っている生徒がほとんどだが、地域のことについては知らないことも多く、育った香々地に魅力を持っていない傾向にある。また小規模校であるが、友人との関係や家庭環境等さまざまなことが原因となり、教室に入れなくなる生徒や登校することができなくなる生徒もいる。

これらの課題に対して学校職員だけで対応するのではなく、学校と地域や専門スタッフ等が連携して「チーム学校」として取り組む必要がある。育った香々地に魅力を持つ取組には、コミュニテースクール（学校運営協議会制度）を中心に据え、地域にいる方々を含めた「チーム学校」で地域学習の取組を進めた。また教室から遠ざかっている生徒に対しては、SCやSSWを活用して関係機関と連携した「チーム学校」としての対応を進めた。

これらの取組が働き方改革につながると考えて実践を行った。

## 3. 研究の実際

### (1) 地域学習（香々地の魅力を伝えよう）

学校運営協議会を核として地域との協働を進めるにあたり、地域に存在する外部人材や歴史、さらには地域産業等を活用し地域と一体となった教育活動の実践を行うこととした。

#### ① 学校運営協議会の活用

##### ア、委員構成（11名＋職員3名）

教職員OB、PTA会長歴任者、公民館長

地域学校協働活動推進員、香々地青少年の家所長、保護者、香々地・三浦小学校校長

豊後高田市指導主事（香々地出身）

- ・発言がしやすいように3グループに分け、地域に眠る外部指導力について出していただき、出された意見を参考にして、地域学を進めることとした。

#### イ、出された意見

##### ○ひと

香々地を発展させようと地域の中で洋菓子店を継いでいる方や、地元の高校から大学に進み、豊後高田市役所で活躍をしている方などが出された。また、過去の偉人（江口章子や吉田光由）などのも上がった

##### ○もの

岬ガザミ、ボタンボウフウなどの産業に関するものや香々地青少年の家、長崎鼻、中山仙境などの施設や景勝などが出された。

##### ○こと

長崎鼻サマーフェスティバルやおんばれ祭り、朝市など香々地独自の行事や岬太鼓、香々地音頭などの伝統的な芸能などが上がった。



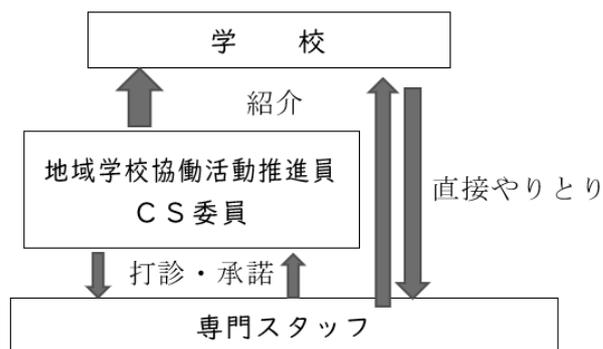
学校運営協議会の様子

#### ② 専門スタッフ（地域人材）の活用

全校生徒を縦割りの班を作り「香々地の魅力を伝えよう」と表題を決め、それぞれの班で調べ学習を進めるなかで、地域にいる方々を中心に聞き取り調査を行うこととした。

##### ア、依頼方法の基本

地域学校協働活動推進員や他のCS委員に打診・承諾をしていただき、その後は直接学校が直接打ち合わせ等を行うことを基本とし、以前からさまざまな面で協力いただいている方々には直接学校から依頼をした。



##### イ、班づくり

3年生14名 2年生10名 1年生5名の29名を縦割り5班に以下の班を構成。

歴史班、飲食店班、祭り班、  
特産物・名勝班、施設班

##### ウ、現地調査

班ごとに委員から出された意見を参考に書籍やインターネットを活用し、調べたい内容や質問事項等を事前にピックアップしておき、現地に赴いて、聞き取り調査をおこなった。



インターネットや書籍による学習



特産物・名勝班の聞き取り調査

：サンウエスタン

##### エ、発表およびパンフレット

各班調べた内容をまとめ、文化祭の中で発表を行った。CS委員や聞き取りを行った方々にも案内状を出して、発表内容を聞いていただいた。



文化祭での班別発表

調べたことをまとめ、パンフレットを作り、調査協力いただいた方々にお礼状と一緒にお渡しするとともに文化祭展示し、その後は学校玄関に展示している。

- ③ 従前から続いている地域連携の活動
  - ・体育大会での香々地音頭の指導
  - ・文化祭でのみさき太鼓の指導
  - ・ガザミ料理教室 等多くの行事を実施
- (2) 教室から遠ざかっている生徒の対応
  - ① 現状について
 

令和6年度の30日以上欠席1名A  
長期的に教室に入れない生徒2名B、C  
短期教室に入れなくなった生徒1名D
  - ② 「SCやSSWを活用して関係機関と連携した「チーム学校」の組織を作りそれぞれの役割を決めて登校支援を行った。

メンバーと役割

  - 学校（管理職、担任、教育相談コーディネーター）登校時の学習指導、自立指導、家庭訪問、保護者対応等
  - SSW 関係機関（放課後デイ、豊後高田市適応指導教室や病院）との連絡
  - SC 本人及び保護者へのカウンセリング、学校へのコンサルテーション
  - 放課後デイ 自立支援、地域交流等
  - 豊後高田市適応指導教室 学習指導や自立指導
- ③ ケース会議の実施
 

年間数回実施し、現状の確認と、今後のサポート体制について話し合った。

その際SSWが日程調整や連絡し、議事を進めた。

## 4. 成果と課題

### 成果

生徒は自分たちが住んでいる香々地について何となく知っていたり、聞いていたりしているが、詳しく調べたことがなく、今回の学習の中で詳しく知ることが出来た。これらの学習は学校の中だけで実施することは困難で、地域の専門的知識等を持っている方々を含めた「チーム学校」として取組んだ成果といえよう。また、教師が資料提供をするのではなく、専門家に指導していただくことは、働き方改革の一助につながったと考えられる。

不登校生徒等の支援についても、各関係機関や専門スタッフが役割を担うことで、全く通学できていなかった生徒が、週2日登校するようになったり、教室に入ることが出来なかった生徒が、教室で授業を受けることが出来るようになったりした要因の1つであると考えられる。

### 課題

本校は総合的な学習を各学年年間35時間英語表現の時間として扱っているため、総合的な学習の時間が少なく、特に1年生は時間の確保が難しい。また、学校運営協議会のあり方も、地域住民として出しやすい意見はよいが、学校運営自体に自分事として出してもらうまでには至っていないのが現状である。

不登校対応等についても、毎週の「人間関係づくりプログラム」の実施や、教育相談等も行っているが、人間関係のトラブルも年間に数回起こり、狭い世界であるがゆえに修復しにくい事態になることもある。未然に防ぐ生徒指導が必要であり、その取組も働き方改革につながると考える。

### おわりに

本市の6校中5校が1学年1学級の小規模校で香々地中学校に似た取組が行われている。それらの取組の様子を市校長会研究部会で交流することで「チーム学校」の実現をめざしたい。

# 芯の通った学校組織の確立と人材育成

宇佐市立院内中学校 校長 宇都宮 忠

## 1. はじめに

宇佐市では、地域に根ざした特色ある学校づくりを推進する中で、学習指導要領の趣旨を踏まえた学校体制の確立と教育内容の充実を図るとともに安心・安全・信頼される学校づくりを基本方針とし、「子どもたちに誇りと希望、そして夢を」をテーマに、①「確かな絆で結ばれた地域とともにある学校づくり」の推進、②生きる力を育む学校教育の推進、③信頼される教職員の育成を重点目標として各地域で特色ある学校づくりを行っている。本校のある安心院・院内地域では、「地域の子どもは地域で育てる」を合言葉に、安心院高校と中学校2校、小学校7校が、12年間を系統的な学びを大切にした小中高一貫教育に取り組んでおり、総合的な学習の時間(地球未来科)を中心に地域特有の文化・歴史・自然(農業)と国際社会の動向を教材として取り入れながら、英語の学びやその他の教科の学びを横断的に生かせるような学習を行っている。現在、宇佐市には小中学校あわせて31校の学校があり、少子化に伴う生徒数減少や学校規模の縮小が課題となっている。そのような中、宇佐市教育委員会は令和7年11月に「小・中学校の適正規模・適正配置に関する基本方針」を改訂し、児童生徒数の減少や地域の実情に合わせた学校体制の構築を進めているところである。



## 2. 現状と課題

宇佐市では産休者や育休者、メンタル不調などにより各校で人員不足が起こっている。とりわけ、小学校では教頭や校長が担任業務を行わなければならない状況になっている。また、職員の年齢構成も60代、50代あわせて市内の教職員の半数を占め、40代、30代のミドルリーダーが少なく、20代の若手の教職員の増加など学校運営をしていく中で様々な課題が出てきている。

そのような中、多様化した教育課題に答えていくためには教職員の人材育成と学校マネジメントが非常に重要になってくるのは必然であり、今年度はその課題について研究を推進することとした。

## 3. 研究内容

### (1) 研究テーマ

多様化した教育課題に対応できる学校経営と教職員の育成をどうすすめるか。

### (2) 研究過程

- 6月 中学校長会 研究概要、テーマ決定  
発表者決定
- 10月 中学校長会 レポート審議①
- 12月 中学校長会 レポート審議②

### (3) 実践事例(院内中学校の例)

#### ① 協働を生み出す職員室の配置の工夫

芯の通った学校組織の確立のためには職員の協働・協力は欠かせない。本校ではこれまで職員室は、学年ごとに3つに配置が分かれており、それぞれが分業制のように学校運営にあたってきた。しかしながら、日々の業務に負われる中、そういった面が学校運営にも表れ、職員の個別化、孤立化を招き、協働的、共感的な職場体制を生みにくかった。

そこで、改めて職員同士がいつでも相談できる、支えあえる環境づくりをめざして職員室の配置を見直した。管理職と学年主任間、担任間、特別教育支援チームなどふだんから自然と話のできる状況を作り出すことで情報共有や指導の一体化を図ったりとチームとしての動きができるようになった。

R6 職員室 配置図

学校主事	3年副担任	養護教諭
3年学年長		3年担任
特支支援員		学校司書
2年学年長 (特支担任)		2年担任
1年学年長		1年担任
SC		
	教頭	校長



R7 職員室 配置図

学校主事	(SSW)	SC	特別支援会議
特支支援員	特支支援員	養護教諭	
学校司書	1年学年長	特支担任	担任会議
	1年担任		
2年担任		3年担任	運営会議
2年学年長	(1年学年長)	3年学年長	
非常勤事務	教頭	校長	

- ② 企画会議による学校運営体制の見直し  
 通例、運営委員会で議題を整理し、職員会議で提案・連絡を行うことが多いが、職員数の少ない本校では運営委員会を実施することは半数の職員が参加し、

授業者がいなくなることを意味する。

また、その後の職員会議でも同じような説明が続くので無駄が多い。校長、教頭、教務主任の3名での企画会議を実施することで会議の重なりをなくし、議題によっては運営委員会ではなく職員会議に入るなどスピード感のある意思決定や協議ができるようになった。

- ③ ミドルリーダーへの指導のあり方と校内研修の見直し

学校が効果的、効率的に運営できるようになるためには各主要主任が管理職と職員をつなぐミドルアップダウンマネジメントの機能を果たすことが重要である。しかしながら、そのミドルリーダーとなるべき40代や50代の人材が不足しており、各学校でもその育成に苦慮しているのが現状ではないだろうか。

本校でもそれぞれの分掌担当が連絡調整、提案、進捗管理等行っているが、課題意識を持ち主体的に行動できる教員は少なく、職員会議でもいつも同じ職員のみが意見を述べるだけで、ほとんど意見交換もなく終始することが多かった。そのような状況ではなかなか学校組織としてのベクトルもそろわず、指導もバラバラであった。また、研修や会議の時間がないということで提案さえないことも多々あった。

そこで、毎月、研究や人権教育など主要分掌について各15～20分の時間を必ず設け、研修を行うようにした。提案も5分以内に抑えるようにし、一人一発言以上を必須とし、全員が意見を述べる対話型の研修に切り替えた。するといつもは黙っていた職員が少しずつ自分の思いを語りはじめ、自分の実践でよかった事例や失敗したことなどお互いに共有することができるようになり、親和的な雰囲気や自然に学び合う姿勢が見られるようになり、以前の提案型の研修では見られない前向きさが表れるようになった。

各分掌主任も資料作成や準備に非常に

時間をかけていたが、お互いに意見交換する中でいろいろなアイデアが出てくるようになり、あまり時間をかけなくても提案等ができるようになったので負担もかなり軽減した。また、周りの職員からの反応が増えたのがうれしいようで、分掌に対する責任感や仕事に対するやりがいも強く感じるようになり、意欲的になってきた。これまでは事前に管理職が分掌主任に意義や役割、提案の準備から内容の確認まで行うこともあったが、かなり任せることができるようになった。

④ 4点セットの明確化による学校のめざす姿の共有化と職員の意識改革

学校をマネジメントし、また、教職員のめざす目標を共有化するため4点セットの策定は必須である。しかしながら、策定はしてもなかなか本校の課題解決について効果が上がらなかった。例えば学力向上では、学力向上チームを作り、学力向上のための全校での取組や個に応じた指導方法の工夫を図ったり、近隣中学校と教科合同研修会を開催したりと研究担当を中心にさまざまな取組を行って見たが効果はほとんど見られなかった。

そこで、もう一度一人ひとりの意識改革とめざす目標を再設定するため4点セットの見直しを図った。4点セットの学力向上の指標をこれまでの曖昧なものから、より数値を明確化したものに切り替え、全員でその達成に向けて取り組めるものにした。その後の検討会議では指標をもとに、どうして達成できたのか、なぜ達成できなかったのか、各職員がそれぞれの分析を語り合い、よかった取組や課題を全体で共有し、同じ目標を持って取り組むようになった。指標を達成したことがさらなる意欲につながり、ついでには全員で目標を協働して達成しようとする雰囲気が出てきた。

重点目標	重点目標に係る 目指すべき子どもの 姿となる 達成指標	分担	達成指標を達成する または近づぐための 重点的取組 ※到達像不要	重点的取組に係る 具体的な 取組指標 ※誰が、何を、どれくらいの頻度で
主体的な学びによる基礎・基本事項の習得	①授業評価アンケートで「授業がわかる」と答える肯定的生徒の割合90%以上  ②定期テストで70点以上の生徒の割合40%以上、30点以下の生徒の割合20%以下	学校	自己調整力を身につけて主体的に学ぶ生徒の育成	授業者は毎時間、生徒に見通しを持たせる「めあて」、学びの成果や改善点を次につなげる「振り返り」を設定する
		家庭	小単元ごとのテストの実施	授業者は単元ごとに基礎基本を押さえた小テストを行う
		地域	家庭学習時間の習慣化	保護者は、毎月第2火曜日にメディアコントロールに取り組み。
		地域	地域の子どもは地域で育てるという意識の醸成	学校運営協議会委員は、年間5回、学校行事や公開日等に参加する。



重点目標	重点目標に係る 目指すべき子どもの 姿となる 達成指標	分担	達成指標を達成する または近づぐための 重点的取組 ※到達像不要	重点的取組に係る 具体的な 取組指標 ※誰が、何を、どれくらいの頻度で
主体的な学びによる基礎・基本事項の習得	①授業評価アンケートで「授業がよくわかる」(A評価)と答える生徒の割合 30%(1年6人、2・3年7人)以上  ②定期テストで80点以上の生徒の割合30%(1年6人、2・3年7人)以上、30点以下の生徒の割合20%(1年4人、2・3年5人)以下	学校	自己調整力を身につけて主体的に学ぶ生徒の育成	授業者は毎時間、生徒に見通しを持たせる「めあて」、学びの成果や改善点を次につなげる「振り返り」を設定する
		家庭	小単元ごとのテストの実施と補充学習	授業者は単元ごとに基礎基本を押さえた小テストを行い、30点未満の生徒には個別指導を実施する。
		地域	家庭学習時間の習慣化	保護者は、毎月第2火曜日にメディアコントロールに取り組み。
		地域	地域の子どもは地域で育てるという意識の醸成	学校運営協議会委員は、年間5回以上、学校行事や公開日等に参加する。

⑤ チーム学校としての組織づくり

様々な課題を抱えた生徒や特別な配慮が必要な生徒には学校だけでなく福祉や子育て支援課、児童相談所、警察等関係機関との連携が必要になってくる。

本来は教頭や学年主任等が担うべきところであるが、本校では支援コーディネーターとして養護教諭に關係機関の窓口としての役割をお願いし、少ない教職員のサポートとして活躍してもらっている。連絡、調整、ケース会議等の運営、事後の報告書のまとめなど教職員の負担軽減に大いに寄与している。

⑥ 持続可能な学校組織を確立するための働き方改革

いかに学校組織がうまく機能する学校であっても、人材がいかに育とうとも職員が疲弊しては元も子もない。働きやすい、やりがいのある学校づくりのためには働き方改革がまさに重要である。今年度うまくいった事例を以下に示す。

(取組の一例)

- ・運営委員会、学年部会、分掌部会等すべての業務は日課表へ位置づけ、放課後は自分の仕事に集中できる環境をつくる。
- ・困りや悩みを相談しやすい職員室の配置の工夫。
- ・学校運営協議会を活用し、学校、家庭、地域それぞれが担うべき役割を確認し、適切な責任を果たす。
- ・部活動は準備や片付けを含め2時間以内を厳守し、時間外勤務を縮減する。
- ・部活動指導員、外部指導者を全部活に迎え、教員の負担軽減を図る。
- ・留守番電話を活用し、朝は7:30、夕方は18:30に設定している。
- ・バースデー休暇、校内リフレッシュ休暇(土日を含む3連休)を創設し、家庭でゆっくり過ごせる時間を作る。等。

しかしながら、ともに汗を流す中で、一人ひとりの教職員の成長ややりがいづくり、それにとまなう学校の取組の深化が図れたことは校長としてとてもうれしい限りである。これからもすべての子どもたちが夢や希望を持って自己実現できる学校づくりをめざして、さらなる学校組織の確立と教職員の育成に努めていきたい。

#### 4. おわりに

学校には常に様々な教育問題が山積し、日々、我々教職員はそれと向かい合っている。一つひとつ地道に取り組んではいるが、課題解決には非常に時間も労力もかかる。

本校では昨年度からメンタル不調の職員も複数おり、一人ひとりの教職員にかかる負担は大きく、学校運営の責任者としての校長の責務は重いと感じている。今回、学校組織の効率化と活性化、教職員の学校運営に対する参画意識の向上や資質、能力の育成に取り組んできたが、まだまだ十分とは言えない。

# 報告「教職員に感謝する会」 ～10.5 「教師の日」の取組として～

別府市立朝日中学校 校長 武野 太

## 1. はじめに

1966年10月にフランスのパリで開催された、国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）と国際労働機関（ILO）主催の「教員の地位に関する特別政府間会議」で『教員の地位に関する勧告』が採択された。この勧告は、教員の任務の重要性を認識し、適切な地位や社会的な敬意、公正な勤務条件や報酬等を確保することを目的とし、世界的な教員不足に対応したものである。そして、この勧告は世界各国の教員の地位向上に大きな影響を与え、1994年にはユネスコが、10月5日を「世界教師デー」として定めた。そのような中、現在、日本の教職員は多岐に渡る事務作業の他、放課後の部活動等の指導や保護者の対応など授業以外に費やす時間が年々増加傾向にあり、長時間労働の実態は深刻化している。また、教員採用試験の倍率も、8年連続で低下しており、その要因の一つに教員の長時間労働により若者の教員志望の敬遠が挙げられる。そのため、各自治体等で教員不足の解消や採用倍率向上に向けて様々な取り組みを行っており、本県においても、採用倍率を向上させるために、受験しやすい環境づくりや多様な人材の確保策、そして教員という仕事の魅力向上に向けた取り組みを行っているものの大幅な志願者増には繋がっていない。また、精神疾患での休職・休暇者は近年増加傾向にあり、経験年数の浅い教職員の中途退職等も相まって、教員不足は深刻化している。まさに1966年に『教員の地位に関する勧告』が採択された時と同じ状況に現在の日本はあると言える。

世界的には、教師の日を記念日として定めている国が多いが、日本では根付いていない。そこで、10年前に教師のモチベーション、社会的地位を維持向上させるべく、有志団体（のちに一般社団法人「教師の日」普及委員会となる）により、「教師の日」を契機として社

会機運を醸成し、社会全体で教師に感謝し、応援しようとする動きが始まった。

本校においても、教職員のモチベーション向上に繋がることを願い、今年度初めて「教職員に感謝する会」を10月5日は休日であるため、10月3日（金）に管理職と生徒会担当以外の教職員には秘密にしてサプライズで開催した。

大分県中学校校長会研究収録に掲載する「各郡市校長会の研究のまとめ」としては、趣旨が異なるものの、この取り組みが県内に広まり、学校現場での教職員のモチベーション向上、そして教師不足の解消に向けた僅かな一助になればとの思いから別府市中学校校長会の許しを得て報告をする。

## 【「教師の日」普及委員会によるポスター】



## 2. 当日までの経過

6. 27 (校長) PTA会長へ「教職員へ感謝する日」開催の了承取り付け
7. 17 (PTA会長) 生徒会執行部へ「教職員へ感謝する会」開催の打診

- 8.28 (第5回PTA執行部会) PTA会長より、PTA執行部へ開催提案及び教職員への贈り物(色紙・花束)代金の支出の承認
- 9.2 (生徒会協議委員会) 生徒会長より各学級代表協議委員へ「教職員へ感謝する日」の開催提案及び教職員には秘密にしての色紙作成指示
- 9.9 (運営委員会) 10.3(金) 1限に全校集会の開催を校長から伝達。何をするのかの複数の質問があるが、はぐらかす。
- 9.1~9.30 (校長) 教職員が仕事をしている様子の写真撮影及びスライド動画の作成
- 9.22 (校長・生徒会執行部) 開催当日の流れの確認
- 9.24 (教頭) 取組を広めるためにマスコミへの投げ込み
- 9.25 (第6回PTA執行部会) 開催当日の花束準備等の役割分担についての打ち合わせ
- 10.1 (校長・生徒会執行部) 教職員のスライド動画の確認及びの最終打ち合わせ
- 10.3 (PTA役員) 業者から花束の受け取り

### 3. 当日の様子

#### (1) 生徒体育館入場まで

本校の生徒登校時刻は8時20分までとなっており、10月3日(金)当日も職員が生徒昇降口や教室で生徒を出迎え、その後10分間の朝の会を行った。1時間目が全校集会であるため、いつもであれば学級担任がクラスの生徒の先頭に歩き体育館へ入場するのだが、この日は、朝の会終了後、全職員は職員室で待機するよう前日に指示していた。体育館では、生徒会長が当日の趣旨について再度全校生徒へ確認した。職員室では、朝から全職員が職員室にということ年間を通してないので、なぜ職員室待機なのかという怪訝そうな雰囲気があった。生徒から本日の内容が漏れていないことを実感した。担当生徒からの呼び込

みにより、全職員が職員室前に1列で並び体育館へ入場。体育館では、生徒及びPTA役員から拍手で迎えられた。拍手で迎えられる理由を知っているのは管理職2人と生徒会担当の計3人だけなので、この時点でも他の職員は理由が分からないため笑顔も作れずどちらかというと不機嫌そうな表情で入場してきたことを後日、ケーブルテレビで確認をした。

#### (2) 集会の流れ

- ① 生徒体育館集合
- ② 生徒会長から全校生徒へ会の趣旨と流れの説明
- ③ 職員室へ呼びに来る
- ④ 教職員入場 4年部、3.2.1年部の順番で入場
- ⑤ 教職員は椅子に着席
- ⑥ スライド動画を流し、「教職員に感謝する会」であるということを映像の後、生徒会長が教職員に知らせる。
- ⑦ 4年部は前面に整列
- ⑧ 生徒会長お礼の言葉
- ⑨ 花束及び色紙贈呈
- ⑩ 1年部は前面に整列
- ⑪ 1年生徒代表お礼の言葉
- ⑫ 花束及び色紙贈呈
- ⑬ 2年部は前面に整列
- ⑭ 2年生徒代表お礼の言葉
- ⑮ 花束及び色紙贈呈
- ⑯ 3年部は前面に整列
- ⑰ 3年生徒代表お礼の言葉
- ⑱ 花束及び色紙贈呈
- ⑲ 教職員代表お礼の言葉(3年学年主任)
- ⑳ 閉会の言葉
- ㉑ 教職員退出



### (3) 生徒の言葉

#### 生徒会長

「職員の皆さんへ。見えないところでもたくさんのお仕事をしてくださっていることに心から感謝しています。そのおかげで、僕たちは安全に楽しく学校生活を送れています。これからの僕たちの毎日をよろしくお願いします。」

#### 1年生徒代表

「僕は中学生になって心配ばかりでしたが、先生が優しく教えてくださったり、助けてくださったりしたおかげでとても安心感があり、すべきことを行うことができました。迷惑をかけることがあると思いますが、これからもよろしくお願いします。」

#### 2年生徒代表

「2年部の先生方へ。いつも全クラスの授業を見てくださり、ありがとうございます。先生方の授業は明るく、楽しく、分かりやすく教えてくださるおかげで、楽しいです。これからも楽しい授業を引き続きお願いします。」

#### 3年生徒代表

「僕たち3年生は、入学してからこれまで先生方の丁寧なご指導のおかげで沢山成長することができました。ですが、沢山の迷惑もかけてしまいました。まだまだ未熟な僕たちですが、卒業する時、先生方に誇ってもらえるような3年生らしい姿を残りの期間で見せていきます。」

### (4) 教職員代表お礼の言葉

「本当に知らなかったもので、とても驚いていますし私たち教員一同、とても嬉しい気持ちです。教師という仕事を通して、なかなかうまくいかないことが沢山あって、日々難しいと思い過ごしています。こういう風に何かみんなの前向きな思いを受け止める瞬間があると『また頑張れるな』という気持ちになります。本日はありがとうございました。」



【10月7日付大分合同新聞 新聞社掲載許諾済み】

### 4. おわりに

「教職員に感謝する会」終了後、職員室に戻った職員は、体育会入場前の表情から一変し、みんな「いい顔」をしていた。また、体育館での全校生徒の顔もPTA役員さんの顔も「いい顔」だった。生徒会長にインタビューをしていた、マスコミの方々もいい取組ですねと「いい顔」だった。3年の学年主任がお礼の言葉で、「なかなかうまくいかないことが沢山あって」と吐露していたが、苦しい時も多々あるのが、多くの教員の現実だろう。しかし、それ以上に他の職種では味わうことのできない感動や喜びがある。過重な労働時間や業務の多様化・複雑化、また人間関係のストレス等で教師という職業が敬遠されている風潮があるが、教師という職業が尊敬され社会的地位が高まれば、優秀な人材が集まるとともに、保護者等の学校に対する理解や貢献度も高まると考えている。父の日、母の日と同列に扱われる教師の日がある国もあり、そういった国は優秀な人材が集まる。

今回、「教師の日」を広めたいとの思いで事前にマスコミに投げ込みを行った。来年、再来年と「教師の日」が広まり各学校で教職員に感謝する会が様々な方法で行われ、それが教師の社会的な地位やモチベーションの向上に繋がり、教師という職業が人気職種となり、教師をめざそうとする若者が増えることを願っている。

# 学校と地域の連携・協働

## ～「地域人材等活用計画」を核にして～

杵築市立山香中学校 校長 真砂 一也

### 1. はじめに

杵築市は、大分県の北東部、国東半島の南部に位置し、「歴史と文化の薫り高き豊かな感性があふれるまち」を目指している。平成17年10月1日に旧杵築市、山香町、大田村が合併。当初の人口は3万3千人であったが、現在は2万6千人程度となり人口減少が大きな課題である。学校数についても、合併当初は、小学校15校、中学校6校であったが、学校統合により、現在は小学校10校（複式学級を有する学校5校）、中学校3校となっている。令和7年5月1日時点での市内児童数は1,087人、生徒数は633名（計1,720名）である。

本校は、平成21年に旧山香町3校（旧山香中・北部中・上中）の統合により、新「山香中学校」として新築移転し、翌年4月に大田中が本校と統合した。今年で17年目を迎える。校区は山香地域、大田地域全域と広く、スクールバス5台を運行している。全校生徒137名、7学級（通常5、特別支援2）の小規模校である。

保護者の学校に対する期待度は高く、地域は学校教育に対して協力的である。とりわけ、過疎化が進む本地域においては、地域社会の担い手として、また、後継者として子どもたちに郷土に対して愛着を持って欲しいと願っている。

### 2. 主題設定の理由

学習指導要領に込められた思いは、学校で学んだことが子どもたちの「生きる力」となり、その先の人生につながってほしいとの願いである。学校では子どもたちに「生きる力」を身につけさせるために、将来につながる知識やスキルに加え社会の変化に合わせた新しい学び方を提供している。また、教育効果を最大限に発揮するためカリキュラムを見直し、社会に開かれた教育課程を目指している。これらを実現するためには、保護者や地域の協力が不可欠であり、学校と地域の連携体制を構築していくことが重要となる。

杵築市では、令和2年度に市内全小・中学校に学校運営協議会を設置し、コミュニ

ティ・スクール（CS）がスタートした。各学校では学校教育目標や重点目標、目指す子ども像等について学校運営協議会委員と共有し、その達成に向けた様々な取組を進めている。学習指導・生徒指導など現在学校が抱える様々な課題を解決し、学校教育目標を達成するためには、「地域とともにある学校」を基盤として、「子どもたちをみんなで育てる」という共通認識のもと、地域との連携・協働を進め、学校内外の人材の専門性を上手く組み合わせながら有効活用をしていくことが学校経営上欠かせないと考え、本主題を設定した。

### 3. 研究内容（取組の実際）

#### (1) 地域人材等活用計画の作成及び活用

令和7年度 地域人材等活用計画 杵築市立山香中学校

1	心のステップアップ教室	活動予定日	対象学年	教科・領域	内容	講師・わらい等
1	7月11日	1年	38人	道徳	心のステップアップ教室① 二つの心の持ちように入らる	臨牀心理士を講師に招き、人は自分と同じ考えの人ばかりではないこと、いろいろな考えや考え方があってよいことを体験的に学ぶ。
2	11月28日	1年	38人	道徳	心のステップアップ教室② 二つの心の持ちように入らる	臨牀心理士を講師に招き、互いの長さに気づき、認め合い、支え合い、よりよい人間関係を築くことについて「プラスのものがねを手にする」の応用編として、講演と演習を行う。
1	7月4日	1、2年	90人	総合	職業講話 （PTA立派なキャリア教育） 保護者・地域の講話と演習	キャリア教育の一環として地域で働く方を4名程度講師に招き、講師の体験を交えた講演を聞き、働くことの意義について考える。
2	8月27日	2年	52人	総合	マナー講座 （職場体験事前指導） 専門家による講話と演習	職場体験を行う2年生の事前学習として、講師の体験を交えた講演とともに接客についての心構えやマナーについて演習を取り入れた学習を行い、実際の職場体験に生かそうとする態度をもつ。
3	7月4日	3年	47人	特活	高校説明会	進路学習の一環として、公立・私立計8校程度の高校の先生を招き、保護者と共に各高校の特色や学習内容等の説明を受け、自分の進路選択に活かす。
4	8月28、29日	2年	52人	総合	職場体験学習 地域の職場で体験学習	地域の事業所で体験学習をすることを通して、働くことの意義や社会への貢献および社会人としての役割などについて学ぶとともに、職業に対する考えをより深め、自分の生き方について考える機会とする。
5	11月28日	3年	47人	特活	進路講話 （PTA立派なキャリア教育） 保護者・地域の講話と演習	保護者や地域で働く方を講師に招き、進路選択にあたっての体験を交えた話を聞き、主体的な進路の選択と待望設定に役立てる。
6	7月8日	2年	52人	総合	大分県未来創造プロジェクト講演会 映像制作ワークショップ	「地域・社会や産業と連携し、地域のよさを生かしたPR活動やものづくり、商品開発など行動やアイデアの創出」をねらいとした「大分県未来創造プロジェクト」の県指定を受けた本校では、令和6年度に協力を得た物品開発に取り組んだ。物品開発は地元事業者である「楽園亭舎」「山香アグリ」や山香中央公民館、地域学習協議会事務局の協力のもと実施した。県指定は2年間であり、2年目の令和7年度は開発した商品の改良およびPR活動に注力する予定。山香・大田地域のよさを取り、そのよさを発信したりする活動を通して、自分の役割や将来について考える機会とする。
7	7月14日	3年	47人	家庭	山香中華まんじゅう会 地域の力（楽園亭舎）	
8	1月31日	2年	5人	総合	大分県未来創造プロジェクト 発表会 まとめ発表、物品販売	
1	10月16日	全学年	137人	総合	避難訓練・防災教室 専門機関による訓練と体験学習	市危機管理課、消防署、山香地域住民自治協議会防災委員より講師を招き、避難訓練を実施するとともに、災害（地震・火災）発生時の対処法等について学ぶ。
2	12月5日	全学年	137人	道徳	教育講演会（情報モラル） 杵築市教育委員会社会教育課 PTA研修部	2学期に教育講演会を実施。生徒・保護者と一緒に、インターネットによる人権侵害の事例を学習し、自分自身の生活を振り返り、正しい利用の仕方について学習する。
1	10月7日～17日	1・2年	90人	保健体育	武道授業 授業補助 堀 純哉さん	武道（剣道）授業において、保健体育教員の補助を地域外部指導者に依頼し、安全確保と技術習得を期す。
2	2月	1年	38人	保健体育 家庭	食育訪問授業 栄養士による講話と実習	食の改善や栄養指導に関心する方々を講師に招き、実習を取り入れながら食物のたらしめや栄養について学び、日常生活に生かそうとする態度を養う。
3	11月13日 12月1日	3年	47人	家庭	保育実習 山香こども園で実習	地域のことと関わり、幼児とふれあう活動を通して、幼児への関心を高め、かわり方を工夫できるようにする。
1	5月8日～23日	全学年	137人	保健体育	盆踊り練習 地域の保存会による指導	山香地区盆踊り保存会の方を講師に招き、盆踊り・太鼓・くどきの指導を受け、郷土の文化に親しみ大切にしようとする態度を育てる。（県校 4組）
2	10月	大田地域 数人	総合	どぶろく祭り 地域の伝統行事交流と継承	白旗田神社大祭りのどぶろく祭りに地域の一員として参加し、地域との交流・協働を図るとともに伝統文化の継承を目指す。	
3	11月13日	1年	38人	総合 社会	郷土に学ぶ歴史文化巡検 地域体験学習、まとめ発表	市内の歴史・文化遺跡を訪ね、実際に見聞する活動を通して、郷土についての知識を深め、郷土を愛する気持ちを育てる。
4	5月4日 12月2日	吹奏楽部 部員	特活	地域交流演奏会 地域との交流	地域の祭りや行事において、出張演奏会を行い、地域との交流を図る。また出演によって生徒の自己肯定感の高揚に資する。（12月はグリーンテラス山香クリスマス会参加）	
1	6月14日 6月15日	希望者 5人	課外	万博交流プログラム 専門家による講話	杵築市がジブティとブルンジのホストタウンに指定されたことから、国際交流の一環として実施。「大阪・関西万博」に参加して学ぶ。	
2	7月～2月	3年 希望者	課外	山香未塾 地域在住講師による補充学習	補充学習を中心とした学習支援活動を「学校応援団」の地域住民ボランティアの方々の協力を得て実施し、地域ぐるみで子どもたちを育てる。（夏休みに集中学習3名希望者等）	

本校では、各教科・領域において、地域の方々と連携・協働を進めるために、「地域人材等活用計画」を作成している。活動内容にとどまらず講師やねらい等もあわせて記述しており、これにより各学年や分掌等で見通しを持って継続的に取り組むことができている。また、教育課程にこの計画表を綴じ込み、各活動実施後の反省をもとに、適宜、必要事項を書き加え、次年度に向けての引継ぎとして役立てている。特筆すべき点は、職場体験学習の受け入れ先、各種活動の準備や講師選定等は、学校職員ではなくCS委員や地域学校協働活動推進員が段取りしてくれる点である。生徒たちの成長を願い主体的に準備、協力してくれる関係者の方々には感謝の気持ちで一杯である。

【地域主体の主な活動内容】

- ◇職業講話
- ◇職場体験学習
- ◇盆踊り
- ◇進路講話
- ◇避難訓練・防災教室
- ◇山香未来塾



(2) 大分っ子「未来創造プロジェクト」

地域や産業界（地元企業）と連携し、地域のよさを生かした「PR活動、ものづくり、商品開発」等、行動を伴った探究的・協働的な学習を行う中で、生徒が主体的に自分の役割や将来について考えたり、地域や社会に貢献したりしようとする態度を育成することを目的とした県教育委員会指定事業を受け、本校では、令和6年度から令和7年度にかけて次のような取組を行っている。

【探究テーマ：郷土を知り、提案し、発信しよう】

【主な活動内容】

- ◇野生鳥獣被害の現状と被害対策（講演会）
- ◇猪肉（ジビエ）を使った商品の考案
- ◇地元企業と連携し、猪肉を使ったオリジナル饅頭（山香中華まん）の開発
- ◇地域の祭りや校内文化祭にて商品販売
- ◇「山香中華まん」のPR動画の作成、配信

令和7年2月の実践交流会では、これまでの取組の経過を発表するとともに、PR

タイムでは実際に「山香中華まん」を販売し、その後、各地区代表生徒とのグループディスカッションで意見交流をする機会を得た。参加生徒や保護者の感想では「地域の文化、伝統的な祭りは絶やすことなく継承していきたい」「地域の魅力や文化を知ってもらい観光客を増やしていきたい」「地域には良いところがたくさんあるので少しでも伝えていきたい」

「新しい視野が拓け、創造力も高まるのではないか」「地域貢献に携わる体験を通して自身の役割を見つけてくれるといいなと思います」等、一連の活動や実践交流会が生徒にとって貴重な経験となっていることが伺える。

地域・社会や産業界と連携した郷土の魅力発信

<b>事業所・団体プロフィール</b> 名 称：杵築市立山香中学校 住 所：杵築市山香町野原700番地5 代表者：校長 真砂 一也	<b>関係する県の施策</b> 子どもの力と意欲を伸ばす キャリア教育の推進事業 「大分っ子『未来創造プロジェクト』」
<b>具体的な取組</b> 探究課題を「郷土を知り、提案し、発信しよう」-山香中華まんの作りを通して～と設定し、農作物の保護のために捕獲したイノシシの命を有効に活用するとともに、イノシシの肉を使った商品開発により、地域を盛り上げる取組を行った。 昨年9月に、県農林水産部から農産物の鳥獣被害の現状と対策についての講話を聞き、対策として捕獲された動物のジビエ利用を題材にした探究活動を開始した。1年生は地域の現状を深く知る活動を、3年生は商品開発の活動を、2年生は開発した商品のPR活動を行った。	関連するSDGs 11 持続可能な都市とコミュニティ 12 持続可能な消費と生産 15 陸の豊かさを守ろう
<b>【特徴】</b> ○県農林水産部から、農産物の鳥獣被害の現状と対策についての講話を聞き、対策として捕獲された動物のジビエ利用を題材にした探究活動を開始 ○山香町のジビエ加工業者、まんじゅう製造・販売の事業所と連携し、イノシシ肉を使った中華まんを考案し販売	



- ◆写真  
講演会、商品の考案・販売  
協力会社、キャラクター



(3) 山香中家庭学習の約束（4箇条）の作成  
 家庭との連携では、家庭学習の習慣化とSNS等の適切な利用を促すため、令和6年度から令和7年度にかけて、生徒の意見を踏まえ、保護者（PTA役員）の方が知恵を出し合い作成した。

今年度は、全学級でこの約束を掲示し、定期考査前に確認したり、授業参観日の学級懇談会で話題にしたりする等、各家庭での活用を働きかけているところである。学期末の保護者アンケート「お子さんは家庭学習の約束を意識して勉強に取り組んでいると思いますか」の肯定的回答は50%であることから浸透していない状況も見られるが、学校と家庭による目標の共有、協働の一つのツールとして引き続き効果的な活用方法を考え、浸透させていきたい。

#### 4. 成果と課題

##### 【成果】

- 地域人材等活用計画を作成し、学校運営協議会等で協議することにより、家庭や地域の役割や責任の分担が図りやすい。
- 地域学校協働活動推進員による働きかけのおかげで地域全体で生徒たちの成長を支えていく環境が整いつつある。
- 家庭学習の約束（4箇条）は学校ではなく、生徒の意見を踏まえて保護者で作成したことに意義がある。生徒と定期的に確認したり、共有したりするなどして定着させていきたい。

##### 【課題】

- ▲地域人材等活用計画が前例踏襲にならないよう実施目的や教科領域との関連性、生徒の実態を踏まえて見直しを行っていく必要がある。
- ▲地域人材を積極的に活用することで教員の働き方改革につながる一方、活動内容によっては、一部の教員の負担増になっている取組もあるため実施時期も含めた検証が必要。

#### 5. おわりに

本校には自分に自信が持てない傾向の生徒が複数在籍しており、長欠生徒の割合増加の要因とも考えられている。したがって、自信のなさを克服するための取組が急務であり、コミュニティ・スクールの活動や地域人材を活用した取組を通して少しでも状況を改善したい、また、教職員の働き方改革にもつなげていきたいと考えている。

校長として二年が経過するが、地域貢献活動で周囲の大人から認められたり、校外から称賛の声を頂いたりすると「自分には良いところがある」「またやってみよう」「他にできることはないか」という気持ちになり、生徒の自己有用感が高まってきたように感じる。また、学校生活に一生懸命に取り組む生徒、仲間に対して優しさを発揮する生徒が増えてきたようにも感じる。教員と生徒の信頼関係も深まり、生徒・教職員・保護者・地域が一つになった「チーム山香中」が徐々に構築できつつあると感じている。

今後も地域の力を借りながら、また、生徒一人ひとりの成長を願いながら、「働き方改革」にもつながる学校経営を推進していきたい。

# 学校と地域の連携・協働による「地域とともにある学校」の実現

日出町立大神中学校 校長 河野 理

## 1. はじめに

学校の抱える課題が複雑化・困難化している現在、困難な課題を解決していくためには、学校はより一層地域に開かれ、地域と積極的に向き合う必要がある。一方、地域には子どもたちの学びを豊かにしていく役割が期待されているが、人と人との関わりや地域のつながりが薄れ、地域コミュニティの希薄化が懸念されている。

このような状況の中、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という学習指導要領の目標を学校と地域が共有し、新しい時代に求められている資質・能力を子どもたちに育む「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、学校・家庭・地域の連携・協働がこれまで以上に重要になっている。

本校では、小学校や学校運営協議会と目標やビジョンを共有し、子どもたちを育む「地域とともにある学校」づくりを進めている。

## 2. 本年度の主な取組

### (1) 校内での取組

4月当初の職員会議で、本年度の取組を提案し、第1回学校運営協議会で承認を受け、以下の取組を行っている。

- ① 定期テスト等の見直し
  - ・定期テスト・課題テスト  
国語・社会・数学・理科・英語  
(音楽・美術・保体・技家は単元テスト)
  - ・各種テスト  
単元テスト、小テスト、実技テスト等を教科ごとに実施
- ② 校則等の見直し
  - ・スリッパの廃止(移行期間を設定)  
防災対策の一環、保護者負担軽減
  - ・猛暑時期(熱中症対策)の対応  
制服及び体操服どちらも可
  - ・靴・靴下の色の緩和
- ③ 生徒とともに作る学校
  - 仲間づくり、凡事徹底、11-7-1-1運動の取組を生徒会活動と連動して実施



## 仲間づくり

= 合言葉 3つのつ =

### ○ つたえる

仲間の考えを聴く 自分の考えを話す

### ○ つくる

力を尽くす 力を合わせる  
課題を解決する 創り上げる

### ○ つながる

話をしたり話を聴いたり  
頼ったり頼られたりする日常をつくる



## 凡事徹底

### ○ 挨拶励行

自分から 気持ちの良い

### ○ 時間厳守

2分前着席 1分間黙想

### ○ 自主清掃

静かに 時間いっぱい 隅々まで

### ○ 整理整頓

### ○ 傾聴



## 11-7-1-1 運動

### ○ 就寝時刻

11時までに寝る

### ○ 起床時刻

7時までに起きる

### ○ 食事

1回目の食事 朝食をしっかり食べる

### ○ メディアの時間

メディアの利用は1時間以内にする



## (2) 大神小学校との連携・協働

日出町学校教育アクションプランには、校種間連携推進の取組が明記されており、以下の取組を行っている。

- ① 学校経営方針
  - ・めざす子ども像・学校像・教職員像のすり合わせ
  - ・生徒指導項目のすり合わせ
- ② 学校評価アンケート
  - ・教職員用・子ども用・保護者用の共通項目の整理
- ③ 小中合同の取組
  - ・教職員研修会、大神っ子集会、合同避難訓練の実施
- ④ 小学校への乗り入れ授業
  - ・音楽、外国語
- ⑤ その他
  - ・小中共通の体操服への移行を検討

## (3) 学校運営協議会との連携・協働

学校運営協議会は、学校・家庭・地域・行政の代表者で構成されている。学校運営協議会には3つの部会があり、以下の取組を行っている。

- ① 環境整備支援部会
  - ・安全な登校の見守り
  - ・桜の木の消毒、除草作業の分担
  - ・中学校の駐車場の確保
  - ・アルミ缶回収を通年で実施（生徒会）
- ② 地域連携支援部会
  - ・通学路の清掃活動（生徒会）
- ③ 学習支援部会
  - ・教科指導サポーター
  - ・部活動等の指導
  - ・マナー講座・マナー検定

## (4) 大神地区公民館との連携・協働

日出町教育委員会（社会教育課）では、部活動の地域移行・地域展開を進めている。

大神地区公民館では、中学生向けの地域文化クラブ活動として「大神もりあげ隊」を立ち上げ、地域の活性化、居場所づくり、リーダー育成をめざしている。

- ① 講演会の開催
- ② 生涯学習体験教室の実施
  - ・編み物・華道・ボクシング等
- ③ ふるさと祭りの企画
  - ・小中学生向けの活動を企画

## 3. 成果と課題

### (1) 成果

資料を準備し、年度当初に学校・家庭・地域が目標やビジョンを共有したことで、協働意識が高まった。

町教委の指導方針や部活動の在り方等の情勢を踏まえながら取組を進めたことで、小学校、学校運営協議会、大神地区公民館関係者の賛同・協力を得ることができた。

計画的・組織的に教育活動を実施したことで、教職員は生徒の成長を実感し、確かな手ごたえを感じることができた。また、取組を生徒会活動と連動させたことで、生徒も学校づくりへの参画意識が高まった。

予定した取組は、関係者の連携・協働により円滑に行われ、「地域とともにある学校」づくりが進んだと感じている。また、関係者とのネットワークを構築できたことは、今後につながる大きな成果といえる。

### (2) 課題

本校では、朝自習をなくし、授業改善で補うこととしているが、具体的な対策は示されておらず、担当任せになっている。学校運営協議会でも毎回学力向上に関する質問や意見が出ている。「働き方改革」は時間・費用・労力に対する効果（子ども・教職員・保護者）を考慮する必要がある。その上で、持続可能な教育活動について、検討していく必要がある。

大神地区公民館が「大神もりあげ隊」を立ち上げたが、運用面での課題は山積みである。また、部活動の地域移行・地域展開も難航しており、指導者・財源・活動場所等の確保、子どもの活動機会の保障、保護者の負担軽減等、条件整備を計画的に進めていく必要がある。

「地域とともにある学校」づくりを進めていくためには、「地域学校協働本部」を大神地区公民館に設置し、地域資源を有効に活用できるようにしていく必要がある。また、任意団体の在り方等も含め、関係機関と連携して、日出町全体で考えていく必要がある。

# 「主体的・対話的で深い学び」の実現

国東市立志成学園 校長 丹 田 康 彦

## 1. はじめに

くにさき地区校長会は、姫島村と国東市内の小学校・中学校・義務教育学校の校長10名で組織されている。年間6回の定例研修会を行っている。

### ◆定例研修会の主な研修内容

- 第1回 国東市教育長講話・年間研修計画
- 第2回 今日的課題（テーマ別研修）
- 第3回 別府教育事務所長講話
- 第4回 民間企業幹部講話
- 第5回 今日的課題（テーマ別研修）

## 2. 研究主題・研究内容

アンケートをもとに、今日的課題についての研修とともに中学校長会では、「主体的・対話的で深い学び」の実現をテーマに掲げ研究に取り組んだ。

## 3. 研究の実際

### 【志成学園の取り組みより】

#### ◆研究主題

「主体的・対話的で深い学び」の実現  
～重点的取組・学習規律・新大分スタンダードを軸に据えた授業改善の工夫～

#### (1) 学校評価のための「4点セット」を柱とした学校経営

「4点セット」の作成にあたっては、校長が学校の喫緊の課題を見極めた上で、年度末から年度始めにかけてそれぞれの項目を学校経営方針として明示し、各主任を中心としたメンバーで構成した運営委員会で協議をし、その後全教職員に提示をして学校全体で取組を進めていくこととなる。

取組の進捗をPDCAによる検証・改善サイクルに沿って、本校では、2ヶ月に一度、班別会議・運営委員会を開き児童生徒のアンケートをもとに検証を行い、改善策を協議し、見直しを行っている。④の取組指標によっては、学期ごとに検証をする内容もある。

検証する視点としては、①取組指標に対

する「取り組み状況の確認」、②達成指標に対する「達成状況の確認」③検証・改善方策の三つである。これらの三つについて、まずは三つのグループ（学力班・生活班・体力班）がそれぞれ班別会議で検証し、運営委員会でさらに検証を深めて、その後の取組につなげている。また、この「4点セット」は、学力向上プランにおいても、学力・学習にかかる達成指標や学力・学習にかかる重点取組・取組指標として位置づけている。

①の「重点目標」に関しては、学校・家庭・地域が取り組む内容を位置づけており、それぞれが主体となって分担し、③の「重点的取組」を設定している。

本校の「4点セット」における言語能力の育成に関しては、学校が取り組むこととして、「重点的取組」に「表現する場の設定」や「文字を丁寧に書く」ことの指導、「話し合い活動を生かした体育授業の充実」を位置づけている。家庭では「家庭学習の確立」、地域では「学習支援の工夫」に力を注いでいる。

#### (2) 学習の素地づくりとしての「5つの取組」

本校では、全校児童生徒が、日常的に意識して取り組んでいく内容を、学習と生活に分けて、「5つの取組」を設定している。

(図1)

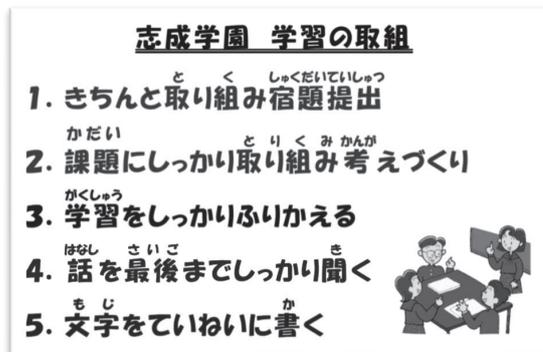


図1：本校の「5つの取組」

この5つは、児童生徒の実態のほか、課題となる内容や教員側の願いをもとに作成したものであり、「4点セット」の達成指標にも位置づけている。2ヶ月に一度、これらの項目について児童生徒アンケートを実施し、検証・改善の元になるデータとしている。また、生活と学習の5つの取り組みを柱に据えて、児童生徒会の取り組みも展開されている。

5つの取組は、どれも児童生徒の学習を下支えする内容であり、主体的・対話的な学習を成立させる素地となるものと考えている。R6年度末の達成率は、「1. きちんと取組宿題提出」(87.2%)、「2. 課題にしっかり取り組み考えづくり」(74.6%)、「3. 学習をしっかりふりかえる」(76.5%)、「4. 話を最後まで聞く」(67.0%)、「5. 文字を丁寧に書く」(56.4%)であった。なおこれらの数値は、全校児童生徒(1～9年生)のアンケート結果の平均値である。このうち「5. 文字をていねいに書く」は、言語能力の育成の一つとして、指導内容を明確にした指導を行っている(図2)。話の聞き方や文字を丁寧に書くことは、すべての学習活動につながる基礎的な言語活動であり、依然、本校の児童生徒の課題である。

## 丁寧に文字を書こう

○正しい書き順で書く。  
○とめ、はね、はらい、おれ、まがり丁寧に。  
○マスや行を意識して誰が見ても伝わる文字を書く。

**1. 落ち着いて集中して取り組もう。**

- ・下敷きをしく
- ・鉛筆の濃さに気をつける

**【筆箱の中身】**

**小学校課程** 鉛筆・赤青鉛筆  
消しゴム・ネームペン  
定規(折り畳みでなくめもりが見えるもの)  
学年に応じて蛍光ペン・ペンの使用可  
(赤・青・黒程度)

**中学校課程** シャープペンの使用可

**2. 正しい姿勢で座ろう。**  
正しい姿勢①深く座る  
②足を机に入れる  
③目と机の距離  
④椅子や机の高さ調節

合い言葉  
「足はビタ・背筋はピン・書かないほうの手はトン」  
「机と椅子の間は握りこぶし1つ分」

**3. 筆記用具を正しく持とう。**

図2：「丁寧に文字を書こう」の取組

このほかにも、学習規律の徹底として、授業開始2分前着席・1分間黙想や返事返礼の徹底を全校で取り組んでいる。

(3) 授業改善テーマの検証と改善

R6年度の校内研究テーマ(授業改善テーマ)は、「主体的に学びに向かい、表現できる児童生徒を育成する授業の実践～学びを深める振り返りの充実をめざして」である。

この研究テーマは、大分県教育委員会が提唱している「新大分スタンダード」(図3)の中で「1. 1時間完結型」に示されている視点を軸に据えており、「めあて」と「振り返り」「課題」と「まとめ」の整合性を重要視するとともに、「振り返り」の場面に焦点をあてている。

新大分スタンダード R5年3月版

「学びに向かう力」「思考力・判断力・表現力」を育成するワンランク上の授業を目指して

**1 1時間完結型**

- \*学習の見通しをもたせ、意欲を高める「めあて」
- \*学びの成果を実感し、学んだことや意欲・問題意識等を次につなげる「振り返り」
- \*追究すべき事柄を明確にする「課題」、追究した結果を明確にする「まとめ」

**2 板書の構造化**

- \*思考を整理したり促したりする板書、思考の過程を振り返ることができる板書

**3 習熟の程度に応じた指導**

- \*「具体的な評価規準」に基づく確かな見取り
- \*「努力を要する状況」の児童生徒に対する手立ての工夫

**4 生徒指導の3機能を意識した問題解決的な展開**

- \*各教科等の見方・考え方を働かせて展開する「課題設定 → 情報収集 → 整理・分析 → まとめ・表現・交流 → 振り返り・評価」等の学習過程の繰り返しの中で行われる
- ・知識の関連付け、問題の発見・解決、情報を精査した考えの形成、思いや考えに基づく創造
- ・様々な人との対話・協働による自分の考えの深化・拡充

子ども主体の学びを支援  
情報活用能力の育成

**ICTの効果的な活用**

- \*各教科等の特質や学習過程を踏まえた活用
- \*子どもの学びを広げ、深める活動で活用(思考の可視化、意見交流、学習の記録等)
- \*子どもの興味・関心、実態に応じた活用

図3：「新大分スタンダード」  
(大分県教育委員会HPより)

本校では、R5年度に「振り返りの視点」を作成している。深い学びへとつなげるために、全校で統一して「過去・現在・未来」の時空間を意識した明確な視点をもたせた振り返りとなるようにした(図4)。以下に「振り返りの視点」のポイントを示す。

さらに、R6年度は、子どもたちとの振り返りを共有する場を意識して設定するようにした。

がくしゅう ふりかえろう  
学習を振り返ろう

振り返りの視点

げんかい 現在		あきり 未来	
自分の成長	学習方法	学習の振り返り	学習への意欲
○わかったこと	○学習のしかた	○前の学習と次の学習と	○もっと知りたいこと
○がんばったこと	○学習のツール	○自分の生活と	○やってみよう
○友だちから学んだこと	○他の教科と	○疑問に思ったこと	○わからなかったこと

図4：「振り返りの視点」



発表を行うようにしている。発表時には原稿を読むのではなく、事前に暗記したうえで、原稿なしで発表する指導を行っている。期別集会では、年間を通して、全員が発表経験を積めるようにしている。発表が止まる場面も多々あるが、聞く側にも「待ちの姿勢」がしっかりと習慣づいている。児童生徒にとっては確かに緊張する場面ではものの、学年が上がるにつれ、長文も語れるようになってきている。

- ② 体育の授業における意見交流の場の設定  
これは「4点セット」に位置づけている取組指標でもある。体育の学習時に、運動量は確保しつつ、振り返りの場以外に必ず、意見交流する場を設定している。課題に対してチームや個人のめあてや作戦を立てたり、ゲームの試技や試技後の反省などについて話し合ったりするようにしている。

- (6) 「グローバル科」における英語表現のアウトプット

開校時より、総合的な学習の時間の名称を「グローバル科」に変更し、本校の特色でもある英語を用いた学習活動を全学年に位置づけている。各期における具体的な取組の内容は、以下のとおりである。

【中期：5～7年生】

5・6年生は、地域に残る芸能や伝説を英語に訳し文化祭発表やパンフレットづくりにつなげている。7年生は、世界農業遺産である椎茸栽培や藺草づくりについてGTを招いたり、タブレット端末で調べ学習を行い、文化祭や市開催の「教育の里づくりの集い」で発表したりする活動を続けている。(写真2)



写真2：7年生「教育の里づくりの集い」(令和6年度)での発表の様子

【後期：8・9年生】

8年生は、国東市のパンフレットをもとに、修学旅行での自主研修で外国の方に国東市を紹介するための文章を英語で作成している。

9年生は、8年時に作成した紹介文を用いて、修学旅行先で実践を行っている。また、将来の夢について作文を書き、英訳し、学級内で交流したり年度末の集会で発表したりする活動を行っている。

- (7) 保護者・地域との連携

保護者との連携として、4点セットには、重点的取組・取組指標として①「家庭学習の確立」：「保護者は、設定した重点期間中、わが子の宿題の取り組みの確認や声かけ(字を丁寧に書く)をする」、②「生活習慣の確立」：「保護者は、年2回「生活習慣向上」の取組への協働に積極的に関わる」、③「メディアルール・家庭学習ルールの徹底」：「保護者は、設定した重点期間中、家庭におけるメディアルールの作成・実施を徹底する」と「保護者は、設定した重点期間中、「学習の手引き」に応じた学習ができるよう、内容の共有をしたり励ましの声かけをしたりする」を位置づけ、「家庭学習の手引き」を配布し協力をお願いしている。(図6)

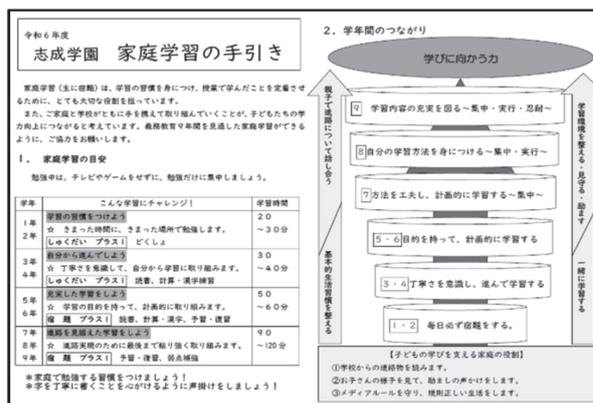


図6：本校の「家庭学習の手引き」

特に②「生活習慣の確立」の項目については、③「メディアルール・家庭学習ルールの徹底」の内容を盛り込み、1・2学期に一度、重点週間を設定し、調査用紙による点検を行い協力を仰いでいる。

検証については、生活習慣の見直し重点期間における調査や学期末の保護者アンケートを実施し、教務主任が結果をまとめ、保護者に還流するとともに啓発を行っている。

る。しかし、あくまでも重点週間での取組になっているため、数値的には、肯定的評価が、5割程度で高止まりしており、日常的な取組までには至っていないのが現状である。

地域の学習支援としては、授業におけるGTの他に、水曜日の放課後、7・8年生の希望する生徒を対象に、「マナサポ」と名付けた補充学習の時間を設けている。退職した教員に数学や英語で学習サポーターになっていただき、2時間の補充学習をお願いしている。また、9年生を対象として、市の予算運営により、「高志塾」を開設している（写真3）。講師は、私塾でアルバイトをする大学生が中心であり、受験対策を視野に入れて行っている。こうした保護者や地域の協力も、生徒の主体的に学ぶ意欲につながっていると考える。



写真3：「高志塾」の様子

#### 4. 成果と課題

＜成果＞

ここまでみてきた、主体的・対話的で深い学びの育成に向けた様々な取組の成果は、9学年にわたる一斉性や9年間にわたる系統性・継続性を担保できる義務教育学校の特色といえる。また、後期課程教員の前期課程への乗り入れ授業や教職員どうしの互見授業も児童生徒理解や授業改善につながっていると考える。さらに学習規律についての「5つの取組」や2分前着席・1分間黙想、返事返礼の徹底などの全校的な取組は、落ち着いて学習に向かう姿勢として学習を下支えする姿にもつながっている。

「4点セット」の取組や新大分スタンダードを軸とした授業改善によって、言語能力

の育成や主体的・対話的で深い学び・自主的な課題解決にいたる取組として教職員が同じ方向を向くことができ、マネジメントをする上でも有効であると考え。また、班別会議や運営委員会を通して検証と改善を実施し、PDCAサイクルを確立できていることは、学校教育目標の実現のために非常に有効であるといえる。

＜課題＞

児童・生徒自ら課題解決に至る学習展開を構築するための課題提示においては、提示までのテンポや想定した反応に導けないことで、まだ自らの課題として認識するに至っていない。授業の最後に設けている「振り返り」の場については、その時間を確保するための授業のテンポが課題である。振り返りの共有については、単に書かせるだけや教師が感想を述べるだけで終わることも散見されるため、振り返りのあり方の徹底が求められる。

またICTの活用についても課題は残ったままである。授業における教材や資料の提示としては、職員の得手不得手や年代に関わらず、活用の頻度も高まっているが生徒一人ひとりがタブレット端末を使用しながら学習を展開することについては、情報教育推進委員会や運営委員会でタブレット端末の活用について本校のスタンダードとなる方針を確立していかなければならない。

#### 5. おわりに

くにさき地区中学校長会は、4名であり、日々連携を重ねながら、教育課題の解決に向け努力を重ねている。今年度は、本主題とともに、各校にアンケートをとり、各校が抱える今日的課題を洗い出し、グループ協議を重ねることができた。8項目のテーマごとにグループ協議できたことは、喫緊の課題解決に向けて意義深い研究となった。

# 豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育

大分市立鶴崎中学校 校長 池田 憲彦

## 1. はじめに

令和3年度から全面実施となった新中学校学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」の理念のもと、これまでの学校教育の実践や蓄積を生かし、子どもたちが未来を切り開くための資質・能力を一層確実に育成することを目指して、確かな学力の育成、道徳教育の充実、豊かな心と健やかな体の育成など、育成を目指す資質・能力の明確化や「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善の推進、カリキュラム・マネジメントを推進することが求められている。これらは、先行きが不透明で将来の予測が困難な時代において、様々な変化に主体的に向き合い、他者と協働して価値の創造に挑み、よりよい社会を形成していく人材育成がこれからの中学校教育の役割であると示唆しているものだと考える。

私たち大分市中学校長会は、これまでの教育実践や研究の蓄積を生かしながら教育課題の改善に向けて、校長相互の資質向上と目的を明確にした研究を推進してきた。このような認識に立ち、校長及び教員の資質の向上をめざし、市定例中学校長会の際に、事例研究を行い研鑽に努めるとともに、会場校の学校経営について発表を行っている。

## 2. 研究主題及び研究内容・方法

### (1) 基本方針

大分市中学校長会は、総力を結集し、大分市教育の発展と各校の喫緊の教育課題の解決を図るため、会則に則り研究主題を定め、学校経営力と喫緊の課題等に対応する指導力の向上を目指し、研鑽修養に努める。

### (2) 研究主題

豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育

### (3) 喫緊の課題

- ① 確かな学力の定着・向上について
- ② GIGAスクール構想の推進について
- ③ 特別支援教育の推進について

- ④ いじめ問題・不登校への対応について
- ⑤ 教職員の資質向上及び人材育成について
- ⑥ 学校における児童生徒の安全・安心の確保について
- ⑦ キャリア教育の推進について

### (4) 研究方法

- ① 定例校長会の会場校における授業参観及び研究協議
- ② 喫緊の課題に対する実践発表及び研究協議
- ③ 人権教育講話及び研究協議
- ④ 各種研究大会参加による研究成果の還元
- ⑤ 教育研究校・園、施設見学等による研修
- ⑥ 実践事例の交流等

### (5) 研究計画

- ・ 4月22日 年間研修計画の提案・決定
- ・ 5月29日 喫緊の課題⑤事例研究  
九州大会発表予定事例研究
- ・ 6月24日 人権教育研修
- ・ 9月12日 喫緊の課題③、④事例研究
- ・ 10月21日 人権教育研修
- ・ 12月5日 喫緊の課題⑦事例研究
- ・ 1月15日 喫緊の課題①、⑥事例研究
- ・ 2月12日 喫緊の課題②事例研究

※第2回～第8回 会場校による発表

野津原、東陽、原川、賀来、明野、城南、判田

## 3. 実践事例

### 【事例発表1】喫緊の課題⑤

佐賀関中学校 釘宮 正和

### (1) 学校の概要

佐賀関中学校は大分市東端の佐賀関半島の付け根の部分に位置する。大煙突を有するJX金属の工場群を臨む場所であるとともに、国道九四フェリーの発着港の正面の場所に位置している。昭和40年代までは毎年千人を超える生徒が在籍していたが、令和2年度から全校生徒が30人を切ってお

り、本年度も全校生徒20名の小規模校となっている。

(2) 教職員の資質向上の取組

① 小中連携

- ・小中合同の学校運営協議会
- ・2部会に分かれた取組と協議を通じた研修の充実
- ・「振り返り」の共有等、小中で連携した授業改善
- ・小中合同企画会議の実施

② 人権教育の推進

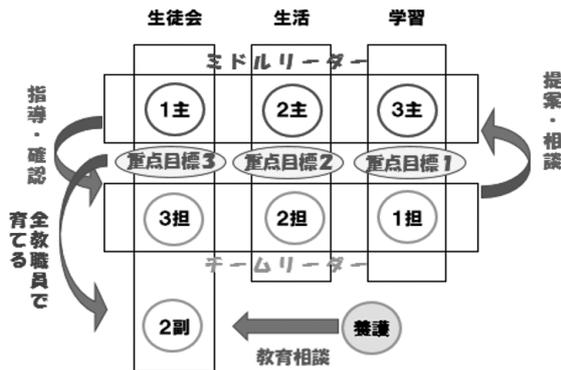
- ・人権教育の4視点を意識した授業づくり
- ・安全・安心な「居場所づくり」は授業から
- ・間違いやできないことを笑われない授業
- ・人権教育のカリキュラムの見直し
- ・指導主事を招いた授業実践

③ 小規模校における取組

- ・生徒一人ひとりに対するきめ細やかな対応と組織的な初動
- ・短時間の生徒の情報交換による、全教職員での全校生徒の情報共有
- ・外部講師、地域人材の活用

(3) 教職員の人材育成の取組

学校の重点目標の達成に向け、7名の教員を下図のように位置づけ人材育成を進めている。



① ベテラン教員の活用

- ・学年主任ならびに教務、小中一貫、人権教育等、本校の根幹となる分掌の主任
- ・ミドルリーダーとして学校経営への参画
- ・学年の運営ならびに学級担任、副担任への助言、指導

② 若手の育成

- ・それぞれ学習部、生活指導部、生徒会の責任者として全体への提案や生徒への指導を中心となる
- ・チームリーダーとして重点目標と連動した検証・改善
- ・初任者については学年、分掌、初任研等、様々な角度から全教職員での育成
- ・複数教科や分掌を持つことで、多角的な教育観の獲得

③ 持続的な学校経営に向けて

1人が複数の校務分掌を担当するため、異動で職員が入れ替わった際に次年度の活動が滞ることが考えられる。持続的に教育活動を進めていくために長期的な引き継ぎを年度当初から行なっている。

- ・異動を見据えた引継ぎと分掌配置
- ・行事の見直しと働き方改革の推進
- ・データ共有とフォルダの整理

(4) 成果と課題

<成果>

- ・教師が人権教育を意識した授業づくりを意識することで生徒の意見交流が活発となり、活気ある授業が進められている。
- ・研究主任を核として、組織的な校内研修や小中連携が進み、教職員の協働意識が向上した。
- ・教職員一人ひとりに対して面談等の時間をかけることができる。
- ・分掌が重点目標達成に直結するため、学校運営への参画意識の向上につながる。

<課題>

- ・教科指導力の向上のための手立て
- ・一人ひとりの生徒や保護者との関わりは深い、多様な生徒に関わる機会が少ない。

【事例発表2】喫緊の課題③

大在中学校 佐藤 栄治

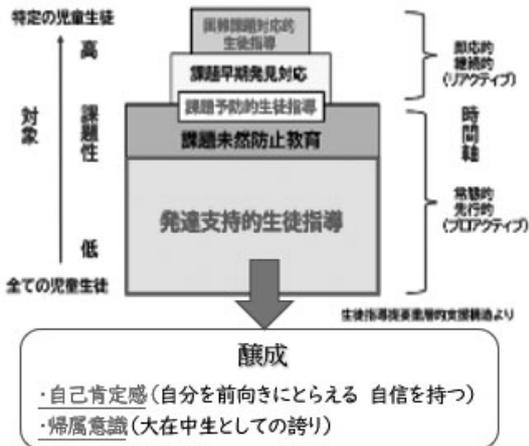
(1) 学校の概要

大分市東部に位置し、区画整理により、旧来の集落は昔の面影を留めないほどの変貌を遂げている。平成以後、田畑の宅地造成が進み、アパートや商業施設の建設とともに新しく大在に居を構えたり、大学生や企業関係者等で一時的に居住したりする人が急増した地域である。

また、校区内に保育園～大学、特別支援学校、児童養護施設もあり、教育・学校に寄せる関心も高い。地域イベント、公民館活動も盛んである。

生徒は学校生活に意欲的に取り組み、明るく元気に学校生活を送っている。

## (2) 発達支持的生徒指導の取組



生徒自身が自発的・主体的に行動できるように基準を示す。「褒める」指導の徹底

### 【教師の目】

- ・生徒を好意的な目で見る。
- ・スローガン「Be a No.1! ～今を超えよう～」
- ・生徒の成長を具体的に評価する。

### 【大在中のいい話】

生徒の校内外での善行を内容・写真入りで校内の各所に掲示する。

### 【No.1カード】

「大在中のいい話」に掲載された生徒を校長室で表彰する。

### 【保護者・地域連携】

- ・「大在中のいい話」を「すぐーる」で保護者・学校運営協議会委員に送信する。
- ・生徒がスローガンを達成したら保護者に伝える。

## (3) チームとしての取組

### 【キーワード「慮る」】

生徒の日常の言葉遣いについて注意喚起をするためのキーワード。生徒指導の目標等、適宜使用し、教職員も意識している。

### 【人権教育・人間関係づくり研修】

夏季休業中に職員研修を行い、2学期以降の生徒の指導に生かす（嫌な言動・

うれしい言動等）

### 【「心の悩み」相談機関の紹介】

長期休業終了前に学校が始まることへの不安感解消の手立てとして「すぐーる」にて配信する。

### 【「黎明の会」】月に1回17:45～

不登校の保護者（生徒）を対象として定時制、通信制の高校を招き学校紹介をしてもらう。（各回2校程度）保護者同士・学級担任の情報共有の場ともなっている。

### 【大在おでかけフレンドリールーム】

市教委が大在公民館にて月2回午前中実施。教頭・生徒支援コーディネーターが適宜訪問して生徒と交流している。

### 【ステップルーム（SLS）の利用】

入級希望生徒・保護者とルームの意義について校長面談、承認後利用する。今年度よりSLSが配置、より細かな配慮ができるようになった。

### 【生徒指導部会】

月2回実施。各種問題等、いじめ・不登校について管理職と生徒指導担当・養護教諭・SSWと情報共有。

### 【スロースタートP】

- ・4月中は6限授業1日（教育相談午後下校含む）
- ・9月10日まで5限授業（職場体験・自然の家含）

### 【教育相談アンケート】

毎月実施。生徒指導主事がとりまとめを行う。

## (4) 成果と課題

### 【成果】

#### ○価値基準の浸透

- ・掲示物やカードの配布により「褒める」ことを形として残すことで生徒の中には行動に対する価値基準が少しずつ浸透している雰囲気を感じる。

生徒を「褒める仕掛け」に学年全体での取組もみられる。リーダーが育ち、集団がマイナスの雰囲気にならないように歯止めをかけている。

- ・校内、地域のボランティア活動にも多数の生徒が進んで参加している。

## 【課題】

学校教育活動アンケート(教職員)

年度	仲間を傷つける言葉 遣いをしていない	仲間の間違いをむやみに 否定・笑っていない
令和6年度	(1学期) 52.1	(1学期) 66.7
	(3学期) 34.0	(3学期) 74.0
令和7年度	(1学期) 40.0	(1学期) 57.5

- ・ 上表の2項目について数値は好転しているとは言えない。今年度重点項目としたことで教職員の生徒を見る目がより厳しくなっていると考えられるが夏季休業中の職員研修等を生かして職員が生徒を「より良い目」で見ることができるようになりたい。
- ・ 1学期終了時の不登校生徒数の割合(%)は(R5) 5.5 (R6) 4.4 (R7) 4.4となっている。  
学力との関係もある中、減少へ向けて具体的な手立てを常に検討していく必要がある。

### 【事例発表3】喫緊の課題④

神崎小中学校 後藤 健司

#### (1) 学校の概要

大分市神崎小中学校は、大分市東部に位置し、ウミガメが産卵のために上陸するこうざき海岸を有する自然豊かな環境の中にある。平成30年に神崎中学校とこうざき小学校が大分市小中一貫教育校として新たな一歩を踏み出し、今年で8年目を迎える。

今年度は「豊かな心と自学力の育成」を学校目標とし、「学びの自立」「生活の自律」「生き方の而立」を目指し、学校づくりを進めている。また、今年度は合言葉として「3つのあ」という言葉の浸透を図るように取り組んでいる。「あいさつ・ありがとう・あやまる」という内容だが、教職員が積極的にこの言葉を発信することにより児童生徒の中によりよい人間関係を築くことができると考え、取り組んでいる。

#### (2) 特別支援コーディネーターを中心とした指導体制の構築

ア 学校全体で取り組む特別支援教育

##### ① 小中連携した特別支援教育推進委員会

##### ② 教頭の役割

授業支援、個別対応、保護者、関係機関との連絡調整、人員配置の調整等

##### ③ 授業支援

補助教員、特別支援学級担任、専科教員、西校舎の教員(中学校籍)、管理職が教室に入り、担任の援助、児童への指導を行う。

#### イ 他機関との連携

##### ① 市教委

教育委員会、教育センターより現状視察、今後の取り組みについてケース会議をもち、補助教員の増員の要請。新採用教員についても指導、助言を定期的に要請。(4回実施)

##### ② 支援学校

大分支援学校に相談票を送り、授業観察、フィードバック、研修を行い、特別支援教育への理解を深めた。

##### ③ 児相・支援センター

児童相談所、東部子ども家庭支援センターと連携を図り、家庭環境の改善や保護者とのケース会議を持った。

##### ④ SC、SSW

SC、SSWとの連携による子どもの行動観察や相談活動、保護者との連携を図った。SSWについては年度当初要請訪問であったが、数回にわたり訪問依頼、フィードバックを行ったことから2学期からは毎週2回の定期勤務となった。SSWの紹介により3名が1学期末、夏季休業中に各機関に相談に行くなど個に応じた対応ができた。

#### (3) 特別支援教育研修の充実

##### ① 特別支援教育への理解

- ・ 職員室通信による特別支援教育の理解
- ・ 校内研修で特別支援教育に関する職員研修

##### ② 子ども理解

- ・ 特別支援学級在籍児童生徒の共通理解
- ・ 通常学級在籍だが、学習や生活に困りがある児童生徒の共通理解
- ・ 保護者面談での成育歴、家庭での様子、困りの共有を職員で共有
- ・ 保護者からの要請で、取り出しをする等の弾力的運用の取り組み

##### ③ 環境整備

特別支援教育の視点を取り入れた授業のユニバーサルデザイン、教室環境のユニバーサルデザイン化

#### (4) 成果と課題

##### 【成果】

- ・本校の教職員は兼務発令により、小学校と中学校の双方の教育に携わることができる。指導の困難さを全員で共通理解し、助け合い、協力しながら取り組むことができる雰囲気は本校の強みである。西校舎（中学校籍）の教職員が東校舎に行き、授業支援を行う取り組みを始めたが、誰一人嫌な顔ひとつせず、協力する姿が見られ、「チーム神崎」を感じた。
- ・研修で学んだ「冰山モデルから子どもの背景を理解する」「子どもの守備範囲を広くする」この2点を主に教職員が理解し、実践できるよう取り組んだ。担任の困りを管理職が理解し、適切な支援、アドバイスができるように一緒に取り組んだ。保護者面談で親の困りや悩み、子どもの成育歴など広い視点から子どもを理解し接することで保護者との関係作りが進み、子ども心を開き、行動面での変化がみられるようになってきた。

##### 【課題】

- ・本校は1～4年生の校舎と5～9年生の校舎に分かれている。特別支援学級担任は両校舎を行き来しながら授業を行うことから時間的制約、移動距離、不在時の対応等の課題がある。
- ・今年度は対処療法的な取り組みであり、どのような支援をするのが良いのか、どこにゴールを置くのかが手探り状態で根本的な解決ができなかった。
- ・保護者との面談では、繰り返し面談することで保護者との信頼関係を作ることができた。しかし、病院受診や特別支援学級入級については一歩が踏み出せない保護者も多く、今後も継続的に保護者と連携していく必要がある。

#### 【事例発表4】喫緊の課題⑦

賀来小中学校 本田 英樹

##### (1) はじめに

本校は、大分市で初めての小中一貫教育校として、従来の大分市立賀来小学校と大分市立賀来中学校を統合して、平成19年度に開校した。教科指導の系統性を重視し小

中の枠を超えた乗り入れ授業も積極的に行っており、1年次から英語教育を行っていることも特色である。学校教育目標は「よりよい自分になる」としている。前期・中期・後期の子どもの異年齢集団活動を中心に、子どもたちに豊かな人間性と自立する力の育成を目指している。

「生徒指導の実践上の視点」に基づいた活動を通して「自己有用感や所属意識を高める集団づくりの在り方」を教育実践上のテーマとして捉え、「校内研究を中心とした取組」、「小中一貫教育活動を中心とした取組」、「地域等と連携した取組」の3点から研究を進めることで、9年間を見通した「自己指導能力」の育成が図れると考えた。

##### (2) 校内研究を中心とした取組

各学年で重点目標を定めることで、実践内容と目標の整合性を確認した。

	重点目標
1年	人の気持ちを考え、自分の気持ちを素直に言える。相手の良さを伝えられる。
2年	相手の気持ちを理解しようとしながら、行動したり、言葉を発したりできる。
3年	友達を大切にし、相手の考えを受け入れる雰囲気をつくり、自己表現できる。
4年	自分の考えに自信をもち、自発的に行動する。下級生に優しくできる。
5年	自分たちの課題を見つけ、よりよい学年を目指して自主的に活動できる。
6年	学年の実態を自分たちで見直し、よりよい学年へとなるための行動できる。
7年	リーダーを中心に自主的に動き、思いやりのある言動ができる
8年	後期のリーダーとして信頼され、自分たちの良さを生かせる学年にできる
9年	リーダーを中心とした自治力を高め、自分たちの手で行事や進路実現に向けて行動できる。

##### (3) 小中一貫教育活動を中心とした取組

- ア 入学式、全校お見知り集会（遠足）
- イ 豊賀祭「文化の部」「体育の部」
- ウ 賀来小中学校イングリッシュキャンプ
- エ 儀式的行事（立志式）、期別集会等

##### (4) 地域等と連携した取組

###### ア かた昼消防団

平成11年4月から、賀来地域の消防団と連携し、児童生徒の防災意識と地域貢献の意識を高めるために11月終わりの日曜日の午前中に希望児童生徒30名程度と消防団員20名程度で行っている。

(かた昼消防団の様子)



イ 職業講話

ウ 「おやじの会」主催の「合賀来の門」と「校内キャンプ」

(5) 成果と課題

**【成果】**

- ・自己指導能力の獲得を支える「生徒指導の実践の視点」の共通理解が進み、生徒指導とキャリア教育の一体化が図られた。
- ・小中一貫教育の強みを生かし、「よりよい自分になる」ための、9年間を見通した系統的なキャリア教育が機能している。
- ・地域との連携を通して、児童生徒の地域への所属感が高まり地域の連携が強化された。

**【課題】**

- ・教職員が「生徒指導の実践の視点」を意識して指導するための教材・評価方法の充実が課題である。
- ・児童生徒が自己の成長をより具体的に言語化し、キャリアノート等を活用し、次の目標へとつなげる指導の工夫が求められる。
- ・前期・中期・後期の活動をさらに組織化し、学校行事等にも機能させていく必要がある。
- ・目指す子ども像の共有化を進め、持続可能な体制づくりをしていく必要がある。

(6) おわりに

本校の取組は、生徒指導とキャリア教育を融合させ、児童生徒一人一人が「よりよい自分になる」ことを目指す実践である。地域とともに育つ教育を通して、子どもたちは自らの可能性を信じ、将来への夢や希望を具体的に描き始めている。

今後は、児童生徒が自らの成長を自覚的に捉え、社会の中で自分の役割を果たそうとする姿をさらに育てていくことが求められる。本研究を通して得られた成果と課題をもとに、自己指導能力を核としたキャリア教育の充実を今後も推進していく。

# 教員の資質・能力の向上に向けた組織的な研修

## ～臼杵市SD研修を通して～

臼杵市立北中学校 校長 戸高 浩二

### 1. はじめに

教職の志願者の減少が続いている。令和8年度大分県公立学校教員採用試験中学校教諭の実質倍率3.0倍だった。教科によっては、実質倍率が1.2倍（理科）という低い数値も見られた。倍率の低下により、教員の授業力や指導力等の質の低下が懸念される。

また、大量採用時代の教員の退職等に伴い、欠員が生じている学校が増加している。欠員を補充するために、校長自らが退職教員や免許を持ちながら教職に就かない「ペーパーティーチャー」を探し、懇願することがある。このような現状の中、経験年数の浅い教員の資質・能力をいかにして高めていくかが学校運営における課題になっている。

様々な価値観をもつ生徒・保護者への対応や、確かな学力を身に付けさせるための授業を行うためには、ベテランが持つノウハウの継承や、OJT、Off-JT等の研修による教員の資質・能力の向上が必須である。

臼杵市では市教委と校長会が連携を図りながら「中学校学力向上対策3つの提言推進拠点校」に指定されている西中学校を中核とした人材育成を行っている。

### 2. 現状と課題について

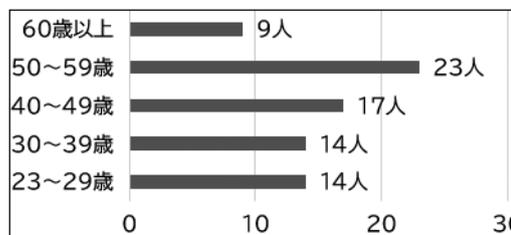
臼杵市の5つの中学校は県内の多くの中学校と同様に、少子化による生徒数・学級数の減少が進んでいる。各校のクラス数と生徒数は下記の通りである。

	学級数	生徒数（人）
北中	8（特支2）	189
南中	5（特支2）	37
西中	14（特支3）	324
東中	8（特支2）	141
野津中	7（特支2）	135

クラス数の減少に伴い、下記の表に示すように臼杵市内の中学校は、複数で同じ教科を持つケースは少ない。また、20代の若手教員の数は増加傾向にある。

	0人	1人	2人	3人	4人
国語		2校	2校	1校	
社会		2校	2校	1校	
数学		1校	2校	1校	1校
理科		1校	3校	1校	
外国語		1校	3校	1校	
音楽		5校			
美術	3校	2校			
保健体育		4校	1校		
技術	3校	2校			
家庭	3校	2校			

教科担当教員の数と学校数



臼杵市中学校 年代別教員構成

※産休・育休・病休等取得者、臨時講師を含む  
※養護教諭は除く

臼杵市の中学校は、3人以上で同じ教科を持つケースは極めて少ない。国・社・数・理・英の5教科すべてで、担当教員が3人以上在籍しているのは西中学校のみである。また、音楽科等の技能教科に関しては、西中学校の保健体育科以外はすべて1人が担当している。このように同じ教科の教員が切磋琢磨しながら授業力を高める環境は乏しい現状である。特に経験の浅い教員が、日常の業務の中でベテラン教員から授業等に関する知識・技能を学ぶ機会は少ない。

### 3. 研究内容

教員の資質・能力の向上を図るため、臼杵市は各校のOJTとともに、市教委によるOFF-JTを行っている。市教委では、経験年数の浅い教員や、希望する教員を対象に、SD (Self Development) 研修を実施している。令和7年度は、5校の20代から50代までの教員11名が受講し、年3回のテーマ研修と西中学校が実施している公開授業の参加を実施している。

校長会ではSD研修の理解を示すとともに、市教委と連携しながら、教員の受講や事後指導等、協力体制を構築している。

#### (1) テーマ研修

テーマ研修では西中学校の指導教諭・教諭が講師となり、指導案の書き方や学級経営などについて講義・演習などを行った。

##### 【指導案の書き方】

本時のねらいの書き方とそれに対応した評価、めあてと振り返り・課題とまとめの関連など指導案を書く際にポイントなる項目について学んだ。



研修の様子

これまでは文末の書き方のみを意識していましたが、教師、生徒それぞれの立場をもとに書くことが必要ということを理解でき、なぜ文末の表現を変えるのか納得することができました。また、A層の振り返りを予測し、授業作りをしていく流れを知ることができて良かったです。単元の目標を考える際に、いつも頭を悩ませていたので、「指導と評価の一体化」を読み込むことで書きやすくなるのが分かりました。

##### 研修後の受講者の振り返り

##### 【学級経営】

学級経営について講師（西中・指導教諭）が講義をした後、グループで自身の学級経営の課題や解決法などについて協議をした。



研修の様子

先輩の先生方の実践を参考にさせていただき、「率先垂範」や「見通しをしっかりとって意図的・計画的に指導すること」が大切だと実感した。2学期のスタートにあたり、行事なども多くあるが、卒業までにどんな力を身に付けさせるのか、改めて計画立てて、その段階に応じた指導を場当たり的でなく、意図的に出来るようにしたい。

##### 研修後の受講者の振り返り

##### 【郷土料理教室】

臼杵市の教員は地元出身者が少なく、多くは大分市など他の地域から通勤している。よって、臼杵市の歴史・文化や産業などを熟知している教員は少ない。臼杵市が誇る食文化を知ってもらうため、今年度のSD研修で郷土料理教室を行った。

郷土料理教室は臼杵市役所産業観光課の職員を講師として招聘し、臼杵市の郷土料理の説明を受けたり、「黄飯」「かやく」を調理したりした。受講者にとって臼杵市の食文化を知る機会になるとともに、調理を通して、他校の教員との交流が深まる機会となった。



郷土料理調理の様子

地元が宇佐であり、臼杵の文化に触れる機会が少ない中で、今回のような機会は貴重であった。ふるさとを愛する人材を育てる立場にあると思っているが、生徒にとってのふるさとの良さを知らなければそれは達成できないことに改めて気付かされた。臼杵の街にもっと興味を持って関わっていきたい。

##### 研修後の受講者の振り返り

## (2) 西中学校の授業参加

西中学校は「中学校学力向上対策3つの提言推進拠点校」に指定されている。この事業では、県教委等から指導主事を招聘し、各教科・道徳・総合的な学習の時間・特別活動の公開授業をそれぞれ年間2回実施している。SD研修の受講者は自分の担当教科の研修から1つ以上、道徳・総合的な学習の時間・特別活動の中から1つ以上を選択して参加する。

9月は公開研究発表会が開催され、数学、外国語、特別活動の公開授業・研究協議が行われた。発表会には臼杵市内の小中学校の教職員とともに、多くのSD研修受講者が参加した。授業力向上に向けて常に先進的な取組を実施している西中学校の発表会に参加したことで、SD研修受講者は授業改善を図るための知識を習得することができた。



公開授業の様子



研究協議の様子

## (3) SD研修と校長

SD研修を終えた後、受講者に対し校長が研修内容についてフィードバックをする。

フィードバックでは、校長が受講者からどのような研修をして、どのような成果があったのかを聞き、それに対するアドバイスをする。そして、日常の授業を観て回る際、改善したことを評価していく。

これにより、研修で得た知識・技能を授業や学級経営等で生かしながら、資質・能力を高めさせるとともに、次の研修への意欲の向上につながっている。

## 4. 成果と課題

### (1) 成果

日常の業務の中で、時間をかけて教材研究や授業構想、指導案の作成、学級経営等について調べたり、考察したりすることは難しい。また、前述のように自校に同じ教科担当の教員が少なく、授業改善に向けて相談できる相手がいないケースが多い。

SD研修では、時間をかけて指導案の作成方法や学級経営、授業構想などを学習したり、意見交換をしたりした。この研修の受講を通して、授業や学級経営の技能は確実に高まっている。

また、志を共にする仲間と一緒に研修を受けることで、連帯感が深まり、何かあった際には気軽に相談できる関係を築いている。

### (2) 課題

SD研修受講者は学級担任や生徒指導、生徒会等の分掌を担当しているケースが多い。これにより、日課表の組み替えが生じたり、他の教員の負担が増えたりしている。よって、SD研修を円滑に進めていくには、市内5校の校長の理解と協力、そして連携が欠かせない。

令和7年度、5校の校長はSD研修を好意的に受け止め、協力している。しかし、今後、人事異動等でSD研修に批判的な校長が就任した際は、このSD研修の継続が難しくなる。今後、SD研修の成果を共有し、持続するための素地を築いていく必要がある。

## 開校2年目における保護者と地域との連携のあり方について

津久見市立津久見中学校 校長 大石 琢磨

### 1. はじめに

77年にも渡り、それぞれ輝かしい歴史と伝統を育んできた第一中学校と第二中学校がその歴史に幕を閉じた。令和6年4月に新しく開校した津久見中学校は、2校の校風を大切に融合させ、新たな歴史の門出に立ち、「自学・自創」の校訓の下、生徒の主体性を大切にした学校教育に努めてきている。

伊勢正三氏が作詞作曲してくださった校歌の歌詞の中の「安寧と永遠」という言葉にあるように、津久見中学校は現在そして将来にわたって安らかで平和な学校であることを願って、教職員と生徒、保護者そして地域が丸となった学校づくりに励んでいきたいと願ってスタートした昨年度。その発展のために昨年度の反省を活かした取組を紹介する。

### 2. 現状と課題、本市の取組について

(1) 津久見市は人口減少の割合が県内他市町村と比較しても、一段と際立っており、近年統廃合が加速化してきている。歴史をさかのぼれば、小学校12校、中学校7校の時代もあり、小学校区を中心に地域も活気づいていた。

現在は、小学校4校、中学校1校、保戸島小中学校1校となり学校数も教員数も激減してきている。そのような中、市の教育研究協議会も会員数が100名を割り、各教科部会、専門部会の運営も厳しい状況となっている。今年度より教科部会は小中合同となり、さらに中学校は保戸島を除くと津久見中学校1校のみとなっている。

(2) 津久見市は昨年度より「2学期制」を導入している。さらに秋休みを5日間設けており、市教委が主導して「働き方改革」を推進している。各校とも行事の精選に取り組むとともに、「2学期制」導入による期末整理等、各種事務処理の負担減により、「働き方改革」の第一歩となつてはいるものの、慣れない制度により、逆に仕事が多まってしまったり、効率よく仕事をこなせ

なかつたりと、個々によっては逆に負担となっているケースもある。しかしながら、確実にゆとりは生まれているので、うまく時間をコントロールしたい。

### 3. 研究内容

#### (1) 昨年度の様子について

開校元年となった令和6年度に教頭であった私から見ても、学校体制を決定するにあつては随分と苦慮した。2校の歴史や伝統あるいは校風が違う中、教職員の思いにも違いが生じ、さらには新たに赴任してくる教職員にとっては、わからないことだらけであった。

そんな中で、「これまでの一中、二中とは違った津久見中学校の歴史を創ろう」という校長の方針のもと、教職員が経験と知恵を出し合いながら、これまでの伝統や歴史は活かしつつも、新たなチャレンジを行い新しい歴史の1ページを創ろうと取り組んだ。それでも、どちらかの取組をほとんどそのままの計画から提案されるものもあつて、一部の教職員には当たり前の流れが、それ以外の教職員にはどうなっているのかわからないこともあつた。結果的には、消化不良の1年間であったと感じた教職員もいた。

また、保護者組織については、統合前に2年間をかけて新しい組織のあり方について議論を重ねてきたが、うまくまとまらず見切り発車となったところもあつた。結果的に、保護者が関わる大きな行事の体育祭と文化祭では、大きな混乱はなかったが、話し合いを重ねた割には満足できる取組になったとまでは至らなかった。

また、地域との連携という点では、取組があまりできなかったという1年間であった。

#### (2) 保護者組織（育友会）について

昨年度、保護者組織の立ち上げ時に、全員加入による「育友会」として立ち上がり、

行事を企画した役員(会員)が「この指とまれ方式」で賛同者を集い、様々な活動を自主的・主体的に参加、運営するものとした。

今年度の育友会の方針として、①話し合いの回数を少なくし、役員への負担を少なくすること。②今後、多くの会員が参加できるような楽しい組織にすることを念頭に置いてスタートさせた。

＜昨年度の具体的な取組＞

- ・各種学校行事での交通整理（体育祭・文化祭）
- ・広報活動（広報紙：年2回の発行）
- ・ミニバレーボール大会の開催
- ・職業講話・職業体験活動の企画・運営
- ・保護者「高校見学会」の開催（3校）
- ・食育ワークショップ（親子料理教室）等

＜本年度の具体的な取組＞

- ・各種学校行事での交通整理（体育祭・文化祭）
- ・文化祭での昼食用のキッチンカー準備
- ・ミニバレーボール大会の開催
- ・職業講話・職業体験活動の企画・運営
- ・津久見港まつり出演時の見守り
- ・親子ワークショップ（フラワーアレンジ・星空観察会）等

昨年度の経験もあり、本年度は話し合いの回数も少なく、昨年度の取組をそのまま継続することよりも、自分たちが必要と思うものは工夫と発展させることができた。

一方、必要性が乏しかったり、会員の要望が少なかったりした取組は行わない等、自主的かつ楽しく自分たちで運営していこうとする方向性が見えてきた。

### (3) 地域連携（CS）について

昨年度の反省を活かし、本年度は学校の困りを地域の協力で少しでも解決することを目指して、学校運営協議会を中心に取組のアイデアを出してもらい、協力してもらうことにした。

すると本校の2つの困りと、困りではないが地域の協力があれば生徒たちのために



文化祭でのキッチンカーの様子

なることが1つ意見として出された。

- ① 市内部全地域から登校する生徒（特に自転車通学生）の安全確保
- ② 技術・家庭科の専門教員がいないことと実習時の安全確保やサポート
- ③ 平和教育に関して、保戸島空襲の歴史を継承するための手段

以上の3点が大きな議題となり、話し合いを重ねた結果、①は各区長さんに依頼をして区ごとの通学路の危険箇所の把握や登下校時の緊急事態などへの協力の依頼および警察などの関係機関への改善要請を協力して行う。②は市役所を通して市内のボランティアへの協力の依頼を行う。その後、10月の家庭科の調理実習で、のべ15名のボランティアが参加。③は市内の歴史研究団体（史談会）への協力を依頼し、8月6日に講話を実施。以上の取組がこれまでに行われた。

## 4. 成果と課題

### (1) 成果

育友会やCSの協力で大きな行事や実習等で人手が必要なところに協力をいただき助けられた。育友会もCSも学校に協力したいと思う人は多く、学校側が二の足を踏んでいた部分が大きかったのではないかと感じる場面もあった。

もっと早く、育友会やCSに相談しておけば、より多くのことをスムーズにかつ教職員の働き方改革の一助にもなったのではないかと感じた。

### (2) 課題

現在の取組は、学校あるいは教職員目線での協力体制である。大切なことは、生徒目線で必要なことを見つけての地域や保護者からの協力のあり方であり、また保護者や地域の意見を取り入れた学校との相互協力である。学校が一方向的に教職員の負担軽減を訴えても協力は得られないし、学校側の都合だけを押しつけても、保護者や地域とともにある学校にはならない。そのため、生徒、保護者、地域の声を聞く耳を学校が持つことが必要であり、今後具体的にどこでどのような形で声を聞く機会をつくっていくかが喫緊の課題である。

# 由布市型人材育成教育の推進 ～3つの柱を中心とした取組を通して～

由布市立湯布院中学校 校長 麻 生 久

## 1. はじめに

由布市は旧大分郡の3町（挾間町、庄内町、湯布院町）が、平成17年の市町村合併によって誕生した市である。

令和7年度現在、小学校は10校、中学校は各町に1校ずつの3校ある。子育て支援策の強化により、挾間町は子育て世帯の移住者が増加し、児童生徒数が増加しているが、庄内町と湯布院町においては少子高齢化が進み、児童生徒数の減少が加速している。

庄内町にある由布高校は、由布市発足に伴い、平成18年に改名した。また、平成23年からは連携型中高一貫教育を導入し、現在も市内3中学校と共に様々な取組を行いながら、連携型中高一貫教育の充実を目指している。また、小学校も交えた人材育成教育に取り組んでいるところである。

## 2. 研究内容

### (1) 校種間連携

#### ① 小学校・中学校の連携

##### ア 小中連絡協議会

小学6年時の担任、中学1年の担任や各校の管理職が参加して、3月末と次年度7月末の計2回実施している。児童から生徒への大きな変化のこの時期に、学校間でスムーズな接続を図ることを目的として実施している。



小学校の先生方からの情報をもとに、中学校の対応を柔軟に見直すことができ、結果として子どもたちの育ちを「点」で見るのではなく、「線」として捉えることができています。入学後や2学期以降の指導に役立てるとともに、切れ目のない支援が可能になっている。学習・生活・人間関係での変化に不安を抱えやすい中1の前半は、情報の共有が非常に効果的なので今後も継続していきたい。

#### イ 小学生の中学校訪問

小学6年生が町内の中学校を1月～2月にかけて訪問する。当日は、授業参観や中学2年生による中学校の1日の生活の流れや委員会活動・部活動・行事の紹介などを行う。他にも、中学生が小学生の質問に答えたり、班ごとにゲームの交流も行ったりしている。この活動を通して、小学生が中学校の様子を理解し、安心して入学できるようにするとともに、準備や運営に取り組んだ中学生にとっても、充実した交流会にしている。



### ② 中学校と由布高校の連携

#### ア 由布高校生の終礼訪問

由布高校生が出身中学校を訪問して、中学1年生と3年生に対して、高校生活の様子や由布高校の魅力を伝える活動を行っている。



#### イ 由布高校振興大会

中学2年生全員が参加する振興大会。以前は保護者に対して、由布高校の取組の様子を伝えていたが、令和になってからは中学2年生を対象とした。当日は、「学びの発表」・「由布高校の特色」の二部構成で、様々な活動を紹介している。



## ウ 体験入学

中学3年生が対象。各コースの内容や卒業後の進路について説明、最後に体験授業が行われる。由布高校独自の「観光」や「中国語」「韓国語」等、毎年10種類程度の講座に分かれて実施している。



## エ 中高合同生徒会

市内3中学校の生徒会役員と由布高校生徒会役員の生徒が集まり、各校の生徒会活動の実践報告をしたり、「地域にできること」をテーマに、ボランティア活動を行ったりしている。

他校の実践報告を聞くことで、他校の良さを自校の取組につなげることができている。



## オ 乗り入れ授業

由布高校の数学科と英語科の先生方が、毎週1回各中学校を訪問して、3年生の授業を中学校の先生と一緒にやっている。中高2人の先生で授業を行うことで、個に応じた指導も充実し生徒の満足度も高い。また、由布高校へ進学した生徒にとっては、中学生の時に指導してくれた先生が高校にいることから安心感にもつながっている。



## カ 中高合同教科部会

市内統一で実施する中学校学力診断テスト、由布高校で実施する外部テストの結果を踏まえ、基礎学力の定着状況を把握し、指導方法の改善について協議して、学力向上に取り組んでいる。

## (2) 情報活用能力の育成

由布市のひと・こと・ものを題材に、ふるさとと自分の未来について考える「由布学」を幼、小、中、由布高校で行っている。また、由布学を通して学んだことを、タブレット端末等を活用してまとめ、配信し、情報活用能力の育成も目指して取り組んでいる。

### 【本校の由布学の取組】

地域を知り、地域について考える活動を小学生から行っている。中学生では、湯布院町や由布市にその枠を広げ、由布市の魅力、由布市の課題について調べたり、課題解決策や自分の生き方について考える機会を設けたりした。また、その活動の際に、協育コーディネータと連携して、市役所職員をはじめ、地域で働く人をゲストティーチャーとして招へいし、話を聴くこととした。講演を通して、自分で調べたこと以外に由布市の取り組みや地域の方の思いや願いを知ること、由布市に必要なことはどんなことか、子どもならではの視点で考えた解決策をまとめ、文化祭や動画にまとめて発表することができた。



第1学年（50時間）	
<p>由布市の魅力や伝統と課題を探ろう</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の特色や魅力、地域の産業・職業について知る。</li> <li>・職場訪問などのインタビュー活動を通して働く人の願いや課題について知る。</li> <li>・情報を比較、分類、関連付けて考えるなど、探究の過程に応じた技能を身に付けている。</li> </ul>	
第2学年（70時間）	
<p>ふるさとに学び、ふるさとと自己の未来をつなごう</p> <p>由布市の未来を描き、発信しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の魅力や強みを明らかにし、課題の解決策を探ることができる。</li> <li>・地域とともに生きる人（ゲストティーチャー）の話や思いをもとにして、由布市の未来を描くことができる。</li> <li>・情報を多面的に見る、考えを具体化するなど、探究の過程に応じた技能を身に付けている。また、由布市の未来像を発信することができる。</li> </ul>	<p>第3学年（70時間）</p> <p>ふるさと「由布」と自分のつながり方を考えよう</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の人々の暮らしと地域が抱える今日的問題や将来的な課題について、社会のしくみや政治と関連付けて考える。</li> <li>・働くことの意義や価値について、職場体験学習を通して知るとともに、自分の生き方と地域との関わり方を考えることができる。</li> <li>・情報を構造化する、抽象化するなど、探究の過程に応じた技能を身に付けている。また、自分の考えを発表することができる。</li> </ul>

### (3) 英語力の育成

#### ① 小・中学校外国語授業の取組

主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童生徒の育成を目指し、伝え合う場を毎時間の授業に設定するなど、工夫しながら外国語の授業を実施している。10月に小学校、11月に中学校の公開授業を開催し、由布市内の各校に授業モデルの提示を行うことができた。



#### ② 中学校英語検定試験への挑戦

毎年9月～10月、市内の中学校3年生全員が英語検定試験に挑戦している。



英語学習に興味を持ち、外部検定試験等に積極的にチャレンジし、主体的に学び続ける生徒の育成を目指した取組である。

なお、英検受験料は由布市が補助している。

策を考える力の育成にもつながっている。

英語力の育成においては、各校での公開授業を通して授業改善が進み、全市的な授業の質の向上が図られた。さらに、市内の中学3年生が全員で英語検定に挑戦する取組は、学習への意欲を高めるだけでなく、目標に向かって努力する力や自信の醸成にもつながっている。

こうした取組の成果は、昨年11月に開催された「おおいた教育の日」推進大会（はさま未来館）でも見られた。大会では、小中学生によるエッセー朗読やボランティア活動の紹介が行われ、「地域や家族への感謝」「学校生活の充実」「ふるさとへの愛着」といった内容が多く、来場者の心を打った。日々の教育活動の積み重ねが、子どもたちの言葉や表現、そして行動に表れていることは、本研究の方向性の妥当性を裏付けるものであり、教育の成果が地域社会に還元されている実感を得ることができた。



一方で、いくつかの課題も明らかになった。

校種間連携においては、活動が広がる中で教職員の業務負担が増しており、継続的な実施に向けた工夫や役割分担の明確化が必要である。

また、「由布学」の各学年で取り組む内容や評価方法、授業設計の充実は今後の検討課題である。

英語教育においては、実際に英語を使う場面や他者と関わる機会が限定的であり、より実践的な言語活動を通じた学びの深化が求められる。

これらの成果と課題を踏まえ、今後も由布市全体で連携を深めながら、児童生徒一人ひとりの可能性を引き出す教育を推進していきたい。

### 3. 成果と課題

本研究を通して、由布市全体で連携と一貫性のある人材育成教育の推進が図られ、一定の成果を得ることができた。

まず、校種間連携では、小中連絡協議会や中学校訪問、由布高校との乗り入れ授業や合同教科部会を通して、教育活動における「接続」が円滑に行われ、児童・生徒の不安軽減や学びの連続性が確保された。とりわけ、中高の教員が共に授業を行う体制は、生徒の満足度向上のみならず、教師間の指導力向上にもつながっている。

情報活用能力の育成では、地域に根ざした「由布学」を通じて、郷土への理解を深めるとともに、ICTを活用した情報発信の機会を設けることで、情報を収集・整理し、他者に伝える力が育まれている。地域の方との交流や講演などを通じて、社会とのつながりを実感しながら、主体的に課題を見つけ、解決



# 令和8年度以降の部活動地域展開に向けての取組

佐伯市立直川中学校 校長 日高 みつほ

## 1. はじめに

平成30年、スポーツ庁及び文化庁は「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」及び「文化部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」を策定し、令和4年には部活動の地域移行に関する検討会議の提言を踏まえ、新たに「学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方に関する総合的なガイドライン」を策定した。（スポーツ庁HP参照）

本市でも、スポーツ庁や県教委の方針に則り、佐伯市における学校部活動と学校部活動の地域移行の受け皿となる地域クラブ活動の在り方等についてまとめた方針を策定し、休日の部活動の段階的な地域移行に向け、令和5年度から7年度の「改革推進期間」に準備を進めている。

本市中学校長会（以下「校長会」）も、各学校の取組の共有や疑問点の改善等、市教委担当者（以下「担当者」）と連携して取組を推進してきた。

## 2. 市の取組

本市教育委員会（以下「市教委」）では、部活動地域移行及び地域展開についての方針の策定をするとともに、保護者向けの「お知らせ」を作成し、学校を通して配布している（方針や「お知らせ」は次のとおり）。

- ・佐伯市立中学校における「休日の部活動の段階的な地域移行」に関する方針（概要版）（2023年4月）
- ・佐伯市立中学校における「休日の部活動の段階的な地域移行」に関する方針（2023年4月）
- ・佐伯市の学校部活動及び地域クラブ活動の在り方等に関する方針（2024年3月）
  - 佐伯市における「部活動の地域移行」についてのお知らせ（No.1）（2024年3月）
  - 同（No.2）（2025年1月）
  - 同（No.3）（2025年1月）
  - 同（No.4）（2025年10月）

※○印は保護者向けリーフレット

## 3. 校長会の取組

### (1) 担当者との協議

本市では、部活動地域移行を学校教育課指導主事と部活動地域移行コーディネーター（元小学校長）が担当している。

校長会は昨年度から担当者との協議を行い、地域移行の開始日や保護者説明会等の実施、市認定地域クラブ活動（以下「地域クラブ」）や保護者会運営型立ち上げ手続きの周知について申し入れを行ってきた。

### ① 開始期日の確認

本市では、令和8年度から全ての中学校で休日の学校部活動を地域展開（「地域移行」の名称は「地域展開」に変更〔令和6年12月〕）することになっている。ただ、その開始日が4月1日なのか、3年生の中体連大会が終わる1学期終了後からなのか明確にされていなかった。

令和6年9月の校長会で市中体連会長校長より県の方向性についての説明があり、意見交換を行った。10月の校長会に担当者に参加してもらい、各市町村の状況や市内の地域クラブの状況についての説明を受けた。その中で令和8年度の地域展開開始日の質問が出された。担当者から学校の意向を聞かれ、各学校の部活動担当の決定にも関わることから4月1日という意見を持ち帰ることとなった。その後、市教委で協議され、4月1日から開始となった。

### ② 保護者への説明

令和8年度からの開始に向けて各学校で職員への周知徹底や保護者への周知・協議を進めている。保護者への周知の仕方は、各部活動顧問が保護者会時に説明をする、校長が保護者会代表に説明をする、対象の保護者全体への説明会を開催する等、各学校で工夫している。

ただ、本方針は市教委で策定したのもでもあり、市教委から説明等を行うことを申し入れ、担当者が保護者会で説明した例もある。

- ③ 地域クラブ・保護者会運営型について  
市教委が示す休日の活動の選択肢には、「活動しない」、「地域クラブ」、「保護者会運営型地域クラブ活動」がある。各学校で説明等を進めていくと、保護者会型の立ち上げの仕方についても質問を受けるようになる。実際、保護者会型を選択した場合には代表者が手続きを行う必要がある。

本市では、地域クラブのとりまとめを行う担当が市教委にいて、保護者会型についても承認等を行うということだったので、手続きの仕方等の相談窓口の周知と、地域クラブの最新状況のお知らせを依頼した。また、まだ地域クラブがない競技についての各団体への働きかけをお願いした。

同じタイミングで、担当者もこの2点について周知する「お知らせ」を準備しているところで、依頼した令和7年10月校長会のすぐ後には保護者向けのお知らせが配布された。令和6年2月時点で7つだった地域クラブの数は、令和7年1月には16、令和7年10月には31まで増加していた。

## (2) 各学校の取組の情報交換

校長会では、学校運営や施策等の情報交換・共通理解及び研修に取り組んでいる。また、各校長が疑問に思っていること、他の校長に聞きたいこと等を率直に聞くことのできる機会でもある。

昨年度6月の県研究大会後からは、今年度の県研究大会の分科会発表レポートの審議や部活動地域展開の各学校の取組状況の共有が主な内容になっていった。

### ① 各学校の進捗状況について

3(1)②で述べたように、各学校は様々な方法で保護者への周知や土日の選択肢等について説明してきている。令和6年度に各校の現状を共有する中で、野球部で保護者会運営型を立ち上げる学校が2校あること、持続可能な形にするため地域クラブに変更したこと等、保護者会運営型の話が出されていた。

各学校での保護者への説明が進むにつれ、「部活動顧問が保護者会に説明し、保護者会で土日の選択肢等について検討

した。土日に学校部活動で練習試合等ができないのであれば、平日1日か2日しか練習できなくても、平日も含めて地域クラブに移行する」ことをほとんどの運動部活動が決めた。そして、小学校5年生に入学時に部活動の募集がない旨を周知した学校もあった。

令和7年度になると、自校の○部と△部は休日は保護者会運営型、□部と☆部は地域クラブという近況報告がなされ、令和8年度に向け着々と取組が進んでいく様子が分かった。

### ② 保護者への説明資料について

保護者への説明に当たり、職員の共通理解や、保護者への説明が食い違わないための説明資料を作成した校長からの資料提供があった。校長経験年数は様々で、私のように経験年数の浅い者にとっては先んじて実践してくれることやこうした資料は、大変ありがたく参考にさせていただいている。

- ③ 複数校にまたがる地域クラブの立ち上げ大分県中学校体育連盟による参加資格の特例により、運動部活動は競技によって学校にその競技の部活動が設置してある場合、部活動と地域スポーツ団体や地域クラブの両方に登録することや中体連の大会に出場することができないものがある。

今年度、新人大会で団体を組めない学校が大半となる競技で、その競技を専門とする元教員や現職教員が中心となって市競技連盟と地域クラブを設立した。しかし、設立過程で校長に情報が入らず、廃部をせざるを得ない状況を後で知ることとなり、混乱が生じた。

文化部活動はあまり多くないが、美術部であれば市内に美術教室や漫画教室があり、各自の意向で対応できる。吹奏楽は市内3校に部活動があり、休日の活動の受け皿として、吹奏楽教室が立ち上がっている。しかし、楽器の運搬や貸し出し、コンクールへの参加形態など課題が山積で3校とも各校で保護者会運営型の地域クラブ立ち上げを計画している。

#### 4. おわりに

佐伯市は21年前に9市町村が合併して九州一広い市となり、本校は市内中心部までは車で30分ほど掛かるため生徒が自分で習い事に出掛けるのは難しい。そのため、全校生徒数が少なく部活動数の検討が必要な時期ではあるが、2つの部活動を存続し、来年度も募集することになっている。休日の部活動地域展開に向けては、校長会での他校での取組を参考に進めている。

学年始め参観日に保護者に今年度中に各部で検討していくことを説明し、教職員研修を行って理解を深め、参観日に保護者説明会を行い担当者に説明してもらっている。

現在、2つの部活動のうち1つは保護者会運営型の立ち上げが始まっている。もう1つは土日のみ地域クラブに参加する形に落ち着くようである。私は「改革推進期間」の始まった令和5年度は小学校で勤務していたため、令和6年度、7年度と校長会での情報交換は貴重だった。

令和8年度からの学校における部活動地域展開はあと3か月で始まる。各学校では着々と準備が進められている。本校も、生徒や保護者に混乱が生じないよう準備を進めていきたい。

# 主体的に学び、未来を創造する生徒の育成

竹田市立竹田南部中学校 校長 阿南正樹

## 1. はじめに

大分県の南西部に位置する竹田市は少子高齢化による人口減少が著しく、極小規模校の学校が多い。竹田南部中学校は全校生徒106人で、特別支援学級を含めて5学級編成のため、ほとんどの教科は一人で担当している。若年層の割合も高く、教科指導において専門性を生かした日常的なOJTに課題を抱えている。それに合わせ生徒も、学びに向かう姿や主体的に学習する意欲が低いことも近年課題として感じている。『主体的に学び、未来を創造するこどもの育成』をめざし、竹田市全体として取り組みを進めているところである。

## 2. 現状と課題について

竹田市ではここ数年、学力向上が喫緊の課題として挙げられている。各種学力調査における正答率・達成率等で多くの課題が見られ、基礎基本の徹底と定着を図る取り組みが求められている。さらに、新採用者を含めて若年層の増加及び異動に伴い、人材育成の視点を持った学校経営が必要になってきている。また、これからの予測困難な時代を生き抜くために、主体的に学び続ける力と意欲は不可欠であり、キャリア教育の重要性については、竹田市教育委員会をはじめ、竹田市校長会のなかでも、常に意見交換を行い、教育課程にどのように位置づけることが効果的か、地域とどのように連携すべきかなど、試行錯誤しながらの取組を進めている。

## 3. 研究内容

### (1) 竹田市教育委員会と連携した取組

竹田市では上記のような現状を受け、「主体的に学び続けるこどもの育成」をめざし、授業改善の取組やたけたん自學舎の取組だけでなく、キャリア教育視点からの取組にも力を入れている。その一つに一昨年度から、タケタカタローの取組をスタートさせ、本年度は7月と1月に2回実施した。この取組は、竹田市にゆかりがあり、現在地域

に残り頑張っている人や、今は竹田市外大分県外に出て活躍している人などを、テーマに合わせて毎回数名パネラーとして呼び出し、パネルディスカッション形式でパネラーの生い立ちや思いを聞くものである。パネラーの話聞き、自分の将来像や進路について主体的に考えるきっかけとなれどと考えている。

### ① タケタカタロー3【7月9日実施】

目的：ア. 竹田にゆかりのあるがんばっている若者（竹田出身、竹田に住んでいる）たちの生い立ちや考え方、竹田に対する思いに中学生が触れる。

イ. 竹田と自分との関わりについて考えを深め、自分や竹田市の将来のビジョンを持つことができる。

参加者：竹田市内の中学3年生

パネラー：

荒牧大貴さん：グリーンファーム久住  
平井麻衣子さん：MOTTAINAI BATON  
株式会社  
平塚仁さん：株式会社 Vitalize CMO  
井上真由子さん：トータルイン吉富、竹姫



## ② タケタカタロー4【1月28日実施】

目的：スポーツ分野で活躍している若手アスリートを招き、これまでの歩みや取り組みに対する思い、現在抱えている目標などについて語っていただくことで、生徒が運動・文化活動と自己との関りについて理解を深め、自分の将来像や自分の将来について主体的に考えることができる。

参加者：竹田市内の中学1、2年生  
パネラー：

内川聖一さん：元プロ野球選手  
一宮大介さん：プロクライマー  
廣瀬岳さん：武田薬品工業陸上競技部

## (2) 本校の取組

竹田市内の4校でも、それぞれの地域の特性を活かしたキャリア教育視点からの教育活動に取り組んでいる。

本校ではPTAと連携し、キャリア教育の視点で7月に講演会を実施した。講師に県内で飲食店を中心に幅広く事業を行っている、竹田出身の氏田善宣さんをお招きし、ご自身の経験をもとに、キャリア教育の視点からご講演いただいた。

### WOOD HOUSE株式会社

代表取締役 うじた よしのり 氏田 善宣 氏プロフィール  
竹田市出身。故郷である竹田市に帰郷した際、繁華街のさびれた風景に衝撃を受ける。そこで、夢であった福岡出店をとりやめ、「竹田市を元気にしたい」と2012年、28歳の時に「感動のもつ鍋処 陽はまたのぼる 竹田本店」を開業。

2014年には「第9回居酒屋甲子園」で優勝し、全国1328店舗の頂点に立つ。

現在は、事業を拡大する一方で、数多くの講演活動にも精力的に取り組んでいる。



## <生徒の感想より 抜粋>

- ・今日の話聞いて、目標ではなく、目的が一番大切だということが分かりました。
- ・今日の話聞いて、自分の生き方、したいことが分かりました。
- ・僕も自分が生きる目的を見つけようと思った。
- ・竹田の町を元気にしようとしていてすごいと思った。
- ・氏田さんの話を聞いて、氏田さんの生き方や信念、心の強さが分かって、とてもかっこいいと思いました。
- ・大人になったらメチャクチャ楽しいことが分かりました。あと、人生をしっかりと生きることが大切だと思いました。
- ・僕は将来のために、今を意味のある生き方をしたいです。
- ・目標をたてるのも大事だけど、その目的を考え、諦めない心が大事ということが改めて分かった。

## 4. 成果と課題

### (1) 成果

- 竹田市教育委員会と各学校が、キャリア教育の重要性を共通認識し、取り組みが推進されている。
- 緑ヶ丘中学校では、総合的な学習の時間を活用し、地域の事業所と連携したカレープロジェクト(商品開発)に取り組んだ。丸福さんの肉と、エコファームさんのトマト使って、レトルトカレーを作って商品化し、販売まで体験した。地域と課題を共有した取り組みが見られた。
- 竹田中学校、直入中学校では、修学旅行先で海外からの観光客を対象に、竹田市をアピールする取り組みを行った。地域の観光について調べ、市の行政関係者や地域の方にアドバイスをもらうなどし、課題を共有した取り組みが見られた。
- 生徒の意識を醸成することで、生徒自身が自分の生き方や竹田の将来について真剣に考える姿が見られた。

### (2) 課題

- 取り組みが点から線に、線から面になるよう、教育課程をブラッシュアップしていく必要がある。またその際、地域と連携を深め、課題を共有した上で、多くの人の力を借りて教育活動が進められるよう改善していくことが重要である。

# ふるさとを愛し、主体的に未来を切り拓く子どもの育成を目指す 計画的・組織的な小中一貫教育の推進

豊後大野市立清川中学校 校長 野 尻 秀 信

## 1. はじめに

本年度は、現行の学習指導要領（平成29・30・31年改訂）の本格実施から5年目・6年目となる。「生きる力」「主体的・対話的で深い学び」「資質・能力」などポイントとなる考え方をふまえ、社会との連携・協働により、学習指導要領のさらなる着実な実施および適切な教育課程編成が求められている。一方で、次期学習指導要領改訂に向けて、中央教育審議会では昨年末の諮問を受けて、本格的な議論が始まった。次期学習指導要領の行方についても注視していく必要がある。大分県教育委員会は、令和7年3月に、令和7年度から令和15年度までの9年間を計画期間とした、大分県長期教育計画「『教育県大分』創造プラン2025」を新たに策定した。その中で、全施策を貫く重点視点として、「『リアル×デジタル』の最適な組み合わせによる教育効果の最大化」が設定されている。また、「芯の通った学校組織」の取組については、「変化の激しい社会を生き抜く力と意欲を育む『教育県大分』の創造に向けて」とサブタイトルを改め、令和7年2月に「芯の通った学校組織」取組方針を示した。「学校マネジメント」については、恒常的取組として位置付けられており、この方針は、学校マネジメントを活用して解決することが期待される学力・体力・いじめ・不登校などの諸課題の具体的内容を単年度ごとに定め、今日的教育課題に機動的に対応することをめざしている。

豊後大野市では、今年度より全ての学校が小中一貫教育校となった。また、今年度は第4次総合教育計画の最終年度であり、同時に第5次総合教育計画の準備に入る。教育委員会では、義務教育9年間を見通した小中一貫教育を基盤とした「Be the Charming Heptagon 地域とともにあるヘプタゴン教育」の推進を図り、学校教育方針を策定した。基本目標として「主体的な自己実現をめざして」を掲げ、「ヘプタゴン教育の7つの柱」（①キャリア教育の推進、②小中一貫教育の推進、③地域とともにある学校教育の充実、④確かな学力

の育成、⑤豊かな心の醸成と健康な体の育成、⑥郷土学の推進、⑦学校環境の充実）を中心とした重点方針を打ち出している。

豊後大野市校長会では、これまで「豊かな心と確かな学力を基盤とした『生きる力』を身につけた児童・生徒の育成」を目指し、「校長はいつ、どこで、どのような指導力を発揮していけばよいか」について研究を深めてきた。併せて、小中一貫教育の推進に向けた学校経営上の課題の共有等の取組もすすめてきた。今後さらに、様々な教育改革に対応できる学校マネジメント力、人材育成の視点で、お互いの経営上の問題点を出し合い、議論し、互いに学校経営力を磨き合う場が必要である。

そこで、研究部としては、これまでの研究の成果を継承しながら、定例の校長会や学校経営研の場で、各校が持つ様々な課題をテーマに経営研修の場を設定し、学校経営力の向上を図っていく。また、「目標達成に向けた重点的取組～第3ステージ～」を確実に実施するとともに、検証・改善を進めながら、児童生徒の確かな学力を育成するため、小中一貫教育の方針やめざす教育の在り方について確認し「第4ステージ」に向けての提言を行い、豊後大野市の特性を生かした「地域とともにある学校づくり」を組織的に推進していく。

## 2. 本市の取組（研究目標）について

- (1) 小中一貫教育の推進に向けての実践交流や課題の整理を行い、教育課程編成やめざす教育の在り方について研究を深める。
- (2) 学校経営上の諸課題を出し合い、解決に向けた実践交流を通じて、校長としての資質・能力を高める。
- (3) 複雑化した教育課題の解決のために、学校経営の組織的提言を図る。

### 3. 研究内容

#### 【小中合同部会】

##### (1) 研究班

- ① 研究部全体の事務局…出張文書の作成、会場予約、講師招聘など
- ② 学校経営研・「ふるさと大野」に学ぶ現地研修会の企画・運営
- ③ 各種研究大会の事前プレゼン発表の場の設定
- ④ 研究班の総括（学校経営研のまとめ）

##### (2) 教育課程班

- ① 研究計画全般の作成と総括
- ② 小中一貫教育校における学校課題の整理・共有
- ③ 「目標達成に向けた重点的取組」（第3ステージ）の推進および（第4ステージ）に向けた提言
- ④ 市学力調査の整理・分析及び推移の分析
- ⑤ 市教振行事の見直し
- ⑥ 諸課題解決

#### 【小学校部会】

- (1) 県小学校校長会の研究主題に対するレポート作成と報告（分科会参加・交流）
- (2) 各種研究大会の参加・報告
- (3) 令和9年度大分県小学校長会研究大会豊後大野大会に向けた準備

#### 【中学校部会】

- (1) 県中学校校長会の研究主題に対するレポート作成と報告（分科会参加・交流）
- (2) 各種研究大会の参加・報告
- (3) 令和8年度大分県中学校長会研究大会豊後大野大会に向けた準備

#### 【学校経営研究会】

- (1) 第1回学校経営研究会  
（令和7年7月16日 三重第一小学校）
  - ① 授業参観
  - ② 学校経営研修  
《三重第一小学校の取組》
    - ア 魅力ある学校づくり
      - a 小学校教科担任制
      - b CS活動の充実
    - イ 学校経営方針
      - a 最初に、わかりやすい言葉で、継続して…合言葉は「サンクス」

#### ウ 人材育成

- a 基本的な考え「聴く・伝える・任せる」
  - ・信頼関係を築く
  - ・リーダーを育てる
  - ・職場で育てる
- b 健康管理
- c 働き方改革
- d 危機管理～安全安心な学校～
  - ・みんなが来たくなる学校
  - ・危機管理の「さしすせそ」

#### エ リーダーシップ

- a サーバント・リーダーシップとシェアド・リーダーシップ
- b 「信頼なくしてリーダーなし」

#### ③ 班別協議

##### ア 班別協議の柱

- a 協議題1：人材育成について
- b 協議題2：小中一貫教育の推進について



三重第一小学校の発表の様子

#### (2) 第2回学校経営研究会

（令和7年12月22日 千歳小中学校）

- ① 授業参観
- ② 学校経営研修  
《犬飼中学校の取組》  
「新たな課題に対応できる力量を高める人材育成と研修のあり方」
  - ア 校内研修のプログラム化
    - a 年間行事予定表への組込
    - b 研究推進委員会と研修の連動
    - c 教職員の編成・意向を反映
  - イ 校内研修の基本設定
    - a 教職員として職務にあたる上で必須となる研修は早期に行う
    - b 職員同士がコミュニケーションを取れる場の工夫・設定
    - c 評価事項を明確にした人事評価  
・キャリアステージ別育成指標の

提示

- ・育成指標の具体例を示し意識化
- ・研修の受講奨励

d 教員が積極的に学ぶ機会と雰囲気づくり

- ・教育に関するニュース等の資料配布
- ・校内研修での「校長から一言」をその時期等に適した内容や課題を発信
- ・各種思考ツールの活用

e 研修者自身の振り返りができる設定を行う

- ・校長から授業者へアドバイスシート
- ・研修者振り返り

ウ 成果と課題

【成果】

- ・職員間の同僚性が生まれ、組織的なサポート体制が生まれた。
- ・研修で誰もが自由に意見を述べられ自分事として取り組む姿勢が見られるようになった。

【課題】

- ・年度ごとに構成メンバーが入れ替わる中でも、成果のあった人材育成等の継続や学校経営への参画意識の向上を図ることができる組織づくりが必要。
- ・キャリアステージに応じた資質・能力の向上を図るための人事評価制度の効果的活用について、研修や情報交換を行う。



犬飼中学校の発表の様子

### ③ 班別協議

ア 班別協議の柱

- a 協議題1：新たな課題に対応できる力量を高める人材育成のあり方

### ④ 学校経営研修

《千歳小中学校の学校経営》

ア 校舎建築

a 基本コンセプト

「千年たっても、末永く輝き続ける学校、子どもたちの元気が響き合う学校」

イ 小中一貫教育校における学校経営、カリキュラムマネジメントで留意したこと

a 施設一体型の小中一貫教育校として新しい学校組織の構築と教職員の意識づくり

b 身につけたい資質・能力の育成

c 検証・改善の仕組みの強化

d 本校の魅力発信

e 個に応じた支援

ウ 学校経営の見直し 小中一貫教育校

a これまでの学校教育目標・身につけたい資質・能力の見直し

〈基本理念〉

・施設一体型校舎における9年間で系統的で継続した教育実践

・異学年交流・地域社会との交流による、地域に根差した特色ある教育活動

・児童生徒会活動を軸とした「学びに向かう」集団づくり

・個に応じた指導・支援の充実

b グランドデザイン

・9年間を見通した指導区分(3期)

エ 職場づくり

a 笑顔・夢・感動をうみだす

・スピード感を持って全教職員で豊かで楽しい学校・学び・集団づくりを創造

・学び合う教師

・切磋琢磨できる教職員集団

・働き方改革

・チャレンジ(やってみる)する集団

・活気・笑顔のある教職員集団

オ 豊かで楽しい学校づくり

a 「チーム千歳」の実現による重点目標の達成

- b 目標達成に向けた学校マネジメントによる組織的な取り組みの推進
  - ・「連動表」による4点セット、各種プランの連動確認
  - ・学校教育目標と学年・学級目標との連動
  - ・育成を目指す資質・能力の共有
  - ・期会議の意味づけ、人材育成
  - ・校長通信
- カ 豊かで楽しい 学びづくり
  - a 授業改善（分かる授業）・キャリア教育
  - b 校内研究
    - ・学びの連続性「話し合う力の育成」
  - c 校内研究・研修の改善
    - ・互見授業の充実
    - ・学習に臨む姿の再確認
  - d キャリア教育の推進 魅力ある学校づくり
    - ・「総合的な学習の時間」ICTの活用
      - 「ふるさと再発見  
～サウナのまち 豊後大野～」
    - ・ふるさと豊後大野の魅力を再発見として単元構成
    - ・「サウナのまち」宣言をした豊後大野市に注目『サウナをPR大作戦』
    - ・協働…市長 市教委 COCOMIO
    - ・提言 商品化へ  
サウナグッズ サウナ飯
    - ・発信
      - 「県教委主催プレゼンテーション  
コンテスト2位」
      - 「市教育シンポジウム」
- キ 豊かで楽しい 集団づくり
  - a 学びに向かう集団づくり
  - b 「居場所」づくりと「絆」づくりを中心とした認め合う集団づくり
  - c 教育相談・個に応じた支援
    - ・ZOOMを活用した授業
    - ・フリールームの活用
    - ・ケース会議の実施
- ク まとめ
  - ・管理職のありようの影響は大
  - ・チャレンジできる環境づくり
  - ・「波紋 水面を揺らす 一粒の雫」

## ⑤ 班別協議

### ア 班別協議の柱

- a 協議題2：小中一貫教育校における学校経営とカリキュラムマネジメント



千歳小中学校の発表の様子

### 【現地研修会】

- (1) 「ふるさと大野」に学ぶ現地研修会

#### 《研修テーマ》

「これからの農業とシセイ・アグリの取組」

- ① 日時 令和7年12月22日（月）  
13：30～16：10
- ② 場所 大野公民館及びシセイ・アグリ
- ③ 参加者 豊後大野市校長会会員
- ④ 講師 衛藤 勲 氏  
シセイ・アグリ株式会社代表取締役社長
- ⑤ 研修の内容
  - ア 13：30～14：30 開会行事  
講演（座学）  
「これからの農業とシセイ・アグリの取組」
  - イ 14：30～15：00 片付け・移動
  - ウ 15：00～16：00 現地研修・見学
  - エ 16：00～16：10 閉会行事



現地研修会（講演会）の様子

#### 4. 成果と課題

学校経営研究会を中心に、「人材育成」「小中一貫教育の推進」「カリキュラムマネジメント」等のテーマについて研究を重ねてきた。

第1回学校経営研では、三重第一小学校の発表をもとに、魅力ある学校づくりや人材育成の取組について研究を進めた。校長としてのリーダーシップの在り方や「聴く・伝える・任せる」人材育成について学びを深めることができた。班別協議では、小中の互見授業の取組、若手教職員の育成など各校の取組や課題を交流することができた。

第2回学校経営研では、犬飼中学校、千歳小中学校の発表が行われた。

犬飼中学校の発表では、特に人材育成と研修の工夫について、様々な資料やツールを活用した具体的な実践が紹介された。校長のアドバイスシートや研修者の振り返りなど、丁寧な取組を積み重ねて育成につなげていくことの大切さを学ぶことができた。班別協議では、教職員の力量を高める人材育成や研修のあり方について協議を行い、各校の取組について情報交換を行った。

千歳小中学校の発表では、施設一体型小中一貫教育校の学校経営とカリキュラムマネジメントについて多くのことを学ぶことができた。発表のまとめで伝えられた「管理職のありようの影響は大きい」という言葉に襟を正すとともに、「チャレンジできる環境づくり」という校長としての大切な役割を再認識することができた。班別協議では、小中一貫教育校の学校経営等について話し合いを行った。施設一体型、隣接型、分散型のそれぞれの取組について情報交換を行い、取組の成果と課題を共有することができた。

「ふるさと大野」に学ぶ現地研修では、「これからの農業とシセイ・アグリの取組」をテーマに研修を行った。コントラクター事業やGGAPなど次世代に向けた事業形態や技術開発などをはじめ、これからの農業についての新たな知識を得ることができた。また、異常気象と人材不足という大きな課題がある中で、常に時代を見据えた新しい農業改革が求められているという話があった。農業においても「変化の激しい社会を生き抜く力と意欲の向上」が求められていることを改めて認識することができた。さらに、「経営は全員で」「ワンマン経営から全員経営へ」など組織マ

ネジメントについての取組が紹介され、組織のリーダーとしての新たな視点に気づくことができた。

豊後大野市では、小中一貫教育の成熟、2学期制の導入、学校部活動の地域展開による働き方改革などの取組を推進している。これらをはじめとする様々な教育改革に対応できる学校マネジメントや人材育成の視点で、経営上の課題を議論し、互いに磨き合い、校長としての力量を高める場は重要である。今後も、これまでの研究の成果を継承しながら、各校が持つ様々な課題をテーマに学校経営力の向上につなげる取組を行っていく必要がある。

# 不登校生徒への対応の在り方について

## ～事例を通して～

日田市立東部中学校 校長 吉野 祐之

### 1. はじめに

近年、不登校児童生徒の増加が深刻な社会問題となっている。文部科学省の調査によると、令和5年度の小中学校における不登校児童生徒数は34万6482人で過去最多を記録し、全児童生徒の3.7%に達している。不登校の主な要因としては、「無気力」「不安」「人間関係の悩み」などが挙げられ、単一の理由ではなく、複合的な背景が存在することが多い。また、教員や友人との関係、生活リズムの乱れなどが初期のきっかけとなることも少なくない。

こうした状況において、学校の長である校長の役割は非常に重要であり、個別対応の方針や外部機関との連携の指示、教職員への理解促進など、全体の対応方針を決定づける存在となる。本レポートでは、不登校の実態と要因を整理した上で、校長を含む学校側の対応の在り方について考察する。

### 2. 現状と課題、本市の取組

不登校児童生徒数の推移(令和元年～令和6年)

	校種	R元年度	R2年度	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度
不登校児童生徒数	小学生	27	39	30	37	37	42
	中学生	43	57	99	111	134	131
	総数	70	96	129	148	178	173
学校内外の機関等で相談・指導を受けていない児童生徒数	小学生	3	11	14	10	6	12
	中学生	12	19	18	45	61	6
	総数	15	30	32	55	67	18

不登校児童生徒数は令和6年こそ前年より微減となっているが増加傾向である。

増加の要因として、保護者の意識の変化やコロナ禍の影響による登校意欲の低下、特別な配慮を要する児童生徒に対する早期からの適切な指導や必要な支援に課題があったことなどが考えられる。

	欠席日数 30～89日	欠席日数90日以上		
		出席11日以上	出席1～10日	出席0日
小学校	23	21		
		18	2	1
中学校	31	103		
		73	20	10
合計	54	124		
		91	22	11

学校内外で相談・指導を受けていない児童生徒を相談や支援の窓口につなぎ個々の状況に応じた適切な支援を行うとともに、多様な学びの場を保障することが大切である。

### 3. 研究内容

ここでは、適応指導教室や別室登校が可能となった生徒に関する実践事例を中心に報告を行う。

- ・不登校の原因、背景は様々でスタンダードなモデルはない。
- ・「なぜ来られないのか」という問いは本人も保護者も苦しめることになる。
- ・生徒の反応や変化は様々で一喜一憂してはならないこと。
- ・急がせてはいけないこと。  
という事例を中心に実践を紹介したい。

### 4. 実践事例

#### (1) 2年男子Aさんの例

欠席のきっかけ……体調不良

数日続くので保護者が理由を尋ねてもはっきりとした理由は言わない状態が続く。

ある日、Aさんが「ぼくは学級でいじめられている。みんなが僕を仲間はずれにする。」と告白。保護者が学校や担任を強く批判するようになる。担任としても学級の様子を検証したがはっきりした事実はつかめない。それでも、学級でAさんを気持ちよく迎えられるように指導を実施。

「いつ来ても大丈夫だよ」とAさんに伝えるがなかなか学校に足は向かず完全な不登校状態になる。

2年になり、適応指導教室移入級

○行事(クラスマッチや遠足)は登校

※ひょっとして勉強は嫌い、行事は好き

→チャレンジ登校→適応指導教室入級

→チャレンジ登校→適応指導教室入級

→相談員との登校（学校も一緒に過ごす）  
○文化祭の展示作品の作成で異能発揮。

※みんなが「すごい」と言ってくれた  
＝自分の行きたい学校

→振り返ってみれば（保護者談）

「いじめや仲間はずれは、本当はなかったかもしれない。休む理由を知りたくて強く聞いたことが悪かったかもしれない。担任の先生は毎日のように来てくださり、適応指導教室にも顔を出して声をかけてくれてありがたい対応でした。」

何を言われても家に顔を出し、声をかけ続けた担任の執念？も学校復帰に大きく起因していると思われる。

## (2) 1年女子Bさんの例

最初の定期テストで自分のイメージする点数、順位でなかった。

→欠席が増え始め、1学期半ばから不登校の状況。

→適応指導教室入級。

→安定した通級ができています。

適応指導教室での学習も意欲的。

→1学期期末テストは受験。

→結果は自分のイメージする点数、順位でなかった。

→適応指導教室への安定した通級。

適応指導教室での学習も意欲的。

→2学期中間テストは受験。

→結果は自分のイメージする点数、順位でなかった。

○担任への訴え「こんなに勉強しているのに私の成績はなぜ上がらないのですか？」

○担任の回答「授業に出なければこんなものよ。適応指導教室の1時間の勉強と学校での6時間の勉強では差がつくのは当然。でもあなたが持っている力はそんなものではないはずよ。」

※「ここ（適応指導教室）で頑張っても私の力は伸ばせないじゃないか。」と考え始める。

→適応指導教室への安定した通級。

適応指導教室での学習も意欲的。

→2学期期末テストは受験。

→結果は自分のイメージする点数、順位でなかった。

○「3月に合唱コンクールがあるけどピアノ伴奏者は「Bちゃんしかしないよ。」とクラス友達からお願いされる。

※伴奏がんばってみようかな。

＝みんなが私に期待している。

ここにも私の力は伸ばせない！私の力はこんなものじゃない！

中間テスト最悪！



合唱コンクールをきっかけに再登校が始まり、卒業まで充実した学校生活が続いた。

## (3) 3年女子Cさんの場合

中学入学以来、不登校状態が継続。適応指導教室に3年時に入級。

本人はほとんど意思表示をしない。担任が家庭訪問をしても受け答えはほとんど母親が行う状況。

不登校の状況についても母親は、「焦って対応してもしょうがない。」「この子のことは私が最も理解しているから大丈夫です。」というスタンスで学校と家庭でお互い意思疎通しながら今後対応していけるという感触を持っていた。



2学期を迎え、進路の話題が出てくると少しずつ母親にも変化が見られた。「進学希望であったから進路実現を考えれば、学校に足が向くだろう。」と考えていたが一向に状況が変わらない現状に苛立ちを覚えた母親とCさんとの間にいさかいが起こるようになる。しかし、これはCさんが自分

の考えや思いを主張しだしたことが原因のように思われた。適応指導教室での面談で母親は、「『Cさんは自分変えたい』と言いだした。」といい、「そのころからいさかいが始まった気がする」と伝えてきたらしい。



3学期に入り別室登校が始まった。Cさんに大きな変化が表れた。それまで自己主張や発言などほとんどなかったのだが、明るくはきはきと話す姿が見られるようになった。担任も学年部も大きな喜びと今後の明るい展望を感じた。その後も順調に別室登校、授業への参加、高校受験、そして卒業と段階を進めていった。学校としても非常にうまくいった成功例としてとらえていた。高校生活が始まり、その後順調に登校が続いているという連絡を受けた。

ところが……、1学期の終わるころ、適応指導教室に顔を出したCさんはかつてのような暗い表情であったという連絡を受けた。そしてその後不登校状態になったということであった。

臨床心理士によれば、「人は自分を変えようとしたとき、一番わかりやすい例として、自分と真逆の人間になろうとする」という分析であった。

Cさんは自分を変えようとして真逆の人格を演じていたのかもしれない。周りもその変容（変化？）に「すごい」「その調子で」と必要に以上に一喜一憂したことがCさんに無理なストレスやプレッシャーを与えたかもしれない。真逆の自分を演じると

というのはものすごいエネルギーを使うであろうことは想像できる。そのことがまた再びガス欠を起こす原因になったのかもしれない。幸いCさんは2学期に学校復帰を果たし卒業することができた。

#### (4) 2年男子Dさんの例

小学校から不登校で中学入学後もほとんど家から出ない状況。家庭訪問に言っても顔を見ることはほとんどできない状況。

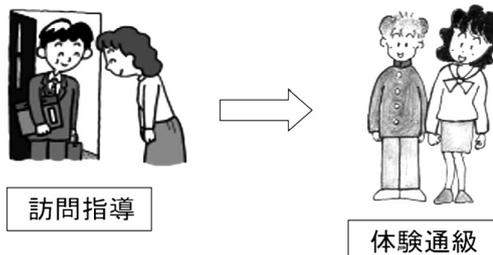
適応指導教室に対応を依頼。

相談員の家庭訪問、臨床心理士同行しての家庭訪問など様々な手段や方法でアプローチを試みたがなかなか状況は好転する兆しが見られなかった。

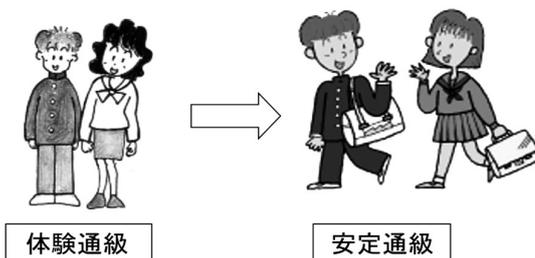
ただ、家庭においてDさんの母親への対応やものの言い方が支配的だったそうである。

10月1日に驚くような連絡が適応指導教室から入った。「Dさんがやまびこ学級に来ました。」ということだった。

ほぼ引きこもり状態だったのにすごい出来事が起こっていると学校も沸き立った。



2日も3日も続きとうとう1週間の通級ができた。



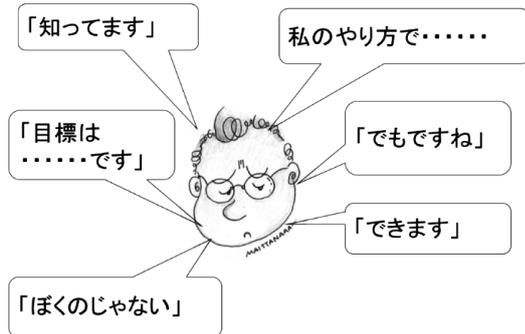
驚くべきことに週が明けても通級は続き、とうとう10月1ヶ月の間皆勤で通級することができた。これは劇的なことが起こるとみんなが感じていた時、11月1日を迎えた。「今日は来ない」という連絡が適応指導教室よりはいった。「まあそんなこと

もあるだろう。」と考えたが、休みが続いていった。適応指導教室も相談員の家庭訪問や臨床心理士の訪問などまたあらゆるアプローチを試みたがまったく成果は上がらないということだった。もちろん担任などの家庭訪問にも一切反応はなくなった。

その後、適応指導教室で母親と面談を行ったそうだが、驚愕の事実が聞かされた。以前から携帯電話が欲しいと言われていたがずっと拒絶していたらしい。あんまりいうので「1ヶ月、やまびこ学級に行けたら買ってやると。」といったというのである。10月31日に携帯電話を手に入れた次の日から元の生活に戻ったというのである。

## 5. 成果と課題

不登校の原因や背景は様々でスタンダードモデルはないが適応指導教室の生徒、別室登校の生徒には共通して発するフレーズがあるように思える。



例えば、歴史の問題で困っているなど感じて、ヒントをあたえようとする「知ってます。」とか、数学で苦戦しているときに「この公式を使えば……」「私のやり方でやりま。」とシャットアウトする雰囲気がある。イメージとしては鎧を着て自分を守っている感じがしてならない。

この鎧を脱がすことから、適応指導が始まるのではないか。「困った」、「わからない」、「助けて」という思いをぶつけてもらえる人間関係作ることが始まりであると感じる。

コンセプトは、  
「生きる価値がある」  
「やるべきことはこれだ」

自己肯定感を高めれば……

みんなとわたり合える！



自己肯定感を高めるとは、鎧を着て固く身を守る状況でなく、自分にはみんなとわたり合える武器（強み・自身）があるという発想ではないか。Aさんの場合は器用さを認めてもらったこと。Bさんは「ピアノ伴奏は私がやらなくてはクラスの合唱成立しない」と思えたことである。

そしてみんなとわたり合える武器（強み・自身）を見つけて学校に行こうと決心したタイミングで連携プレイが必要である。

「じゃあ、行って来なさい。」

押し出す人

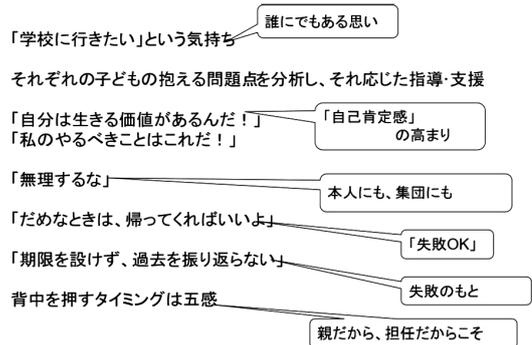


「よく来たね」

見届ける人

迎える人

「だめだったら、またおいで」



答えが見つからないのが不登校対応である。上記のプロセスも一つの方法としてこれからの不登校の未然防止、早期対応に努めていきたい。

# 玖珠郡校長会における研修会の取組

玖珠町立くす若草小中学校 校長 小 原 猛

## 1. はじめに

玖珠郡は児童生徒の減少により、平成25年に九重町で、平成30年には玖珠町で中学校の統合が行われた。今年度の玖珠郡小中学校長会は、15名（中学校長3名、小学校長12名）で組織されている。

## 2. 現状と課題、玖珠郡の取組について

### (1) 研究の現状と課題

上記にもあるように、中学校再編により、郡の中学校は3校（義務教育学校含む）であり、研究の深まりを目指す観点から、研究は小中別ではなく15人を「教育研究部会」と「学校経営部会」の2グループに分けて進めている。

### (2) 研究の取組

郡校長会ではテーマを決めて、年間4回の研修を行うよう計画している。今年度の計画は以下のとおりである。

第1回 学校経営ビジョンの具現化

※人材育成

第2回 生成AI活用研修

第3回 働き方改革

第4回 研修大会

各部会内でテーマに対して、事前に作成したスライドをもとにChromebook（端末）を活用して発表しあい、その後、意見交換を行う。まとめは積極的に生成AIを活用して、還流を行う。

## 3. 研究内容

各回のテーマのまとめ（生成AIの活用）

第1回 学校経営ビジョンの具現化

※人材育成

### 1. 目標・ビジョンの全職員での共有と具体化

校長が掲げた目標やビジョンを、一方的に伝えるだけでなく、全職員が理解し、自分事として捉えるための工夫が多く見られました。

具体的なスローガンやテーマの設定：全員が同じ方向を向くための、わかりやすい言葉を掲げていました。（例：八幡小、東飯田小）

対話やアンケートによる意識共有：年度当初に校長が説明する場を設けたり、アンケートで意見を吸い上げたりすることで、双方向の理解を深めていました。（例：八幡小、塚脇小、ここのえ緑陽中）

具体的な活動への落とし込み：学校目標を児童会・生徒会活動や各教科、行事の目標に連動させることで、ビジョンを日々の教育活動で具体化していました。（例：八幡小、ここのえ緑陽中）

### 2. 職員の主体性・当事者意識の醸成

「やらされ感」をなくし、教職員が自ら考え行動する文化を育てることを重視していました。これは、若手・ベテランを問わず、全員を学校経営の当事者と位置づける試みです。

プロセス評価と内発的動機付け：結果だけでなく、教員の挑戦する姿勢やプロセスを認め、内面からの意欲を引き出すことを意識していました。（例：塚脇小）

権限移譲と役割分担：若手にも大きな役割や責任ある分掌を任せることで、成功体験を積み、当事者意識を高めました。（例：淮園小、くす星翔中）

### 3. チームとしての協働体制の構築

個人の頑張りには依存するのではなく、学年や分掌、学校全体がチームとして機能するための組織づくりが進められていました。

分掌や委員会の活性化：各部会にリーダーを置いて定期的な協議の場を持つなど、分掌組織を活性化させていました。(例：くす星翔中)

チームでの実践：学校行事などの大きな取組を、担当者任せにせず、チームで計画・実践する意識が醸成されてきました。(例：野矢小)

教員間の連携強化：ベテランと若手をペアにするなど、日常的な業務の中で連携し、互いに学び合う仕組みを取り入れていました。(例：淮園小)

### 4. 働き方改革と業務負担の軽減

教職員が教育活動に専念できるよう、働きやすい環境を整えるための具体的な取組が共通して見られました。

ICTの積極活用：スケジュール共有やペーパーレス化により、情報共有の効率化と時間短縮を図っていました。(例：南山田小)

業務内容の見直し：定期的に校務分掌や行事のあり方を見直し、不要な業務の削減や効率化を進めていました。

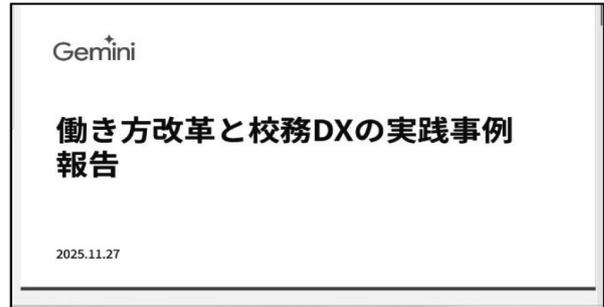
(例：野矢小)

客観的な勤務実態の把握：委員会などを活用して勤務状況を客観的に把握し、組織的な改善につなげていました。

(例：南山田小、東飯田小)

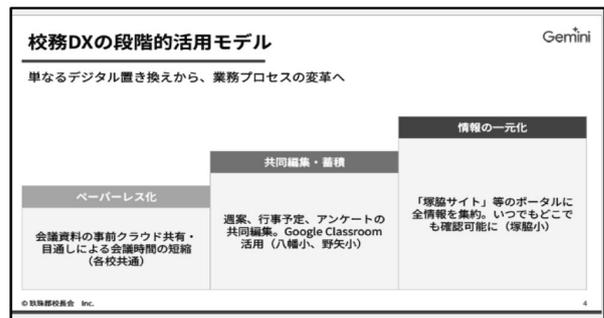
## 第3回 働き方改革

(生成AIを活用したまとめ)



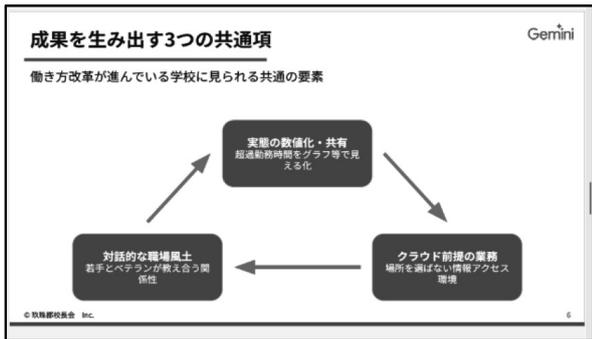
## 第2回 生成AI活用研修

文部科学省GIGAマイスターでもある塚脇小学校の衛藤校長による生成AI活用研修を行った。



# 02 共通項の分析と成果・課題

© 秋篠郡校長会 Inc.



### 改革の成果と残された課題

意識変革は進みつつある一方、個人のスキル差や潜在的な負担が課題

主な成果	現状の課題
時間外勤務の縮減と意識の向上	教職員間のITリテラシー格差
会議時間の短縮と効率化	持ち帰り仕事（見えない残業）の発生
「子供と向き合う時間」の創出	部活動対応による負担（中学校）
若手からのボトムアップ提案の増加	「つながりない権利」の保障

© 秋篠郡校長会 Inc.

### 「削減」から「創造」へ

働き方改革の真の目的を再確認する

余白の時間を作ることは、心の余白を作ること。その心の余白こそが、子どもたちと向き合う情熱（働きがい）を再燃させる薪になる。

— 塚脇小学校の実践報告より

## 4. 成果と課題

### 〈成果〉

本研修会の最大の成果は、小中共同による実施により、校種を越えた切れ目のない教育環境の構築に向けた共通理解が深まった点にある。特にクラウドの共同編集機能を導入したことで、リアルタイムでの意見集約が可能となり、従来の報告形式を超えた活発な協議が実現した。

また、生成AIを積極的に活用したワークショップは、校務効率化や授業改善の具体的なイメージを共有する貴重な機会となった。これにより、域内学校間での実践事例や情報の交流が促進され、各校の課題解決に向けたネットワークが強化された。

学校長自身が最新のテクノロジーに触れ、学び手として研修に参加したことは、自校のICT推進を牽引するマネジメント能力の向上においても極めて有効であった。

### 〈課題〉

今後の課題としては、まず研修で得られた成果を各学校の現場へどのように還元し、定着させるかという事後フォローアップの体制整備が挙げられる。共同編集や生成AIの活用において、操作スキルの個人差が影響した側面もあり、継続的なスキルアップの機会提供が必要である。

また、小中連携の議論を一時的な交流に留めず、具体的な指導法の共有といった実効性のある連携施策へと具体化していかなければならない。

生成AI活用に関するガイドラインの策定や倫理面での共通認識についても、さらに議論を深める余地がある。

域内の情報交流を一層加速させるため、物理的な研修以外にも、日常的に知見を共有できるデジタルプラットフォームの活用も検討も協議された。

<b>第 1 班 「主体的・対話的で深い学び」の実現</b>			
班 長	河野 理（速見郡）	班 員	武野 太（別府市） 真砂 一也（杵築市） 丹田 康彦（くにさき地区）

### 1. はじめに

現代は将来の予測が困難で、変動性、不確実性、複雑性、曖昧性の「VUCA」の時代とも言われている。経済先進諸国においては、「ウェルビーイング」の考え方が重視され、今後目指すべき未来社会像は、持続可能性と強靱性を備え、国民の安全と安心を確保しつつ、一人一人が多様な幸せを実現できる人間中心の社会としての「Society5.0」である。

令和3年1月の中央教育審議会答申『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～』では、令和時代における学校の「スタンダード」として、「主体的・対話的で深い学び」の実現に資するよう端末を日常的に活用することや、これまでの実践とICTとを最適に組み合わせることで、学校教育における様々な課題を解決し、教育の質の向上につなげていくことが示されている。

本班では、「主体的・対話的で深い学び」の実現を研究主題とし、令和7年度九州中学校長会研究大会でのくにさき地区の実践報告を参考にしながら研究を進め、令和8年度大分県中学校長研究大会の速見郡の実践報告の一助とする。

### 2. 研究経過

第1回（5月20日） 自己紹介、研究主題・研究内容の決定
第2回（6月10日） 報告書作成計画、実践交流、情報交換
第3回（9月4日） 台風接近のため中止
第4回（11月7日） 報告書審議、情報交換
第5回（1月21日） 研究のまとめ、情報交換

### 3. 研究内容

#### 【別府市】

#### (1) 別府市全体の取組

今年度の「別府市学校教育指導方針」の重点的な取組として「確かな学力の育成」を掲げ、以下の内容に取り組んでいる。

- ・目指す子ども像を明確にした校内研究・研修の充実
  - ・主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善
  - ・本時のねらいが明確で、「質の高い課題」と「適切なまとめ」がある授業の追求
  - ・単元及び本時の評価規準の具体化と確かな見取りによる適切な支援
  - ・問題解決的で協働的な学びとAIドリル等を活用した個別最適された学びの実践（一人一台端末の効果的な活用）
  - ・体験活動と言語活動の充実による思考力・判断力・表現力の育成
- また、これまで別府市が大切にしてきた授業の在り方として
- ・「聴くこと」を中核にし、落ち着いて安心して学び合う。
  - ・「子どもの見取り」に基づいた手だてと支援（継続的に見取る・多様な姿を見取る・想定して見取る）を行う。

については継続して取り組む。

#### (2) 提案授業後の事後研の持ち方

今年度、多くの学校で提案授業の見取りとして事実解釈型を取り入れている。

- ・子どもの事実  
→教材・教科内容の本質  
→子どもと教科内容をつなぐ教師の働きかけの妥当性
- ・指導案に、時系列に沿った振り返り、気づきを記した付箋を貼りながら話を進める。①子どもや授業の事実②取り入れたい方法③改善を要する点を3色の付箋に記しグループで協議する。

【杵築市】杵築市立山香中学校の実践例

- (1) 研究主題（授業改善テーマ）  
 「わかる」「できる」を実感し、自分の考えを表現できる授業の創造
- ① 学習面に関する「めざす生徒像」
- ・学習課題に真摯に取り組む生徒  
 <知識・技能>
  - ・考えを持ち表現できる生徒  
 <思考・判断・表現>
  - ・根気強く学習に取り組む生徒  
 <学びに向かう力・人間性>
- ② 重点的取組
- ・基礎・基本を活用し自分の考えを持ち、発表したり、書いたりする場面の設定
  - ・時間の確保を意識し、視点を明確にした「振り返り」の実施
- (2) 特徴的な取組
- ① 「振り返り」の質的向上を目指した取組
- ・「振り返り」の質を向上させるために「5つのポイント、13の視点」を意識し、指導案作成と授業実践を行う。
  - ・各自の実践を校内共有フォルダに集め、「振り返り」の視点を意識した授業について共有を図る。また、実践を参考にした校内研修を行い、良い点や改善点を出し合うことにより、各自の「振り返り」の質的向上と授業改善につなげている。

1. 「振り返り」の質を向上させるための5つのポイント、13の視点

「ポイント」	振り返りの「視点」
【1】「振り返り」の目的を確認する。	① これまでの学びを自覚する。 ② これからの学びを見通す。 ③ 次の学びを生み出す。
【2】学習時間のまとまりを意識させる。	④ 1単位時間を振り返る。 ⑤ 単元全体を振り返る。 ⑥ 複数の単元を関連付けて振り返る。 ⑦ 他教科等と関連付けて振り返る。
【3】「振り返り」の内容を焦点化する。	⑧ 学習集団の「めあて」「課題」及び自己の「めあて」「課題」から振り返る。 ⑨ 学習の過程を振り返る。 ⑩ 認知の過程を振り返る。
【4】「振り返り」を振り返らせる。	⑪ 自己の成長を自覚する。 ⑫ 「振り返り」を批判的に検討する。
【5】他者と「振り返り」を共有させる。	⑬ 他者の「振り返り」の内容を自分の学びに生かす。

- ② 「山香中家庭学習の約束(4箇条)」の作成
- ・家庭学習の習慣化とSNS等の適切な利用を促すため、生徒の意見を基に保護者（PTA研修部）にて作成している。
  - ・全学級での教室掲示や懇談会で話題にするなど、各家庭での活用を働きかけている。

【速見郡】日出町立大神中学校の実践例

- (1) 連動・連携
- ① 各種ツールの連動  
 学校経営方針、学校評価の4点セット、目標管理シート、校内研究等
- ② 小学校と連携  
 小中合同研修会（教職員）  
 大神っ子集会（児童生徒）
- ③ 速見郡人権・部落差別解消研究会と連携  
 公開授業（部落問題学習）
- (2) 校内研究体制の整備
- ① 研究主題、研究内容の設定
- 【研究主題】  
 人権問題の解決に向かう実践力の育成
- 【研究内容】  
 学習環境づくり・人間関係づくり・環境づくり
- ② 生徒会活動への位置づけ  
 生徒総会で、執行部から提案・承認行事や学級活動で実践
- (3) 特徴的な取組
- ① 学びの視点を言語化する  
 合言葉をつくり、同じ視点で学びを振り返る。学びが一過性のものにならないようにする。



## 仲間づくり

= 合言葉 3つのつ =

○ ったえる

仲間の考えを聴く 自分の考えを話す

○ つくる

力を尽くす 力を合わせる  
課題を解決する 創り上げる

○ つながる

話をしたり話を聴いたり  
頼ったり頼られたりする 日常をつくる



- ② 学びを語る・つづる  
 学びを語る場を設け、学びの振り返りを蓄積し、学び続けることを意識する。
- ③ 日常化する  
 授業や行事等で主体的・対話的な学びを日常化し、「仲間づくり」を進める。

## 【くにさき地区】国東市立志成学園の実践例

### (1) 研究の視点

- ① 学校評価のための「4点セット」を柱とした学校経営
- ② 学習の素地づくりとしての「5つの取組」
- ③ 授業改善テーマの検証と改善
- ④ 授業の実際
- ⑤ 表現活動の取組
- ⑥ 「グローバル科」における英語表現のアウトプット
- ⑦ 保護者・地域との連携

### (2) 研究の実際

- ① 学校評価のための「4点セット」を柱とした学校経営

本校の「4点セット」における言語能力の育成に関しては、学校が取り組むこととして、「重点的取組」に「表現する場の設定」や「文字を丁寧に書く」ことの指導、「話し合い活動を生かした体育授業の充実」を位置づけている。

家庭では「家庭学習の確立」、地域では「学習支援の工夫」に力を注いでいる。

- ② 学習の素地づくりとしての「5つの取組」

本校では、全校児童生徒が日常的に意識して取り組む内容として、学習と生活に分けて「5つの取組」を設定している。

- ③ 授業改善テーマの検証と改善

校内研究テーマ（授業改善テーマ）は、「主体的に学びに向かい、表現できる児童生徒を育成する授業の実践～学びを深める振り返りの充実をめざして」である。

この研究テーマは、「新大分スタンダード」の中で「1.1時間完結型」に示されている視点を軸に据えており、「めあて」と「振り返り」「課題」と「まとめ」の整合性を重要視するとともに、「振り返り」の場面に焦点をあてている。

本校では、「振り返りの視点」を作成している。深い学びへとつなげるために、全校で統一して「過去・現在・未来」の時空間を意識した明確な視点をもたせた振り返りとなるようにした。さらに、子どもたちとの振り返りを共有する場を意識して設定するようにした。

- ④ 授業の実際

授業者が大切にしていることは、「振り返り」の場面とともに、「めあて」と「振り返り」、「課題」と「まとめ」の整合性である。また、授業者のねらいと評価とがずれないこと、生徒の解決意欲を促すための「課題」提示までの流れを意識するようにしている。

- ⑤ 表現活動の取組

- ・集会活動での発表の場の設定

全校的な取組として集会活動（月1回の全校集会や期別集会）に発表の場を設定し、原稿なしでの意見発表を行うようにしている。

- ・体育授業における意見交流の場の設定

これは「4点セット」に位置づけている取組指標でもある。学習時に、運動量は確保しつつ、振り返りの場以外に、必ず意見交流する場を設定している。課題に対してチームや個人のめあてや作戦を立てたり、ゲームの試技や試技後の反省などについて話し合ったりするようにしている。

- ⑥ 「グローバル科」における英語表現のアウトプット

総合的な学習の時間の名称を「グローバル科」に変更し、本校の特色でもある英語を用いた学習活動を全学年に位置づけている。

- ⑦ 保護者・地域との連携

- ・保護者との連携

「家庭学習の確立」「生活習慣の確立」「メディアルール・家庭学習ルールの徹底」を重視し、「保護者は、設定した重点期間中、『学習の手引き』に応じた学習ができるよう内容の共有をしたり励ましの声かけをしたりする」を位置づけ、「家庭学習の手引き」を配布し、協力をお願いしている。

- ・地域との連携

授業でのGTの他に、水曜日の放課後、希望する7・8年生を対象に、「マナサポ」と名付けた補充学習の時間を設けている。

また、9年生を対象に、市の予算運営により、「高志塾」を開設している。

## 4. 研究の成果と課題

### (1) 成果

#### 【別府市】

事実解釈型の事後研を行うことにより、継続して決められた生徒の学習活動を観察する中で思考の流れが分かり、何が効果的で何が必要かが見えてきて、教員の授業を見る目を高めていくことにつながることができた。

#### 【杵築市】

振り返りのポイントや視点を明確に示すことで、授業者自身の「振り返り」に対する困りや不安を解消することができた。また、振り返りを意識した授業を実践することで、本校が目指す「コミュニケーション能力」の育成にもつながっていると感じている。

「山香中家庭学習の約束(4箇条)」は、生徒の意見を踏まえ、保護者で作成したことに意味がある。学校と家庭による目標の共有・協働の一つのツールとして、効果的に活用していきたい。

#### 【速見郡】

「仲間づくり」を各種ツールと連動させ、目標を共有することで、教職員間の協働意識が高まった。

「仲間づくり」を生徒会活動に位置づけたことで、生徒の主体的・対話的な学びにつなげることができた。

合言葉をつくり、共通言語化することで、学びを同じ視点で振り返ることができ、「仲間づくり」を進めることができた。

「仲間づくり」は、学校づくりにもつながり、生徒や教職員の関係が良くなり、学校全体の雰囲気も明るくなった。

#### 【くにさき地区】

9学年にわたる一斉性や9年間にわたる系統性・継続性を担保できることは、義務教育学校の特色といえる。

乗り入れ授業や教職員同士の互見授業も、児童生徒理解や授業改善につながっている。

学習規律についての「5つの取組」や2分前着席・1分間黙想、返事返礼の徹底なども、学習を下支えする姿につながっている。

保護者や地域の協力は、児童生徒の主体的に学ぶ意欲につながっていると考える。

### (2) 課題

#### 【別府市】

各グループで協議した内容をそれぞれ発表し、共有したが、意見が分かれる場面があってもそれについて議論する時間がないことが多い。ゆとりのある時間設定が必要である。

また、事後研で得られた学びや要点をまとめ、授業の見方や授業づくりのヒントなどとして蓄積、共有していくことが肝要である。

#### 【杵築市】

振り返りの視点を明確にすることはできたものの、1単位時間の中で「振り返り」を行う時間の確保は十分とは言えない。日々の取組と実践の蓄積が教員個々の授業改善につながるため、継続して取り組んでいきたい。

また、一人一台タブレット端末を使用した授業は増えてきているが、動画や資料を見せたり、調べたりする活動が中心になっている。タブレットを活用した「振り返り」も効率的・効果的な一つの手法と捉え、活用を推進していく必要がある。

#### 【速見郡】

学びを語る場を設けること、学びの振り返りを蓄積することはできたが、授業や行事等で主体的・対話的な学びを日常化することはできていない。

「仲間づくり」の取組を継続していくためには、理解者を増やしていく必要がある。

学びの振り返りや各種アンケート等をもとに、「仲間づくり」の検証改善を行う必要がある。

#### 【くにさき地区】

課題提示においては、提示までのテンポや想定した反応に導けないことで、まだ自らの課題として認識するに至っていない。

「振り返り」の場については、その時間を確保するための授業のテンポが課題である。

ICTの活用についても情報教育推進委員会や運営委員会でタブレット端末の活用について本校のスタンダードとなる方針を確立していかなければならない。

## 第2班 不登校生への支援について

班長	阿南 正樹（竹田市）	班員	小原 猛（玖珠郡） 日高みつほ（佐伯市）	西村 博之（日田市）
----	------------	----	-------------------------	------------

### 1. はじめに

令和元年10月25日に文部科学省から不登校児童生徒への支援の在り方について、「不登校児童生徒への支援は、『学校に登校する』という結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要がある」と通知された。そのためには、学校、家庭、教育委員会、そして関係機関や多様な民間団体などが連携し、子ども一人ひとりの状況に合わせた支援を行うことが重要である。また一昨年、九州で初となる「学びの多様化学校」として玖珠町立くす若草小中学校が開校するなど、県内においても新しい動きがみられる。さまざまな事情で学校に通いづらさを感じる児童生徒が、安心して自分らしく学び、成長できることを目指し、本年度は、各学校の不登校生への支援について情報を交流し、協議を進めることにした。

### 2. 研究経過

第1回（5月20日（火）） 自己紹介、研究主題、研究計画の決定
第2回（6月10日（火）） 各校、各地域における現状を共有
第3回（9月4日（木）） 台風により中止
第4回（11月7日（金）） 各校、各地域における取組の交流と報告書作成の内容及び手順確認
第5回（1月21日（水）） 部会別研究のまとめ、成果課題の交流

### 3. 研究内容

- (1) 玖珠町立くす若草小中学校の取組
- ① 新設教科「対話」「野遊び」「探究」
- 「対話」…子どもたちがサークル（輪）

になりテーマに基づいて対話し  
「自分を知ること」「お互いの違いを楽しむこと」「じっくり考えること」「自分の意見をまわりに伝えること」を大切にして取り組む。

「野遊び」…玖珠町の豊かな自然環境の中で、体を動かし、自然とふれあうことにより創造性や健やかな心身を育む。

「探究」…「世界に目を向け、その先を見通す力をつける」「自分の個性を伸ばし、社会につなげる力を伸ばす」「互いの違いを認め合い、ともに力を合わせて成長する」ことを目標にして、マイ探究（個人）やワールド探究（チームや全校）に取り組む。

#### ② 学習スタイル、評価等

- ・朝の時点でオンライン学習参加の意思表示①、授業中のリアクション②、1日を終えての感想等の書き込み③により「出席」扱い。
- ・評価は日常の見取り、小テスト、単元テスト等を活用。
- ・通知表は面談、記述、町内統一フォーマットの選択制。

#### ③ 学びの保障、個別の学び

- ・一斉授業も行うが、「自学」「Q&A time」「スタディサプリ」を活用して、個人の進度にあった授業を心がけている。
- ・一人ひとりの状況を把握できるよう「個別の伴走支援計画」に取り組む。
- ・「自学」の充実に向け「TO DO リス

ト（前期）」「My プランニング表（後期）」に取り組む。

- ・一人ひとりのモチベーションを高め、「学び直し」を意識して伴走支援する。

#### ④ 教職員

- ・2024ー校長、教頭、教諭8、臨時養護教諭、計11名。
- ・2025ー校長、教頭、教諭8、臨時講師、非常勤講師、会計年度養護教諭、計13名。

#### ⑤ チーム担任制

- ・全ての子どもをチームで見取る意識醸成につながっている。
- ・教育活動の内容や方法について、複数の教員で話し合う風景が日常的にみられる。
- ・チーム編成は、前期課程（4人）と後期課程（5人）。

#### ⑥ 子どもへの働きかけ

- ・登校できない、オンライン授業にも参加できない子どもに対しては、「つながる」関わりを重視し、家庭訪問、3者面談、電話連絡、週1日勤務SCの面談、月2～3日勤務SSWの面談。
- ・「認める」「ほめる」「待つ」「選択肢の提示」「合意形成」等のキーワードを大切にする。
- ・子どもの自己肯定感、自己存在感、自己有用感、自己選択、自己決定、共感的人間関係が満たされることによって、子どもが表現したり発信したりし始めるような関わり方を模索。

#### ⑦ 保護者

- ・単位PTA組織は設置していない。
- ・「保護者会」として学期に1回開催（年間3回）、「親カフェ」年間2回開催

#### (2) 日田市立南部中学校の取組

##### ① 不登校対策会議の定期開催

奇数月の第4金曜日に、校長、教頭、学年主任、養護教諭、SC、SSW、心の相談員、地域児童生徒支援コーディネーターが参加して、不登校対策会議を開催している。会議では、不登校生徒一人一人の現状を共有し、参加者全員で今後の支援目標等について協議をおこなっている。

##### ② 支援体制の充実

###### ア 心の相談員の活用

本校には、本市の児童生徒自立支援事業で派遣された「心の相談員」が毎日勤務しており、不登校生徒の自宅を訪問したり、別室登校生徒への支援等をおこなったりしている。

###### イ 地域児童生徒支援コーディネーターの活用

拠点校である本校に配置されており、校内における不登校対策の提案や取組に加え、市教育センターとも情報共有の役割を果たし、適切な不登校支援が行なえる体制づくりを担っている。

##### ③ 別室登校生徒への取組

登校時の学習内容や活動を日誌のように記録していく「個人用別室ファイル」を作成し、担任や該当学年、支援員や関係機関等と情報を共有できるよう工夫している。

また、短期と長期の目標を設定し、定期的に振り返りをおこないながら登校や学習への意欲の喚起につなげている。

##### ④ 未然防止の取組

###### ア 定期的な教育相談といじめアンケートの実施

学期に1回、学級担任が生徒全員と教育相談を実施している。対話を通して生徒一人ひとりの状況を把握するとともに

に、教師と生徒の信頼関係の構築も図っている。

また学期に2回、年間5回のいじめアンケートを実施し、生徒が抱えている悩みや問題の早期解決に努めている。

#### イ 継続的な人間関係づくりプログラムの実施

全校一斉に週に1回、15分の短時間人間関係作りプログラムを実施している。実施する内容は教育相談コーディネーターが毎月提案している。「友達づくり」「自分づくり」「仲間づくり」を目的としており、自己理解や他者理解の良い機会であり、コミュニケーション能力や人間関係形成力の育成を図っている。

### (3) 佐伯市立直川中学校の取組

本校の不登校生徒は昨年度・今年度とも0である。未然防止として行っていることとしては、学校の取組と小中連携の取組がある。

#### ① 学校の取組

【重点目標】「意欲を持って主体的に取り組む態度の育成」

【重点的取組】

##### ア 個に応じた指導・支援の促進

- ・校内支援会議等を月1回開催
- ・SC面談・SSW面談の実施（全校生徒）

##### イ 自己肯定感の向上

- ・人間関係づくりプログラムの実施（学級：週1実施、生徒指導担当提案）（全校：月1実施、生徒会が担当）
- ・学校行事や活動ごとに目標を持たせ、「認める・ねぎらう」声かけを行う。

##### ウ 生徒一人一人の学習目標と目標達成サイクルの構築

- ・毎月、生徒に学習目標と目標達成のための具体的な取組を考えさせPDCAサイクルを実践させる。

（毎月面談実施、担任に限らず学年部）

- ・その他に、いじめアンケートを毎月実施。

- ・今年度「いじめ問題子どもサミット」参加。

- ・いじめ0の理由として、学年関係なく仲が良い等、縦割り活動の良さ、次の項目であげる小中での行事等を挙げていた。（全校生徒アンケートによる）

本校生徒は自分の考えを持っていても、自分から進んで発表することが少ない。自信がないことや間違えたくない等が理由に挙げられる。

そのため、1つ1つ目標を達成していくことや認められることで自己肯定感を挙げていくことに取り組んでいる。また、授業や朝夕の帯学習・コラム学習で基礎基本の定着や読解力の育成を図っている。このことは学力不振からくる不登校の未然防止にも繋がると思っている。

#### ② 小中連携の取組

##### ア 小中合同会議の実施

- ・合同会議（年度初め、運動会関係等）
- ・授業改善（互見授業月間[6月・10月]、授業研究会[6月・10月]）、学力&生活実態分析会議[8月・2月]
- ・児童生徒理解（特別支援教育研修会等）

##### イ 乗り入れ授業の実施

- ・本校教員5名が小学校授業を担当。小中で読解力・表現力・主体性の育成に取り組み基礎学力の定着を図ることや、児童生徒理解の充実による中一ギャップの解消等が不登校の未然防止に繋がっている。

### (4) 竹田市立竹田南部中学校の取組

#### ① 校内の支援体制

- ア 登校支援員（1人配置）

教室に入れない生徒の学習支援や教育相談を行っている。場合によっては、家庭訪問し迎えに行くこともある。

イ SC（週1日勤務）

相談室で相談活動を行ったり、ステッブルーム（教室に上がれない生徒の学習室）で生徒の相談活動を実施したりしている。

ウ SSW（週2日半日程度勤務）

市雇用のSSWが来校し、生徒の情報交換を定期的に行っている。外部の専門家の力を借り、家庭支援を組織的に行いやすい環境にある。

② 未然防止の取組

ア QU検査による客観的な分析

年2回のQU検査をすべての学校で実施しており、その予算は市が負担している。客観的数値により、個人・集団の状態を把握し、全教職員で共通理解を図っている。

イ いじめアンケートと教育相談の実施  
学期に1回いじめアンケートを実施し、それをもとにすべての生徒を対象に教育相談を実施している。

ウ 人間関係づくりプログラムの実施

本校では、毎週1回、朝の15分の時間を使って実施している。また、月によっては生徒会が主体となって実施し、生徒自身が人間関係作りプログラムの重要性を感じられるよう工夫している。

③ 教育委員会の支援

ア 竹田市いじめ・不登校等対策四者連絡会議の開催

市や地域の団体等が連携した取組ができるよう、竹田教育事務所、社会福祉課（福祉事務所）、学校及び学校教育課の代表者等で、毎月1回定期的に情報共有及び協議を行っている。

・参加者

竹田教育事務所指導主事、地域児童生徒支援コーディネーター、竹田市社会福祉課 臨床心理士、家庭相談員、子育て相談員、中学校適応指導教室指導員、教育支援センター相談員、SSW、社会福祉協議会、tetoカンパニー、竹田市教育委員会学校教育課 他

イ 児童生徒支援に係る学校訪問(年2回)  
市教育委員会、地域児童生徒支援コーディネーター、家庭相談員、子育て相談員、教育支援センター相談員、SSW 等が参加

4. 研究の成果と課題

今回、各校・各市の取組について情報交換できたことは、多様な支援を広げ支援体制の充実につながるとともに、関係者間の連携を強化する上で非常に有益だと感じた。他校での成功事例や具体的な支援方法（居場所づくり、未然防止、学習支援、教育委員会や専門機関との連携）など、自校でも生かせる取り組みも多くあった。

不登校の背景には多様な要因（無気力・不安、人間関係、家庭環境など）があり、画一的な対応や他校での成功事例が必ずしも自校の不登校児童生徒に効果があるとは限らない。支援の成功体験だけでなく、「うまくいかなかった事例」や「支援者の悩み」の共有まで、個々の事例に合わせ協議が深める時間が取れなかったことが課題である。

## 第3班 「令和の日本型学校教育」を担う教師の育成

班長	安部 友善（中津市）	班員	明石 哲也（豊後高田市） 野尻 秀信（豊後大野市）	今永 英俊（宇佐市）
----	------------	----	------------------------------	------------

### 1. はじめに

「令和の日本型学校教育」を担う質の高い教師となるためには、学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、探究心をもちつつ自律的かつ継続的に新しい知識・技術を学び続ける主体的な姿勢が求められる。

本班では、令和7年度九州中学校長研究大会（熊本大会）で発表した豊後大野市の実践報告を踏まえ、各地域に共通する課題である人材育成をテーマに研究をすすめることにした。班別研修においては、各学校や郡市の取組を持ち寄り、情報交流する形で研究を進めた。

### 2. 研究経過

第1回（5月20日（火）） 自己紹介、研究主題、研究計画の決定
第2回（6月10日（火）） 各地区の実践事例と情報交換
第3回（9月4日（木）） 台風のため中止
第4回（11月7日（金）） 各校の実践交流と報告書作成の手順確認
第5回（1月21日（水）） 部会別研究のまとめ、成果課題の交流

### 3. 研究内容

(1) 中津市 今津中学校の取組

① 校長として教職員の人材育成をどのように行ったか

ア 当事者意識の醸成

人材育成の最大のポイントは「当事者意識」を持たせることと考える。人間は「当事者意識」を持てば、自分で考え行動すると考えるからである。そのために次のことを意識し、職員と対話してきた。

○任せる

○人間の最大の罪は不機嫌

○仕事をすればトラブルは必然的に起こる。

○人は育つ

○ケア・感謝・承認

○職員のやりたいことができたときが自分の幸せ

○話すことは相手の時間を奪い、聴くことは時間を与える。

○問いのマネジメント…傾聴し問い返す。

イ 危機管理上のことは具体的指示

危機管理上のことは生徒の安全や学校運営が危機に陥ることにつながるので、任せるだけでなく必要に応じて指示を出す。そうすることで職員は危機管理の重要性を学ぶことにもなる。

ウ 学校経営ビジョンを繰り返し話す。そうすることで職員が上位目標を意識して教育活動に取り組むようになる。

② ICTの活用

特に校内での取組はできておらず、市等が行う研修への参加を職員に促している。

③ 成果と課題

成果としては、「〇〇はどうしたらいいですか」から「〇〇しようと思うのですが」と話しかけてくるが増えた。また、「何のためにするのか」という目的意識をもって行動する場面が増えてきた。

課題としては、「当事者意識」が教員間で差があること。危機管理上での詰めの甘いところが多々見られることである。

(2) 豊後高田市 香々地中学校の取組

① 教職員の人材育成を、どのように組織的にマネジメントしていくか

ア 学年部を組織する際に、若手とベテランを組み合わせて組織をする

a 若手を担任、ベテランを副担任に充て学年（学級）経営をする形を構築することで若手の人材育成を行うと共に、ベテランの経験を活かす。

イ 経験年数の浅い職員に行事の責任者の任を与える

a 体育大会、文化祭、総合的な学習で縦割グループでの学習をメインにする活動の提案を経験年数の浅い職員にさせ、経験を積ませることで人材育成を図った。

ウ 校内研修での提案授業や市内の実践交流会（市人権部落差別解消教育研究会、研究大会）での発表者として経験を積ませる。

エ 豊後高田市オンライン講座（市教委主催年間6回開催）への積極的参加

a 2ヶ月に1回程度市教委が主催でオンライン講座（Zoomにて）が開かれているので積極的に参加させた。

本年度実施した内容は下記の通り

○個に応じた支援の在り方

○協調学習のチャンスを生む「知識構成型ジグソー法」

○仮説検証型授業研究

② ICT活用指導力を含めた新たな課題に対応できる人材育成について

ア ICT担当による校内研修

a オクリンクプラス（ベネッセアプリ）活用方法について

イ 市のICT研修への参加（本校はオンラインにて全職員参加）

a 豊後高田市教育課程研究協議会中学校英語部会研修会が本年度「学校現場における生成AIの利活用について」の研修をオンラインで行ったので全職員で研修。

③ 成果と課題

【成果】

- ・若手が担任や行事を担うことにより、担任としてや行事責任者としての経験を積むことができる。また、学校運営の一役を担う意識が育つ。
- ・授業者や発表者を経験することで、授業力や学級運営へフィードバックができて、指導力が向上する。
- ・新しいアプリ等を使って指導をしている（若手が中心）。

【課題】

- ・若手が牽引して生徒を動かしている傾向にあり、ベテランに向上心がやや不足している。
- ・今まで使っていたアプリ等が使えなくなり、新たにアプリの使い方を身につける必要が出てきた。
- ・デジタル教科書等を十分に活用することが出来ていない。
- ・ベテランの中には今更生成AIを覚えても使わないだろうし、かえって時間がかかると考えている職員もいる。

(3) 宇佐市 西部中学校の取組

① 教職員の人材育成を校長としてどのように組織的にマネジメントしていくか？

ア まずは、学校組織全体で若手教員を育てようとする意識と体制をつくる。

イ ベテラン教員とのメンター制度を活用し、具体的な事例（授業・学級経営・生徒指導など）についての助言。

ウ 分掌や教材研究などを協同的に行う。

エ 若手教員の特技や経験を生かせる目標設定と気軽に相談に乗れる職場づくりを行う。

② ICT活用指導力を含めた新たな課題に対応できる人材を育成するには…

ア 学校内および市内共有ファイルサーバーを利用した資料整理とデータ共有。

- イ ICT支援員を活用した、授業で使えるデジタル教材の開発
- ウ タブレット端末を活用したペーパーレス会議への移行
- エ 校内研究の柱に位置付け、授業実践例の公開

(4) 豊後大野市の取組

- ① 教職員の人材育成を、校長としてどのように組織的にマネジメントしていくか
- ア 校務分掌、学年配置の状況・工夫
  - ・教職員の得意分野や経験などの適性の考慮、若手教員とベテランを組み合わせた相互支援・育成が図れるようにOJTによる協働体制づくりを行っている。

- ② ICT活用指導力を含めた新たな課題に対応できる人材を育成するにはどうすればよいか

ア GIGAスクール構想(タブレット端末の利用)

- ・学年ごとの身につけるべきスキルを明確化
- ・市プレゼンテーションコンテストでの活用

イ GIGAスクール構想(教職員のICT活用)

- ・オンライン交流の実施(学校間交流)
- ・ペーパーレス化、校務支援システムの活用

- ③ 環境の大きな変化を前向きに受け止め、教師として新しい知識・技能を学び続ける主体的な姿勢をつくりだすにはどのようにすればよいか

ア 小中一貫教育推進と人材育成

- a 中学校教員による小学校教科担任制
- b 校内研修での互見授業
- c 異学年交流の充実
- d 生徒指導や特別支援教育における連携

イ 他校への訪問

- a 新採用者を中心に、他校の同じ教科の教員の授業を参観⇒アドバイス、指導

④ 成果と課題

【成果】

ア 市校長会において小中一貫教育についての実践交流を行い、各校長の対応の情報交換することで、意義やねらいの共有をしてきた。そのことにより、小中一貫教育を推進していくうえでの組織マネジメントのイメージが広がった。

イ ベテラン教職員のリーダーシップや協働力の向上により、学校全体の組織力やチームワークが強化され、より良い教育環境となった。教員の授業技術や指導力が向上すれば、生徒の理解度や学習意欲が高まる。

【課題】

ア 学校現場を取り巻く環境の変化は予想以上に大きく、急速である。教職員はその変化に適応しながら子供たちの学びを支えなければならない。

イ 社会の変化に対応しようとする教職員の主体的な姿勢をつくりだすには、長時間勤務や過重な業務負担を軽減し、働きやすい環境を整えることが必要である。

4. 研究の成果と課題

教科等の専門性や指導力、ICT活用指導力を含めた新たな課題に対応できる力量など、生徒や保護者、地域の信頼に応えられる質の高い教師の育成が求められている。

人材育成について、各郡市及び各校の特徴的取組を交流し、具体的な実践の中から様々な発見や学びを得ることができた。

校内研修や校外研修の充実、メンター制度を活用したOJTの工夫、小中一貫教育校での人材育成の実践など、本研究によって新たに学んだ他地域の取組を今後の学校経営や人材育成の実践に生かしていきたい。

## 第4班 チームとしての学校と地域の連携・協力体制の在り方

班長	池田 憲彦（大分市）	班員	麻生 久（由布市） 戸高 浩二（臼杵市）	大石 琢磨（津久見市） 安東 俊英（大分市）
----	------------	----	-------------------------	---------------------------

### 1. はじめに

当班では、R8全九中鹿児島大会での発表が予定されている由布市の実践報告を見据え、班の研究主題を由布市の九州大会での分科会のテーマと同じ内容にして研究をすすめることにした。各学校の取組に関する資料を持ち寄り、協議を進めていった。その中で、「学校運営協議会との連携」「働き方改革」が協議の中心的话题となった。

### 2. 研究経過

第1回（5月20日） 自己紹介 研究主題・研究計画の決定
第2回（6月10日） 各学校の資料持ち寄り
第3回（9月4日） 台風15号接近のため中止
第4回（11月7日） レポートの内容確認
第5回（1月21日） 研究のまとめ、成果課題の交流

### 3. 研究内容

#### (1) 由布市立湯布院中学校の実践

○学校と地域の連携・協働による「チーム学校」と「働き方改革」の実現を目指して  
 <湯布院中CSの重点>

- ① 学習支援の視点から
  - ・地域や家庭と連携した生活習慣や学習習慣を確立する。
  - ・校内研修を充実させ、授業改善に取り組むとともに家庭学習とつなげて、学力向上を図る。
- ② 豊かな体験支援の視点から
  - ・身近な地域や生活の中で、社会の一員としての自覚をもち、社会のルール・マナーを守ることの大切さを理解させる。
  - ・様々な活動や人々との交流を通し

て、コミュニケーション能力を育て、自己の意志を決定する能力や進路実現のための力の育成を図る。

#### ③ 安全・安心の視点から

- ・安全な環境下で教育活動が実施され、子どもとの接点を広げる活動を通して「安心して生活できる学校や地域」を目指す。

<具体的取組>

- ・学校運営協議会委員による学校授業等への参加  
 ゲストティーチャー、生徒総会参加、生徒との意見交換会、受験への面接指導、不登校生徒や保護者への相談
- ・退職教員等による協力  
 退職教員による未来創生塾
- ・協育コーディネーターとの連携・活用  
 1年生の職場訪問・3年生の職場体験  
 由布学やキャリア教育講師の紹介・派遣
- ・地域と子どもをつなぐための取組  
 湯布院町ちよぼらクラブ・リーダースクール活動  
 放課後教室、行事への参加、取組発信
- ・登下校時の見守り活動

【生徒総会】



②由布学講師の紹介・派遣



## (2) 津久見市立津久見中学校の実践

○育友会活動や津中CSを活用した教職員の働き方改革を目指して

育友会…①組織としては全員が加入

②希望者ができることに参加

津中CS…3つの班（ふるさと班、技術・家庭科班、学校安全班）で構成

### 【育友会活動内容】

① ミニバレーボール大会、クラス対抗競技

参加したい人が企画・運営

② ゲストティーチャーを招いての職業講話、体験活動（職業体験）

③ 親子で一緒に楽しめるワークショップ開催

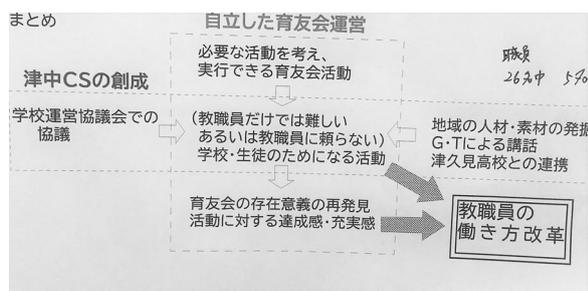
④ キッチンカーによる文化祭の昼食準備  
同時に津久見高校のつくみ「蔵」を開催  
→高校との連携や直接高校の取り組みを知る機会をつくる

### 【津中CS活動内容】

① 保戸島空襲について地元の歴史保存会の講師を招いての講話

② 健康づくりボランティアヘルスメイトによる家庭科の調理実習等の実習のサポート

③ 各区長さんに依頼しての校区内危険箇所の把握と市や警察などへの改善要請



### 【成果】

○これらの取組により教職員だけでは難しい内容や時間のかかる内容を簡素化できたとともに生徒、保護者にとっても有益な取組であった。



## (3) 白杵市立北中学校の実践

○夜活倶楽部

① 目的

・仲間やスタッフと学習することを通して、基礎学力と学習習慣の定着を図る。

・仲間やスタッフとの交流を通して、よりよい人間関係の構築を図るとともに、感謝の気持ちや郷土に対する愛情を育む。

② 主催

北中 学校運営協議会

③ スタッフ

学校運営協議会会長・委員、教員退職者、現役教員、盛上会会員、地域の方、校長

※スタッフはボランティアとして依頼

④ 活動内容

【日時】水曜日(月2回) 17:00～18:30

【場所】下北地区コミュニティセンター

【参加生徒】81名 ※全校生徒189名

【会費】

- ・入会金（1ヶ月分の月謝を含む）1,000円以内
- ・毎月500円

【内容】学習会、食事会（月1回）

（学習）・宿題やテスト勉強などの自習、教え合い。

・ボランティアの方による学習指導。

（食事会）・月に1回、スタッフが料理を作り、子どもたちと一緒に食事をする。

⑤ 課題

- ・食材の確保 月謝を1円でも安くしたい。
- ・持続可能な活動



(4) 大分市立鶴崎中学校の実践

○鶴翼会の取組み

【活動予定】

月日	曜	時間(場所)	校区・内容	生徒参加者数
5月25日	日	9:00~12:00 三佐小学校	【三佐】 三佐校区大運動会	【20名】
8月上旬		9:00~12:00 (別保校区公民館)	【別保】 別保出会いふれあいコンサート ○吹奏楽部 演奏	吹奏楽部生徒
8月中旬		17:00~21:00 (別保小学校)	【別保】 別保校区盆踊大会	【20~30名】
8月中旬		9:00~11:00 鶴崎中体育館	鶴崎踊練習会 (2回実施)	男女各20名
8月23日	土	15:00~21:00 鶴崎公園グラウンド	本場鶴崎踊	男女各20名
10月 or (9月)		9:00~12:00 鶴崎校区公民館	【鶴崎】 高齢者を励ます会	【数名】
9月下旬		9:00~11:50 (別保校区公民館他)	【別保】 (別保校区交通安全推進大会) 防犯・交通安全教室	【30名】
10月		9:00~12:00 (鶴崎小学校)	【鶴崎】 鶴崎校区大運動会	【15名】
10月		9:00~12:00 (鶴崎小学校)	【別保】 別保校区大運動会(放送)	【数名】
11月中旬		9:00~15:00 (別保校区公民館)	【別保】 別保ふるさとまつり 運営手伝い	【25名】
11月中旬		9:00~15:00 (鶴崎校区公民館)	【鶴崎】 鶴崎ふるさとまつり 運営手伝い	【10名】
12月初旬		8:30~12:30 (三佐校区公民館)	【三佐】 三佐校区餅つき大会	【20名】
12月上旬		9:00~11:00 (鶴崎校区公民館)	【鶴崎】 鶴崎校区餅つき大会	【5名】
2月上旬		9:00~11:00 (鶴崎校区公民館)	【鶴崎】 ふれあい歴史散歩	【10名】
2月中旬		8:30~12:00 (三佐校区5キロ程)	【三佐】 三佐校区歩こう会 (防災・救急訓練に参加)	【30名】
2月中旬		9:00~12:00 (別保校区公民館他)	【別保】 別保餅つき大会	【15名】

【活動目的】

- ① 郷土愛と伝統の継承  
地域行事への参加を通して地域の良さとすばらしさを理解し、郷土愛を持って地域の伝統文化の継承と活性化をめざす。
- ② 感謝と寛容の心  
温かく見守って下さる地域に感謝し、様々な年齢層の方々との交流や活動を通して、多様性を受け入れる寛容の心を養う。
- ③ ボランティア精神と地域貢献  
行事を通して地域の方々のために意欲を持って奉仕し、地域の美化と発展のために進んで貢献しようとする態度を養う。
- ④ 信頼される鶴中生  
元気と誠意を寄与することにより、地域に愛される鶴中生を目指す。

【校区公民館活動とのタイアップ】

- ① ③の小学校区にある公民館主催事業に、鶴翼会として参画する
- ② 地域は、中学校に鶴翼会として参加要請する行事を決める。
- ③ 学校は、鶴翼会として参加する生徒を決める。

- ④ 生徒は、事前準備（打合せ）や当日の運営に係として参加。

(5) 大分市立滝尾中学校の実践

○授業公開（7月8日実施）

29名中10名参加

- ・地域とのつながりを深めるため、校区の公民館長・自治会長に参加を呼び掛けた。
- ・午前中4時間の自由参観

【アンケート】9名回答

- ① 授業公開に参加していかがでしたか。  
A（7人） B（2人）  
C（0人） D（0人）
- ② 授業の様子はいかがでしたか。  
A（8人） B（1人）  
C（0人） D（0人）
- ③ 生徒のあいさつはいかがでしたか。  
A（5人） B（4人）  
C（0人） D（0人）
- ④ 学校の環境はいかがでしたか。  
A（8人） B（1人）  
C（0人） D（0人）
- ⑤ 設定時間（8：40～12：10）はいかがですか。  
A（7人） B（2人）  
C（0人） D（0人）  
A：良かった（十分できている）  
B：まあ良かった（まあまあできている）  
C：あまり良くない（不十分などところがある）  
D：良くなかった（ほとんどできていない）

【意見・感想】

- ・校内施設はきれいに整理整頓され、清潔感を感じました。（複数）
- ・特に廊下はピカピカで、器具もきちんと片付けられていて、物を大切にしている教育をされていると感じました。
- ・生徒さんは熱心に先生の言うことを聞いていました。
- ・生徒の授業態度がすばらしい。（複数）

- ・授業中の先生、生徒の状況を見ることができて良かったです。
- ・全体的に明るく感じた。
- ・文武ともに励んでいる様子に感心した。
- ・静かで良い教室ばかりでした。
- ・自分の昔のことを思い浮かべました。
- ・校内の教育設備等のデジタル化にはおどろきです。
- ・生徒は楽しそうにしていた。
- ・冷房があり良くなった。
- ・今回、初めて参加して、各教室をまわり、子どもたちの元気な姿をみて良かったです。先生方も子どもたちに真剣に向き合っている姿に感動を覚えました。
- ・数十年ぶりに中学校の授業にふれることができ、今後も公開授業を行ってみたいと思いました。



#### 4. 研究の成果と課題

各地域の取組を交流することで研究を進めてきた。新たな気づきや同様の課題に取り組んでいる状況など把握することが可能となり、毎回有意義な班別研修の時間であった。

学校と地域の連携を深めるためには、学校・地域・保護者・行政・企業など、多様な関係者の理解と協力が不可欠であるが、「働き方改革」に係る教員の負担増加への懸念、関係者への周知と理解のための十分な説明など、クリアすべき課題が山積している。

今後、職員の働き方の多様性が変化する時代の中で、柔軟な発想と強いリーダーシップが必要である。

## 令和7年度 第71回大分県中学校長研究大会日田大会開催要項

1. 主 題 豊かな人生を切り拓き 持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育
2. 主 催 大分県中学校長会
3. 後 援 大分県教育委員会 大分県市町村教育委員会連合会 日田市  
日田市教育委員会 大分県小学校長会 大分県立学校長協会  
一般財団法人大分県教育会館 (公財)日本教育公務員弘済会大分支部
4. 期 日 令和7年6月27日(金)
5. 会 場 日田市複合文化施設「AOSE」  
日田市上城内町2番6号 電話 0973-22-6868

### 6. 日 程

9:30 ～9:50	10:00 ～10:30	10:40 ～12:00	12:00 ～13:05	13:10 ～15:50	15:50 ～16:00
受 付	開会行事	全体会 (講 演)	昼食 打合わせ	分科会	閉会行事 (分科会ごと)

### 7. 開会行事

- (1) 開会のことば
- (2) 国歌斉唱
- (3) 主催者あいさつ(大分県中学校長会長)
- (4) 来賓祝辞(大分県教育委員会、日田市長、日田市教育委員会)
- (5) 来賓紹介
- (6) 祝電披露
- (7) 閉会のことば

### 8. 全体会(講演)及び分科会

- (1) 全体会  
講師 坂本 工 氏 小鹿田焼協同組合理事長  
演題 「小鹿田焼きの特徴と職人としての誇り」
- (2) 分科会

### 9. 閉会行事(各分科会にて実施)

- (1) 開会のことば
- (2) 次年度開催地代表あいさつ(豊後大野市)
- (3) 閉会のことば

## 第71回大分県中学校長研究大会日田大会 役員一覧

### 大会役員

役 職	氏 名	所 属 校	備 考
会 長	河野 正行	大分市立南大分中学校	大分県中学校長会 会長
副 会 長	姫野 宏明	大分市立王子中学校	大分県中学校長会 副会長
次 長	佐藤 義仁	大分市立戸次中学校	大分県中学校長会 次長
研 究 部 長	糸永 秀章	大分市立城南中学校	大分県中学校長会 研究部長
研究副部長	池田 憲彦	大分市立鶴崎中学校	大分県中学校長会 研究副部長
研究副部長	安東 俊英	大分市立滝尾中学校	大分県中学校長会 研究副部長

### 実行委員

役職・部会	氏 名	所 属 校	備 考
実行委員長	三笥 淳一	日田市立大山中学校	日田市中学校長会 会長
実行副委員長	佐藤 慎治	九重町立このえ緑陽中学校	玖珠郡中学校長会 会長
事務局 長	西村 博之	日田市立南部中学校	
事務局次長兼会計	小林 祐志	日田市立戸山中学校	
庶務部	部 長	三笥 淳一	日田市立大山中学校
	部 員	佐藤 慎治	九重町立このえ緑陽中学校
		西村 博之	日田市立南部中学校
		小林 祐志	日田市立戸山中学校
運営部	部 長	西胤 英明	日田市立北部中学校
	部 員	吉野 祐之	日田市立東部中学校
		中野 照行	日田市立前津江中学校
		川邊 功	日田市立大明中学校
		浦塚 雄介	日田市立三隈中学校
		工藤 克文	日田市立東溪中学校
研究部	部 長	手嶋 貴	日田市立東有田中学校
	部 員	小原 猛	玖珠町立くす若草小中学校
		伊東 和史	日田市立五馬中学校
		吉武 功二	玖珠町立くす星翔中学校
		森山 弘樹	日田市立津江中学校

## 第1分科会 「カリキュラム・マネジメント」の推進

### 研究主題 カリキュラムマネジメントの推進 ～「社会に開かれた教育課程」の実現～

発表者	司会者	記録者	運営委員
別府市立 別府西中学校 佐藤 裕一	別府市立 朝日中学校 武野 太	別府市立 中部中学校 野中 公一	日田市立 東溪中学校 工藤 克文

### 趣 旨

現代の学校教育には、地域社会との連携を重視した「社会に開かれた教育課程」の実現が求められている。その実現には、教育課程を中心に様々な教育活動を有機的に結びつけ、地域と保護者が協働するカリキュラム・マネジメントの視点が不可欠である。

本研究では、別府西中学校の教育目標である「別府を愛し、夢を持ち、自ら学び続ける生徒の育成」の達成を目指し、学校・保護者・地域が協働した取組を検証する。筆者は特例任用校長として着任し、限られた任期の中で、効率よく取組みをすすめるため「別府西を考えるコア会議」（学校運営協議会の別の形）を新設。この会議の熟議を通じて、「夢」をキーワードとした様々な取組みをすすめた。

実践として展開した「別府西『夢』プロジェクト」では、「夢」をテーマに7つの学習活動を体系的に組み込み、教科横断的な学びや生成AIの活用などにより、生徒の主体性やキャリア形成を支援した。また、PDCAサイクルによる継続的な改善を通じ、学校と地域がともに学び合う仕組みも構築した。

本稿では、この実践を文部科学省のカリキュラム・マネジメントの三側面から整理・考察し、教育目標の達成に向けた学校・保護者・地域の協働の在り方を探る。

### 視 点

- ・学校の教育目標を学校・保護者・地域で協働してアプローチするための仕組みづくり（別府西中学校を考える拡大コア会議の新設）
- ・学校教育目標を達成するための「別府西『夢』関連プロジェクト」の取組とその検証改善
- ・学校の教育目標を達成するための「ひと・もの・こと・かね・情報」の有効活用

## 第2分科会 「主体的・対話的で深い学び」の実現

### 研究主題 重点的取組・学習規律・新大分スタンダードを軸に据えた授業改善の工夫

発表者	司会者	記録者	運営委員
国東市立 志成学園 丹田 康彦	国東市立 国東中学校 畑野 章	国東市立 安岐中学校 岡野 秀一郎	日田市立 三隈中学校 浦塚 雄介

### 趣 旨

国東市立志成学園は、大分空港を有する武蔵町の中腹に位置し、令和2年に旧武蔵中学校・武蔵東小学校・武蔵西小学校が統合して義務教育学校としてスタートした。昨年度で開校5年が経過した。前期課程と後期課程に分かれ、1年生から9年生が同じ学び舎で学校生活を送っている。また、1・2・3・4年生を前期、5・6・7年生を中期、8・9年生を後期と9年間を3期に分け、それぞれ定着期・充実期・発展期として児童生徒の成長に合わせ、育成の指標を定めている。学校教育目標は、開校時から、「夢・志の実現 一歩前へ」～地域を愛し 志をもち グローバル社会を生き抜く児童生徒の育成～を掲げ、愛郷・立志・飛躍の校訓のもと、先行き不透明な現代社会で生きる力を育むため、地域とともに教職員一丸となって児童生徒の育成に励んでいる。

本分科会の主題である「主体的・対話的で深い学びの実現」に沿って、本校の取組から、研究テーマを「重点的取組・学習規律・新大分スタンダードを軸に据えた授業改善の工夫」と設定した。

主体的・対話的に学ぶとは、生徒自らが目的意識を持ち、学びの過程で協働的な学びを体験し「できた・わかった」の達成感を感じた上で、自己の学びを振り返りながら、深い学びへと発展させることでと捉え、そうした授業展開を構築しなければならないと考える。

長年課題とされてきた説明型授業から脱却し、生徒自らが課題意識をもち、生徒どうしの協働的な学びを経て、問題解決に至る学習展開を目指し、授業改善を追求しなければならない。

そこで、本校の取組から、授業の基礎となる学習規律や授業における土壌づくり、大分県が推進している「新大分スタンダード」に沿った、本校の授業改善研究の取組等を検証する中で、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業のあり方を明らかにしていく。

### 視 点

1. 学校評価のための「4点セット」を柱とした学校経営
2. 学習の素地づくりとしての「5つの取組」
3. 授業改善テーマの検証と改善
4. 授業の実際
5. 表現活動の取組
6. グローバル科における英語表現のアウトプット
7. 保護者・地域との連携

**第3分科会** よりよく生きようとする道德教育と、健康で豊かな生活を実現するための教育の充実

**研究主題** 地域社会の一員として、自覚をもって郷土を愛し、  
進んで郷土の発展に努める態度の育成  
～地域の課題と今後を主体的に考える活動を通して～

発表者	司会者	記録者	運営委員
佐伯市立 昭和中学校 川野 匡	佐伯市立 佐伯南中学校 小野 寛也	佐伯市立 鶴見中学校 児玉 晃洋	日田市立 五馬中学校 伊東 和史

### 趣 旨

佐伯市は、将来を担う人材育成のため、地域社会との連携を重視した教育を推進しており、本校においても、生徒が地域に誇りを持ち主体的に関わる意識を育むことを目指している。弥生地区の人口減少と高齢化という課題を背景に、地域コミュニティ組織設立の動きがある中、学校教育全体を通じた道德教育の観点から、地域との連携による体験活動と、地域社会の将来について考える学習活動を展開した。

具体的な取組として、生徒の勤労観や社会性を育む職場体験、地域の伝統文化を体験する「鮎のちよんがけ体験」、自然に親しみ協調性を養うカヌー・SUP体験、地域産業への理解を深める生姜栽培体験と調理実習を実施した。これらの体験活動は、地域住民や関係機関の協力を得て行われ、生徒にとって地域社会との繋がりを実感する貴重な機会となった。

さらに、地域の将来について考える試みとして、中学3年生と保護者を対象にワークショップ「弥生を考える会」を開催した。佐伯市地域振興課職員から地域の現状と将来の見通しが示され、地域コミュニティ組織の必要性が説明された後、生徒と保護者が弥生地域の未来について意見交換を行った。生徒からは自然環境の維持や遊び場の創設、保護者からは子育て環境や働く場の確保といった意見が出された。また、全校生徒を対象にアンケートを実施し、将来の居留意向や地域に対するイメージを調査した。その結果、地域への愛着は一定程度見られるものの、将来の職業選択や都市への憧れといった現実的な課題も認識されていることが明らかになった。

これらの取組は、生徒が地域社会の一員としての自覚を育み、郷土を愛する心を深めることを目的としている。体験活動を通して地域住民との交流を深め、地域産業や文化に触れることで、生徒は地域への理解を深め、主体的に関わる意識を醸成することが期待される。また、「弥生を考える会」やアンケートを通して、生徒が地域の現状や課題を自分事として捉え、将来について考えるきっかけを提供することを目指した。本研究は、これらの取り組みを通して、地域社会との連携が、生徒の道徳的価値観の育成や地域社会への貢献意欲の向上にどのように影響するかを探求するものである。

### 視 点

1. 地域の教育資源を生かした、道德教育はどのような内容が考えられるか。
2. 地域社会との連携を通じた、ふるさとを愛する心情を育む活動をすすめる学校の体制づくりは、「働き方改革」の視点も踏まえてどのようにすすめていくことができるか。

第4分科会 一人一人のキャリア教育・進路指導と自己指導能力を育成する生徒指導の充実

研究主題 自分らしい生き方につながる勤労観や職業観、社会的・職業的に自立できる力の育成

発表者	司会者	記録者	運営委員
臼杵市立 南中学校 永松 芳恵	臼杵市立 北中学校 戸高 浩二	臼杵市立 西中学校 村松 勇哉	玖珠町立 くす若草小中学校 小原 猛

## 趣 旨

本研究は、大分県臼杵市立南中学校全校生徒35名を対象に、キャリア教育を通して、勤労観や職業観を持ち、社会的・職業的に自立できる力を「自分が望む生き方を実現していける力」と定義した。これらの育成に向け、各教科、総合的な学習の時間、特別活動等、全ての教育活動で、基礎的・汎用的能力の4つの能力（「人間関係形成・社会形成力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」）を身に付けさせる事を目的としている。

本校は全校生徒の内、約4割の生徒が校区外から通学する小規模特認校である。生徒たちは素直で素朴、学年に関係なく仲が良い。反面、「どうせできん」「絶対無理！」等のネガティブ発言が多く、自己肯定感が低い現状や、様々な家庭事情を抱え特別支援教育が必要な実態もある。小規模校ということもあり、多様な考えに触れ、価値観の視点を広げることも日常生活や通常授業の中では足りていない。これらの課題を克服するため、学校教育目標を「『つなげる』『伝える』『挑戦する』ことができる南中生になる」として、様々な活動の中で目標を目指して取り組めるよう生徒の立場から設定した。さらに、キャリア教育を核に自校版キャリアファイルを開発し、探究的・教科横断的な学び、小中連携等を様々な地域のリソースを活用しながら取り組みを展開してきた。結果、生徒たちのネガティブ発言が減少し、自己肯定感や課題対応能力を向上させることができた。

本論文では、生徒たちが「自分らしい生き方」「自分らしさ」を追求し、少しずつ自立に向け基礎的・汎用的能力を向上させていくプロセスと取組の様子について報告する。

## 視 点

1. キャリア教育を核とした教育活動をどのように進めていけばよいか
2. 「自分が望む生き方を実現していける力」の育成に向けた指導の工夫をどのように進めていけばよいか
3. 教師・生徒・保護者・地域が一体となり、サステイナブル（持続可能）なキャリア教育はどのように構築すればよいか

## 第5分科会 「令和の日本型学校教育」を担う教師の育成

### 研究主題 小中一貫教育の推進を通じた計画的・組織的な人材育成の在り方

発表者	司会者	記録者	運営委員
豊後大野市立 緒方中学校 弓削 直幸	豊後大野市立 千歳中学校 中城 美加	豊後大野市立 大野中学校 加藤 陽一	日田市立 津江中学校 森山 弘樹

### 趣 旨

「令和の日本型教育」では、目指す姿を、「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」とし、それぞれの学びを一体的に充実させることで、「主体的・対話的で深い学び」を実現することが求められている。「令和の日本型教育」の実現を担う教師となるためには、社会の変化が加速度を増し、複雑で「予測困難な時代」と言われる環境の大きな変化にも対応しようとする教師の主体的な姿勢が必要である。さらに、地域や学校現場の課題の解決を通じた学びを含め、自らの日々の経験や他者から学ぶOJT (On the Job Training) による資質・能力の向上、学校教育の基盤的なツールとしてのICT活用が重要と考えられる。

豊後大野市では、平成25年度から「連携型小・中一貫教育」を推進し、令和3年度から朝地小中学校を皮切りに小中一貫教育校をスタートさせ、今年度から、7つのすべての町が小中一貫教育校となった。豊後大野市校長会では、これまで、小中一貫教育の推進に向けた学校経営上の課題の整理や、小中一貫教育校における人材育成や研修の在り方について議論を深めてきた。また、教職員の大量退職期を迎え、短期のスパンで教職員の大多数が入れ替わり、若手教職員が年々増加していることから、人材育成については喫緊の課題であることは言うまでもない。経験豊かなベテラン教職員の高い識見や優れたノウハウ等を若手や中堅教職員に伝承し、教育活動をさらに充実・発展させていくための体制づくりが急務となっている。そこで、小学校教員と中学校教員が、一つの組織として教育活動を行う小中一貫教育校として、計画的かつ組織的に人材を育成するためには、どのようにすればよいかを探っていた。

### 視 点

1. 教職員の人材育成を、校長としてどのように組織的にマネジメントしていくか
2. ICT活用指導力を含めた新たな課題に対応できる人材を育成するにはどうすればよいか
3. 環境の大きな変化を前向きに受け止め、教師として新しい知識・技能を学び続ける主体的な姿勢をつくりだすにはどのようにすればよいか

第6分科会 学校と地域の連携・協働による「チーム学校」と「働き方改革」の実現

研究主題 学校と地域の連携・協働による「チーム学校」と「働き方改革」の実現

発表者	司会者	記録者	運営委員
豊後高田市立 香々地中学校 明石 哲也	豊後高田市立 田染中学校 清輔 康一	豊後高田市立 真玉中学校 河野 政文	玖珠町立 くす星翔中学校 吉武 功二

趣 旨

複雑化・多様化した学校の課題に対応し、子供たちの豊かな学びを実現するため、教員が担っている業務を見直し、専門スタッフが学校教育に参画して、教員が専門スタッフ等と連携して、課題の解決に当たることができる「チームとしての学校」体制を構築することが必要とされ「チーム学校」が提唱されて15年以上が経過している。その間スクールソーシャルワーカーから始まり現在ではスクールカウンセラー等の教員以外の専門スタッフが導入されており、これらの専門スタッフと協働を推し進め、学校課題に応じた組織を構築しつつある。また地域社会にいる専門人材が参画して、学校と地域の連携・協働を強化することにより、教員は教育指導や生徒指導に注力する方向も示されている。

本校は過疎化が進む地域にあり、令和6年度は全校生徒29名、令和7年度は22名と小規模であり、保護者世代も香々地で育った人と豊後高田市が進める移住政策で転入してきた人が混在する。子供たちは、幼少期から香々地で育っている生徒がほとんどだが、地域のことについては知らないことも多く、育った香々地に魅力を持っていない傾向にある。また小規模校であるが、友人との関係や家庭環境等さまざまなことが原因となり、教室に入れなくなる生徒や登校することができなくなる生徒もいる。

これらの課題に対して、学校職員だけで対応するのではなく、学校と地域や専門スタッフ等が連携して「チーム学校」として取組む必要がある。育った香々地に魅力を持つ取組には、コミュニティースクール（学校運営協議会制度）を中心に据え、地域にいる方々を含めた「チーム学校」で地域学習の取組を進めた。また教室から遠ざかっている生徒に対しては、SCやSSWを活用して関係機関と連携した「チーム学校」としての対応を進めた。以上のような「チーム学校」としての学校の組織的な実践について発表したい。

視 点

1. コミュニティースクール（学校運営協議会）を軸に据えた地域との連携
2. SC、SSWの活用による関係機関との組織的な連携

# 日田大会を終えて

鋭きも鈍きも共に捨て難し

錐と鎚とに使い分けなば

これは、広瀬淡窓先生のいろは歌です。咸宜園教育の理念を基本に据える文教都市である日田市で、第71回大分県中学校長研究大会日田大会を開催し、皆様方のご協力を得ながら無事終了することができました。早朝より県下各地から多くの校長先生方にご参加をいただき、誠にありがとうございました。

さて、本研究大会は、「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」を研究主題に据え、6つの分科会で熱心な討議が行われました。将来の予測が困難な「VUCA」の時代と言われる中、学校が抱える課題はより複雑化、困難化しており、解決に向けたチーム学校としての取組、それに関わる校長のリーダーシップ等々、学ぶべきものが多い分科会ではなかったと思います。本日の研究大会での論議が、明日からの学校経営の一助となることを切に願っています。

一方、小鹿田焼きの窯元である坂本工氏に「小鹿田焼きの特徴と職人の誇り」の演題で講演をしていただきましたが、伝統を重んじる一方、継承できなくなっていることへのジレンマ等、時代の流れには抗えない状況をお話いただき、学校教育でもよく言われる「不易と流行」の見極めに通じるところがあると感じました。

私たち校長は、学校の責任者として、まず、生徒の命を守り、安全を確保しなければなりません。その上で、確固たる教育理念を持ち、生きる力を身に付けた子どもたちを育成すると共に、保護者・地域から信頼される学校を創造しなければなりません。そのためには、絶えず自己研鑽に努め、より広く深い視野を持ち、校長としての強い確かなリーダーシップを発揮していく必要があります。多様化・深刻化する教育課題は山積していますが、中学校長会が強い連帯感を持ち、持続可能な社会の創り手の育成に力を尽くしていくことを固く誓い合える充実した大会になったと思います。

終わりに、日田大会を開催するにあたり、多大なるご支援をいただきました日田市並びに日田市教育委員会、大分県教育委員会に深く感謝申し上げますとともに、分科会での発表、運営にあたられた校長先生方に心からお礼を申し上げます。

## 第76回全九州中学校長研究大会熊本大会

1. 期 日 令和7年8月21日(木)・22日(金)
2. 会 場 熊本県熊本市 熊本ホール、熊本キャッスルホテル他
3. 研究主題 豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育
4. 分科会

分科会	研究主題
第1分科会	「カリキュラム・マネジメント」の推進
第2分科会	「主体的・対話的で深い学び」の実現
第3分科会	よりよく生きるための道德教育と、健康で豊かな生活を実現するための教育の充実
第4分科会	一人一人のキャリア教育・進路指導と自己指導能力を育成する生徒指導の充実
第5分科会	「令和の日本型教育」を担う教師の育成
第6分科会	学校と地域の連携・協働による「チーム学校」と「働き方改革」の実現

### 5. 提 案

第2分科会 協議題2 「全ての学習の基盤となる言語能力や情報活用能力、問題を発見し解決する能力の向上」  
 ～重点的取組・学習規律・新大分スタンダードを軸に据えた授業改善の工夫～  
 (くにさき地区) 発表者 丹田 康彦 (志成学園) 司会者 畑野 章 (国東中学校)

第5分科会 協議題2 「教科等の専門性と指導力、及びICT活用指導力を含めた新たな課題に対応できる力量を高める人材育成と研修の在り方」  
 ～小中一貫教育の推進を通じた計画的・組織的な人材育成の在り方～  
 (豊後大野市) 発表者 弓削 直幸 (緒方中学校) 司会者 中城 美加 (千歳中学校)

### 6. 大分県参加者数【55名】

<b>【第1分科会】</b> 中津市立東中津中学校 豊後高田市立香々地中学校 大分市立戸次中学校 佐伯市立鶴谷中学校 日田市立津江中学校	田邊玲子 明石哲也 佐藤義仁 安達一郎 森山弘樹	宇佐市立長洲中学校 大分市立城東中学校 臼杵市立西中学校 豊後大野市立朝地中学校 別府市立別府西中学校	赤野謙一郎 平田勝久 村松勇哉 伊東貴喜 佐藤裕一
<b>【第2分科会】</b> 中津市立耶馬溪中学校 杵築市立杵築中学校 国東市立志成学園 大分市立南大分中学校 竹田市立竹田中学校	財前由紀子 小野誠司 丹田康彦 河野正行 渡邊早苗	日出町立日出中学校 国東市立国東中学校 大分市立大東中学校 佐伯市立城南中学校 日田市立大山中学校	深町勝幸 畑野 章 岩崎 勉 阿南義則 三笥淳一

【第3分科会】	中津市立今津中学校 豊後高田市立田染中学校 大分市立坂ノ市中学校 日田市立戸山中学校 別府市立青山中学校	安部友善 清輔康一 藤澤裕治 小林祐志 北村俊雄	宇佐市立安心院中学校 佐伯市立米水津中学校 大分市立城南中学校 豊後大野市立清川中学校 竹田市立直入中学校	長尾大介 赤峰武壽 糸永秀章 野尻秀信 渡邊幸美
【第4分科会】	中津市立中津中学校 大分市立上野ヶ丘中学校 大分市立野津原中学校 大分市立賀来小中学校 佐伯市立直川中学校	高山ゆかり 林 吾郎 佐藤利香 本田英樹 日高みつほ	宇佐市立駅川中学校 別府市立朝日中学校 臼杵市立南中学校 日田市立東部中学校 津久見市立津久見中学校	時枝政文 武野 太 永松芳恵 吉野祐之 大石琢磨
【第5分科会】	中津市立豊陽中学校 大分市立王子中学校 大分市立滝尾中学校 豊後大野市立緒方中学校 玖珠町立このえ緑陽中学校	田中浩志 姫野宏明 安東俊英 弓削直幸 佐藤慎治	日田市立北部中学校 大分市立鶴崎中学校 佐伯市立蒲江湘南学園 豊後大野市立千歳中学校	西胤英明 池田憲彦 森竹啓介 中城美加
【第6分科会】	豊後高田市立真玉中学校 国東市立安岐中学校 大分市立竹中中学校	河野政文 岡野秀一郎 照山勝哉	由布市立挾間中学校 由布市立湯布院中学校 日田市立大明中学校	須藤礼子 麻生 久 川邊 功

## 7 記念講演 及び 大会宣言文

### 《記念講演》

演 題 「今も生きる新千円札肖像画となった北里柴三郎の教え」

講 師 北里大学名誉教授 藤田医科大学客員教授 北里 英郎 氏（曾孫）

#### ○北里柴三郎の生涯

- 1853年生まれ 熊本県阿蘇郡小国町に生まれる。父惟信 母貞（玖珠の方）  
4年間、橋本家（おば宅）、加藤家（母実家）で厳格に育てられる。  
その後、4年間は教師田中、栃原の下に預けられる。
- 1869年 時習館（熊本藩校）で2年間、熊本医学校で2年間学ぶ。  
オランダ語に興味で進学も医学のすばらしさを教わる。【マンスフェルト】  
東京医学校にて21～30歳を過ごし内務省に入省  
ドイツやアメリカに国費留学 【ローベロト・コッホに師事】
- 1890年 破傷風菌抗毒素の発見、血清療法確立
- 1892年 私立伝染病研究所を設立 【福沢諭吉が全面的に援助】
- 1917年 慶応義塾大学医学部を創立
- 1923年 日本医師会 初代会長
- 1931年 ご逝去（78歳）

#### ○柴三郎の信条

- ・「学問を志す以上は、世の中のためにならねばならぬ」 実学主義 横井小楠より
- ・「終始一貫 Be consistent from start to finish」一貫した生活リズム
- ・「報恩」 国費で得たものを日本の人々へ還元せねばならない。

## 第76回 全九州中学校長研究大会熊本大会「大会宣言文」

近年は「VUCAの時代」と言われ、情報化、グローバル化が加速度的に進展する中、教育を取り巻く環境は急激かつ複雑に変化している。これに対応すべく、新しい時代に必要な資質・能力の育成を目指す「社会に開かれた教育課程」の実現が求められている一方で、いじめ・不登校への対応、ICT活用指導力の向上、特別支援教育の充実等、様々な教育的課題が生じている。

加えて、学校教育においては、全ての子供たちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実、子供たちが安心して学ぶことができる「誰一人取り残さない学びの保障」に向けた多様な学びの場の確保が求められている。

一方、教職員の長時間勤務の実態は深刻であり、学校教育を維持・向上させ持続可能なものにするために、また教師としての適性を有し、個性豊かで多様な人材を確保するために「学校における働き方改革」の推進は喫緊の課題となっており、必要な改革を躊躇なく進めながら、「令和の日本型学校教育」を担う「新たな教師の学びの姿」を実現していかなければならない。

このような現状を認識し、全九州中学校長協議会は、これまで「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく日本人を育てる中学校教育」を主題に掲げ、これからの中学校教育の在り方について研究協議を進めてきた。本大会からは、時代の変化に応じて「豊かな人間性を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」とし、研究協議を深めていくことにした。

私たち校長は、この大会を契機に、学校経営の責任者としての使命感や確固たる教育理念と教育に関する高い識見を持ち、自信の人間力と学校経営力を磨き、強いリーダーシップを発揮して中学校教育を一層充実・発展させ、生徒一人一人の持てる力を見出し、最大限高めていくことにより、大会主題の実現に努めていく決意である。

ここに、次の事項を決議し、その実現を期す。

### 決 議

- 一 人間尊重の精神を基底に据え、「社会の変化に主体的に向き合い、持続可能な社会を創造していく力」を育む教育の推進に努める。
- 一 学習指導要領の趣旨を具現化する創意ある教育課程を編成・実施・評価・改善し、確かな学力の定着・豊かな心・健やかな体の育成に努める。
- 一 家庭・地域社会・関係機関及び関係団体との連携を深め、信頼される開かれた学校づくりに努める。
- 一 教職員研修の充実を図り、教職員としての使命感・倫理観の高揚と資質・能力の向上に努める。
- 一 GIGAスクール構想が目指す、学びのDX化をはじめ、多様で効果的な教育活動を推進するため、人材措置を含めた教育諸条件の整備・充実に努める。
- 一 教職員が心身共に健康でその意欲と能力を最大限に発揮できるよう、教職員の意識改革や業務の大胆な見直し、適切な部活動運営を含めて「学校における働き方改革」を総合的・計画的に推進する。
- 一 大規模な大雨や震災等の被災地における教育活動正常化への支援と九州各地区・各学校の防災教育の充実に努める。
- 一 感染症等への対応について、生徒の健康・安全を優先し、地域や学校の実情を踏まえ、適切な判断の下、感染症防止対策、健康管理、学力保障、心のケアなど必要な対策や措置を講じる。

令和7年8月22日

第76回 全九州中学校長研究大会熊本大会

## 第76回全日本中学校長会研究協議会香川大会

1. 期 日 令和7年10月23日(木)、24日(金)
2. 場 所 香川県高松市 レクザムホール、高松シンボルタワー、サンポートホール高松
3. 研究主題 「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」
4. 分科会

分科会	研究主題
第1分科会	「カリキュラム・マネジメント」の推進
第2分科会	「主体的・対話的で深い学び」の実現
第3分科会	よりよく生きようとする意思や能力を育む道德教育の充実
第4分科会	健康で安全な生活と豊かなスポーツライフを実現するための教育の充実
第5分科会	一人一人の社会的・職業的自立に向けたキャリア教育と進路指導の充実
第6分科会	自他を敬愛し他者と協議しながら自己実現を図るための自己指導能力を図るための自己指導能力を育成する生徒指導の充実
第7分科会	「令和の日本型学校教育」を担う教師の育成
第8分科会	学校と地域の連携・協働による「チーム学校」と「働き方改革」の実現

5. 提 案 今回は提案者なし

### 6. 大分県参加者数【13名】

【第1分科会】	中津市立本耶馬溪中学校	小川邦夫	別府市立東山中学校	谷川芳明
【第2分科会】	国東市立国見中学校	末綱文雄	竹田市立緑ヶ丘中学校	堀 剛士
【第3分科会】	大分市立戸次中学校	佐藤義仁		
【第4分科会】	豊後高田市立河内中学校	河野邦子		
【第5分科会】	大分市立王子大分中学校	姫野宏明		
【第6分科会】	大分市立南大分中学校	河野正行	佐伯市立米水津中学校	赤峰武壽
【第7分科会】	豊後大野市立犬飼小中学校	小坂敏之	日田市立五馬中学校	伊東和史
【第8分科会】	由布市立湯布院中学校	麻生 久	大分市立城南中学校	糸永秀章

### 7. 研究協議会主題及び分科会研究題の解説及び視点

#### 第76回 全日本中学校長会研究協議会 香川大会

《研究協議会主題》

「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」

#### 《解説》

今の子供たちやこれから誕生する子供たちが成人して社会で活躍する頃には、我が国は新たな局面を迎えていると予想される。人口減少や高齢化、デジタルトランスフォーメーション、グローバル化や多極化、地域環境問題など変動性や不確実性、複雑性、曖昧性の時代であり、先行き不透明で将来の予測が困難な未来となっている。また、急激な少子高齢化が進む中で成熟社会を迎えた我が国にあっては、一人一人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが必要であり、我が国は、IoT (Internet of Things) や人工知能 (AI) で全ての人

とモノがつながり、様々な知識や情報が共有され、必要な情報が必要なときに提供されるような超スマート社会（Society5.0）の仕組みづくりに挑み始めている。経済先進諸国においては、経済的な豊かさのみならず、精神的な豊かさや健康まで含めて幸福や生きがいを捉える「ウェルビーイング（Well-being）」の考え方が重視されてきている。また、予測できない未来に向けて自らが社会を創りだしていく視点から「持続可能な社会の創り手」という目指すべき姿の実現が求められている。

令和3年度から全面実施となった学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」の理念の下、これまでの我が国の学校教育の実践や蓄積を生かし、子供たちが未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成することを目指して、確かな学力の育成や道徳教育の充実、体験活動の重視、豊かな心や健やかな体の育成を改訂の基本的な考えとしている。そのことを踏まえて各学校において、生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともに、その改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていく「カリキュラム・マネジメント」に努めるものとしている。また子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするために、我が国の優れた教育実践に見られる普遍的な視点である「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進することが求められているとしている。

一方、中学校教育の現状を見ると、いじめの問題をはじめ、暴力行為、パソコンやスマートフォン等を利用した問題行動、規範意識や社会性の未成熟、学習意欲の低下など、様々な課題が指摘されている。これらの課題の解決を図るとともに、自殺の防止や不登校生徒への支援等に取り組み、子供たちの命や安全を守るためにも、教職員の力だけでなく、家庭や地域の教育力を生かしたり関係機関との連携を図ったりしていくことが必要である。そのためには、学校は従来から閉鎖的と言われる体質から抜け出し、「地域とともにある学校」に転換していくことが求められている。

中央教育審議会の『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』では、社会の変化が加速度を増し、複雑で予測困難となってきている中、子供たちの資質・能力を確実に育成するためには、学習指導要領を着実に実施していくことが重要であるとしている。その上で、2020年代を通じて実現を目指す新しい時代を見据えた学校教育を「令和の日本型学校教育」とし、「個に応じた指導」を学習者の視点から整理した概念である「個別最適な学びと、これまでも「日本型学校教育」において重視されてきた「協働的な学び」とを一体的に充実することを目指すとしている。その実現のためには、これまでの学校教育が担ってきた、学習機会と学力を保障するという役割、全人的な発達・成長を保障する役割、人と安全・安心につながることもできる居場所としての福祉的な役割を継承しつつ、学校教育を社会に開かれたものとしていくこと、学校教育を支える全ての関係者が、それぞれの役割を果たし、互いにしっかりと連携することで必要な改革を進めていくことが期待されている。また、教師の勤務時間管理の徹底や学校及び教師が担う業務の明確化・適正化、教職員定数の改善充実、専門スタッフや外部人材の配置拡充などの学校における働き方改革を強力に推進すること、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に資するよう、これまでの実践とICTを最適に組み合わせることで、学校教育における様々な課題を解決し、教育の質の向上につなげられるようにすることも期待されている。

全日本中学校長会は、全日中新教育ビジョンの趣旨を踏まえ、学校における働き方改革を含めた新たな教育課題に対しても果敢に挑戦し、校長相互の資質向上と目的を明確にした研究を推進することにより、学校経営の更なる充実と学校からの教育改革を進めていかなければならない。そこで、令和7年度第76回全日本中学校長会研究協議会香川大会において、「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」を研究協議会主題として研究を深め、我が国の中学校教育の向上に資するとともに、広く国民の負託に応えたい。

## 《分科会研究題と研究の視点》

下記の1から8にある①から③の「研究の視点」の扱いについては、指定を受けた各地区が重点とする研究の視点を選択し、研究を行うこととする。また、学校経営の視点を踏まえたものとする。

### 1. 「カリキュラム・マネジメント」の推進（担当 東海北陸地区）

（解説）予測困難で急激に変化する社会に生きる生徒たちは、未知の状況に応じ、新しい時代を切り拓いていく力を身に付けなければならない。そのため学校には、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を形成するという目標を社会と共有しながら、生徒たちに育成すべき資質・能力を具体的かつ明確に示し、社会と連携・協働して育ていくための「カリキュラム・マネジメント」を推進することが求められる。

生徒たちが豊かな創造性を備え持続可能な社会の形成者となるためには「生きる力」が必要であり、育成を目指す資質・能力は、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱からなる。そこで各学校においては、教科等の目標や内容を見通し、特に学習の基盤となる資質・能力（言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等）や現代的な諸課題に対応して求められる力の育成のために、教科等横断的な学習の充実や主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善等が求められており、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上に努めることが必要である。

- ① 学習指導要領に基づく教育課程の実施状況を把握し、学習効果の最大化を図るための工夫
- ② 新しい時代に求められる資質・能力を教（言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習基盤となる資質能力を含む）を育成していくための教科横断的な教育課程の編成・実施・評価・改善
- ③ 地域の人的・物的資源を有効活用した「社会に開かれた教育課程」の編成・実施・評価・改善

### 2. 「主体的・対話的で深い学び」の実現（担当 東北地区）

（解説）グローバル化する社会の持続的な発展に向けて学び続ける人材の育成が必要になる。そのために、「正解（知識）の暗記」、「正解主義」への偏りから脱却し、学びの動機付けや幅広い資質・能力の育成に向けて「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を行っていくことは、社会の持続的な発展を生み出す人材養成において不可欠である。学習者を主体として、他者との協働や課題解決学習などを通じ、深い学習を体験し、自ら思考することを重視する取組が必要であり、その際、自己の主体性を軸にした学びに向かう一人一人の能力や態度を育むという視点をもって、教育課程の編成・実施や質保証の取組を行うことが重要である。

教師には、習得・活用・探究という学びの過程全体を見渡し、個々の内容事項を指導することによって育まれる資質・能力を自覚的に認識しながら、子どもたちの変化等を踏まえつつ自らの指導方法を不断に見直し、改善していくことが求められる。その際、「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、更にその成果を「個別最適な学び」に還元するなど、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげていくことが必要である。加えて、対面指導の重要性、オンライン教育等の実践で明らかになる成果や課題を踏まえ、発達の段階に応じて、1人1台端末の日常的な活用を「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて推進するとともに、日々の授業改善に向けた取組を活性化していくことが必要である。

- ① 教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせて「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善の工夫
- ② 全ての学習の基盤となる言語能力や情報活用能力、問題を発見し解決する能力の向上
- ③ 全ての子供たちの可能性を引き出す、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的充実

### 3. よりよく生きようとする意思や能力を育む道徳教育（担当 関東甲信越地区）

（解説）全ての人々が自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した一人の人間として互いを尊重するとともに、ウェルビーイングな社会を目指し、その実現に向けた社会的包摂を推進する必要がある。学校や地域社会の一員として参画し、自らの個性を生かして幸せに生活でき、誰一人取り残されず一人一人の可能性が最大限に引き出されることができるようになる上で、他者への共感や寛容性、更には多様性を尊重する態度、人間関係を築く力、異なる考えの人々と議論を重ねながら問題を解決していく力などを育成する機会を計画することが重要である。そのためには、各教科等における道徳教育との関連を図りながら、「特別の教科 道徳」において、発達の段階に即した計画的、発展的な指導や様々な体験活動等を生かす指導など、道徳的諸価値についての理解を基に、人間としての生き方についての考えを深める授業の充実を図り、生徒の道徳性を養うことが必要である。

また、現実の問題に対応できる資質・能力を育むためには、道徳教育推進教師を中心とした指導体制を充実するとともに、生徒が自分自身の問題と捉え真正面から向き合い、一面的な見方から多面的・多角的に考え論議していく「考え、議論する」道徳科の授業を実施することが大切である。また、各学校や地域等が抱える課題に応じた取組を推進するため、家庭や地域社会と育てたい生徒像を共有し、相互の連携強化を図ることも重要である。

- ① 道徳的諸価値についての理解と、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度の育成
- ② 生徒が自ら考え理解し、主体的に道徳性を育むための指導と評価の工夫
- ③ 道徳教育推進教師を中心とした協力的な指導体制の充実

### 4. 健康で安全な生活と豊かなスポーツライフを実現するための教育の充実（担当 中国地区）

（解説）生徒の体力の状況については、これまでの学校の取組により、ゆるやかに上昇してきた。しかしながら、「令和4年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の体力合計点の結果は、令和元年度調査から連続して小・中学校の男女ともに低下した。体力低下の要因は、①1週間の総運動時間が420分以上の児童生徒の割合は、増加しているものの以前の水準にはいたっていないこと、②肥満である生徒の増加、③朝食欠食、睡眠不足、スクリーンタイム増加などの生活習慣の変化のほか、新型コロナウイルス感染症の影響により、マスク着用中の激しい運動の自粛なども考えられる。

こうした指摘を踏まえ、生涯を通じて心身共に健康・安全で活力ある生活を送るために必要な資質・能力を育て、心身の調和のとれた発達を図り、健康で安全な生活と豊かなスポーツライフを実現する基礎を培う必要がある。特に、食育の推進並びに体力の向上に関する指導、安全に関する指導及び心身の健康の保持増進に関する指導については、関係する教科等において適切に行うよう努めなければならない。

- ① 生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現していく資質・能力の育成と体力の向上
- ② 食育の推進及び心身の健康の保持増進や感染症等の予防と対策に関する指導の充実
- ③ 身の回りの生活の安全、交通安全、防災に関する指導や情報化の進展に伴う事件・事故の防止等の新たな安全上の課題に関する指導の充実

### 5. 一人一人の社会的・職業的自立に向けたキャリア教育と進路指導の充実（担当 北海道地区）

（解説）産業構造・就業構造の変化に加え、労働市場の在り方や働く人に必要とされるスキルが今後変容していく中で、義務教育修了段階にある生徒たちに対し、社会的・職業的自立に向けて必要な資質・能力を身に付けることができるよう、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」によって構成される「基礎的・汎用的能力」を育成するキャリア教育が求められる。各学校においては、この4つの能力を参考にしつつ、生徒一人一人の課題を踏まえて具体の能力を設定し、工夫された教育を通じて達成されることが望まれている。加えて、小・中・高等学校のつながりを明確にしたキャリア教育の充実を図ることが大切であり、令和2年度より児童生徒が活動を記録し蓄積する教材としてのキャリア・パスポートが、全ての小・中・高等学校において導入され、活用されている。また、一人一人が、多様な個性・能力を伸ばし、充実した人生

を主体的に切り拓いていくことのできる生涯学習社会の中で、生徒が自らの生き方を考え主体的に進路を選択することができるよう、特別活動を要として学校全体の教育活動全体を通じて組織的かつ計画的な進路指導を行うことが重要である。

- ① 社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を育成する系統的なキャリア教育の充実
- ② 特別活動を要として学校全体の教育活動全体を通して取り組まれる組織的・計画的な進路指導の充実
- ③ 学校と地域・社会や産業界等が連携・協働した職業講話や職場体験活動の充実

## 6. 自他を敬愛し他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導能力を育成する生徒指導の充実（担当 近畿地区）

（解説）学校教育は、集団での生活や活動を基本としており、生徒相互の人間関係の在り方は、生徒の健全な成長と深く関わっている。好ましい人間関係を基礎に、自他を敬愛し他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導能力を育成することは、人格のよりよい形成と学校生活の充実の基盤となる。昨今、教育的ニーズを踏まえつつ、一人一人の可能性を最大限伸ばしていく教育が求められている。こうした中で、生徒指導は、一人一人が抱える個別の困難や課題に向き合い「個性の発見とよさや可能性の伸長、社会的資質・能力の発達」に資する重要な役割を有している。

平成25年に施行されたいじめ防止対策推進法に基づき、組織的な対応と関係機関との連携の強化等が図られているにもかかわらず、いじめの重大事態の発生件数は増加傾向にある。また、児童生徒の自殺者数や不登校児童生徒数も増加傾向にあることを踏まえ、各学校では、組織的、継続的な支援・取組を更に充実させるとともに、家庭や地域及び関係機関、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどの専門スタッフ等との連携を一層充実させる必要がある。

- ① 好ましい人間関係を築き、他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導能力を育成する学校教育の在り方
- ② いじめの問題への対応や自殺の防止及び不登校生徒への支援の在り方
- ③ 家庭や地域及び関係機関、専門スタッフ等との連携・協力を密にした生徒指導の推進

## 7. 「令和の日本型学校教育」を担う教師の育成（担当 九州地区）

（解説）「令和の日本型学校教育」を実現し、それを担う質の高い教師となるためには、教師自身が技術の発達や新たなニーズなど学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて探究心をもちつつ自律的かつ継続的に新しい知識・技術を学び続ける主体的な姿勢が必要である。また、全ての子供たちの可能性を最大限に引き出す、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図り、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた取組を更に進化させ、教育の質を向上させる能力も備えていることが求められる。

今後、改めて教師が高度専門職業人として認識されるためには、地域や学校現場の課題の解決を通じた学びを含め、自らの日々の経験や他者から学ぶといった「現場の経験」を重視したスタイルの学びが求められ、これらが「新たな教師の学びの姿」を構想する上での鍵となる。そのような学びを通じて、教師一人一人が専門職としての高度な知識・技能と、個々の生徒の多様な実態を踏まえた一人一人が抱える課題に個別に対応できる指導力を身に付けるとともに、高い倫理観に立ち、使命感溢れる指導を行って、生徒や保護者、地域の信頼を獲得することが不可欠である。また、教員養成段階から、生徒にプログラミング的思考、情報モラル等に関する資質・能力も含む情報活用能力を身に付けさせるためのICT活用指導力を養成することや、学習履歴（スタディ・ログ）の利活用などの、教師のデータリテラシーの向上に向けた教育などの充実を図っていくことが求められており、現職の教師に対してはICT活用指導力の一層の向上を図ることが急務である。さらに、心理や福祉等の専門スタッフなど多様な人材と協力したり、地域と連携・協働を円滑に行ったりする資質・能力をもち、新たな領域の専門性を身に付けるなど強みを伸ばして諸課題の解決に取り組むことができる

人材の育成が求められる。

- ① 生徒や保護者、地域の信頼に応えられる教師の育成と「新たな教師の学びの姿」を実現する研修の在り方
- ② 教科等の専門性と指導力、及びICT活用指導力を含めた新たな課題に対応できる力量を高める人材育成と研修の在り方
- ③ 地域等と協働し、組織的に諸課題の解決に取り組むことができる教師の育成

## 8. 学校と地域の連携・協働による「チーム学校」と「働き方改革」の実現（担当 四国地区）

（解説）学校には、これまでも新たな課題に応じて、司書教諭、栄養教諭等の新しい職が導入されてきた。近年は、ますます複雑化・多様化する教育課題に対応するため、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、部活動指導員等の教員以外の専門スタッフが導入されている。そのため、これからは教職員間のより一層の組織的対応を強化することはもちろん、全てを教職員が担う自己完結型の運営を廃し、これら専門スタッフとの協働を推し進め、学校内の多様な人材がそれぞれの専門性を生かして能力を発揮するチームとしての学校を実現していくことが求められる。また、コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）等を活用するなど、チームとしての学校と地域の連携体制を整備していくことで、地域とともにある学校づくりを推進し、社会総がかりで教育を進めていくことも求められる。その結果として、教員が担うべき業務の精選・明確化などを図り、新たに導入された教員業務支援員、情報通信技術支援員等を活用し、教員の働き方改革につなげていくことや教育委員会等に配置されているスクールロイヤー等を活用しての法的整理を踏まえた役割分担・連携が必要である。また、子供たちがスポーツ・文化芸術活動に継続して親しむことができる機会を確保するため、地域の実情に応じながら、部活動の地域連携や地域スポーツ・文化クラブ活動移行に向けた環境の一体的な整備を着実に進めることも求められる。

こうした「チーム学校」と「働き方改革」の実現のため、校長は、これまでの教職員の管理を主とするマネジメントから脱却し、多様な知識・経験をもつ人材との連携を強化し、こうした人材を取り込むことで、社会のニーズに対応しつつ、高い教育力をもつ組織となるためのマネジメントを進めていく必要がある。

- ① 教職員や多様な人材の専門性を活用し、組織力を高める学校経営の在り方
- ② チームとしての学校と地域の連携・協働体制の在り方
- ③ 専門スタッフ等との連携による教員の働き方改革の実現

# 第76回全日本中学校長会研究協議会香川大会

## 宣 言

今日、我が国の教育は人格の完成を目指し、伝統と文化を尊重するとともに、豊かな人間関係で満たされる持続可能な社会の創り手を育成する使命を担っている。

全日本中学校長会は、自然災害や新たな感染症の発生、グローバル化の進展や急速な技術革新など社会状況が変化する中、新しい時代の中学校教育の課題に対応し、教育基本法をはじめとする教育関連法規や学習指導要領の趣旨を踏まえ、「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」を目指し、国民の負託に応えなければならない。

私たちは、人間尊重の精神に徹し、自らの責任において全日中新教育ビジョンに基づく学校からの教育改革の推進と当面する諸課題の解決に努め、新たな中学校教育を創造していく決意である。

ここに、第76回全日本中学校長会研究協議会香川大会に当たり、「育てよう 生きる力 創ろう 新たな時代の教育を 海とアートの香川から」のスローガンの下、次の事項を決議し、その実現を期する。

## 決 議

- 一、人間尊重の精神に徹し、「社会を生き抜く力」とともに「よりよい社会を形成する力」を育む教育を推進する。
- 一、全日中新教育ビジョンを踏まえ、学習指導要領に基づく特色ある教育課程を編成・実施・評価・改善し、確かな学力の定着、豊かな心と健やかな体の育成を推進する。
- 一、現在の学校教育課題に即した研修を充実し、教職員の資質・能力の向上と使命感の高揚に努める。
- 一、創意ある教育活動を展開し、家庭・地域社会の信頼に応える教育を実現するため、人的措置をはじめ確固とした教育条件の整備・充実を期する。
- 一、「教科書無償給与制度」「義務教育費国庫負担制度」及び「人材確保法」の堅持を要請し、教育水準の維持向上を期する。
- 一、新しい時代に求められる学校づくりに向けてリーダーシップを発揮するとともに、「学校における働き方改革の推進」「教員の勤務実態を踏まえた環境整備」を要請し、有効かつ持続可能な指導・運営体制の構築を期する。
- 一、東日本大震災をはじめ、能登半島地震など近年多発する自然災害等により被害を受けた地域の復興を期し、教育活動の充実に向けた支援と全国各地区・各学校における防災教育・安全教育の充実に努める。

令和7年10月24日

## 次年度の各種研究大会について

### 1. 令和8年度の各種研究大会

#### (1) 大分県第72回大分県中学校長研究大会豊後大野大会

- 期日：令和8年6月26日(金) 会場：豊後大野市総合文化センター 「エイトピア おおの」
- 大会主題：「豊かな人生を切り開き 持続可能な社会の作り手を育てる 中学校教育」
- 分科会

分科会	分科会主題
第1分科会	カリキュラムマネジメントの推進
第2分科会	主体的・対話的で深い学びの実現
第3分科会	よりよく生きるための道徳性の育成と、健康で安全な生活を実現するための教育の充実
第4分科会	自己理解を促し、将来にわたって人としての生き方を深める生徒指導とキャリア教育の充実
第5分科会	多様化した教育課題に対応できる学校経営と教職員の育成
第6分科会	地域や専門機関との連携・協働による「チーム学校」の実現とその機能の強化

#### (2) 第77回全九州中学校長研究大会鹿児島大会

- 期日：令和8年8月27日(木)・28日(金) 会場：鹿児島県鹿児島市
- 大会主題：「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」(仮)
- 分科会

分科会	研究主題(仮)
第1分科会	「カリキュラム・マネジメント」の推進
第2分科会	「主体的・対話的で深い学び」の実現
第3分科会	よりよく生きるための道徳性の育成と、健康で安全な生活を実現するための教育の充実
第4分科会	一人一人のキャリア教育・進路指導と自己指導能力を育成する生徒指導の充実
第5分科会	「令和の日本型学校教育」を担う教師の育成
第6分科会	学校と地域の連携・協働による「チーム学校」と「働き方改革」の実現

※大会主題、分科会研究主題 協議題は若干の変更が考えられます。

分科会提案

- 第4分科会 協議題1 「社会的・職業的な自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を育成する系統的なキャリア教育の充実」 大分市
- 第6分科会 協議題2 「チームとしての学校と地域の連携・協働体制の在り方」 由布市

#### (3) 第77回全日本中学校長会研究協議会長野大会

- 期日：令和8年10月15日(水)・16日(木) 会場：長野県 ホクト文化ホール
- 大会主題：「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」